
皇帝と眠り姫の運命論

深縁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇帝と眠り姫の運命論

【Nコード】

N1959Q

【作者名】

深縁

【あらすじ】

今日から高校生活2年目が始まる。いつもどおりだと思った日常は、入学式を境に非日常へと変わっていく。心の赴くままに動く生徒会長に、意味深に微笑む先輩。極めつけは入学してきたばかりの新1年生で……。俺の振り回され人生の幕が上がるっ！？
暇つぶしに読んでいただけたらと思います！

幼馴染。

彼女とは生まれてからずっとの腐れ縁。

昼寝も食事もお風呂でさえもいつも一緒だった。

血が繋がっているわけでもないのに毎日彼女の顔を見ない日はなかった。

それは彼女の両親が2人してとても多忙な人たちだったからだ。

うちの両親と昔からの親友同士で、とっても仲がよかったことから、
ほぼ1年中うちに預けられたような状態だったらしい。
昔のおれはそんな事情を知らなかった。

彼女がいつも傍にるのが当たり前で、隣にいないことが想像できないくらい彼女は俺の傍にいた。

愛しいとか好きとかうっとおしいとかいう様々な感情は、一切俺の中にはなく、全てを受け入れていた。

そつ、彼女が突然自分の隣から居なくなるまでは…。

両親は言った。

「仕事の都合で引っ越すんですって」

突然の別れ。

今までの日常がたやすく無くなる現実をおれは小学校2年生があと少しで終わるという時期に味わったのだ。

彼女がいなくなった日のことをおれは一度たりとも忘れたことはない。

あの喪失感

そしてなんともいえないあの感情は…。

それから年月は過ぎ、俺は16歳になっていた。

高校生活も2年目に突入しようとしていた。

「皇紀」そろそろ下りてきてご飯食べないと間に合わないわよ」

清々とした青空の広がる空の下、青い屋根が目立つ一軒家で、ある日常が始まるうとしていた。

風薫る4月。

年度始まりである。

「分かった！」

俺、宮ノ内皇紀。
ミヤノウチ コウキ

今年で17歳になる（まだ誕生日が来ていないので16歳だが）高校2年生だ。

入学したばかりの時は四苦八苦したネクタイも今は軽々と結べる。

俺は部屋の窓から空を見上げていた。

「いい天気だな…入学式にはもってこいか」

高校2年の俺には特別という日ではないのに、身だしなみになぜか力が入る。
いれたくも無いのに。

どうしてかと言うと、友人が生徒会長に1年のとき立候補して確実といわれた奴を蹴落として当選したことによって、勝手に副会長に任命させられたせいなのである。
会長以下は全て指名制だ。

さすがに副会長が、新入生の前でだらける訳にもいかず、しっかりと第一ボタンまで留めてネクタイを締めているわけであった。

「よし、完璧」

姿見でチェックを入れて出来栄に満足し、俺は階下に降りていった。
た。

鞆を忘れることもなく完璧だ。

「母さん、ご飯」

鞆を居間のソファアに置き、テーブルの席に着く。

待っていましたといわんばかりのタイミングで目の前に置かれる朝食の数々。

うちは父親の希望で毎朝和食。

ご飯、味噌汁、焼き魚、卵に海苔。そして漬物といった定番メニューがテーブルに並ぶ。

「いただきます」

手を合わせて挨拶。

これを言わないと母さんがうるさい。

きちんと挨拶しないで食べようとしたら、即座に朝食がなくなるだろう。

まあ、もう昔からの習慣で忘れることは無いけれど。

「はい、どうぞ」

母さんの声を待たずして朝食にありつくのは許されているので、早々にありつく。

そんな俺の行動に被さるように母さんの応えがかえってくるのだ。

「今日は遅いのかしら？」

「今日は入学式だけだから早く帰れると思う。少しだけ生徒会の方で会議があるかもだけれど」

ずずーっと味噌汁を飲んで答える。

これといって誘われているわけではないので、いつもよりは断然早く帰れるはずだと踏んで。

「そう。もしお友達に誘われたとしても今日は断って帰ってきてね」
「なんで？」

いつもは突然誘われて遅くなっても、連絡さえすれば許してくれる母さんが今日はきっちりと念を押してくる。

「用があるから」

はつきりとした返事が返ってこなくて、余計に訳が分からず首を傾

げた。

「返事は？」

にっこりと笑って母さんは返事を待っていた。

宮ノ内家では母親が一番強い。

逆らう必要性も感じなかったので、頷いた。

「分かった」

母さんは返事に満足して、流しのほうに戻っていった。

俺はただただ、首を傾げるだけだった。

後で起きる出来事も知らず。

「よっす」

人の通りもまばらな学校に続く桜並木の途中で、俺は聞きなれた声に呼び止められた。

今日は入学式しかないため、用のない生徒は休みだ。
うらやましいことだ。

ということで、人は数えられるくらいしか見受けられない。

「高知」

振り向いた先には、案の定というか、俺を生徒会に巻き込んだ張本人が、爽やかな笑顔を振りまいて立っていた。

こいつの名前は高知^{たかち} 奏^{そう}。

今年度の生徒会長にしてかなりのワンマン…だと俺は思っている。

確実といわれていた生徒会長候補以下数名を蹴散らして、見事生徒会長になった男である。

「いやゝ今日はいいい天気恵まれたものだやなゝ」

爽やかに笑っている姿は、一見好青年に見える。
が、実際はかなり違々と俺は知っている。

「はよ…」

朝っぱらから無駄に体力を使う気も無かったので、無難に挨拶を返しておく。

「さてさて…桜も満開で、新しい門出にはもってこいの天気で喜ばしいこった」

俺の隣にやってきて横に並んできたので、一緒に学校に否応無しに向かう。

高知はよく喋る。

これぞ生徒会長たる能力の1つだと言わんばかりに喋る。

なので、適当に頷いてやっておけば、勝手に喋ってくれるので、ある意味助かったりする。

たまに適当に返事しすぎて、変な事件や計画に巻き込まれるという失態を起こすこともあるが…。

一応、気を付けてはいるんだぞ！

…まあ、それでもちよこちよこ巻き込まれたりするんだが。

「そうだな」

いつものように高知の話に相槌を打ちながら校舎へ続く道を進む。

「今年の新入生の中に、可愛い子たくさんいるといいな」
「知るか」

爽やかな笑顔を一転、含みのある笑みに変えた高知に賛同する必要も感じず、そっけなく返す。

賛同した暁には何が起こるか予想がつくからな。

「おやおや。皇^{こう}はこの重要かつ大切なことを知るかの一言で切つて捨てるのか？」

「…」

始まった。

こいつは真剣そうな顔をして語りだす。

絶対に心の中で笑ったまま。

こいつはとても器用なのだ。

先生たちがこぞって騙されるほどに。

これに何度被害をこうむったか。

俺は高知の浪々とした声を右から左へと聞き流しながら、学校への道を黙々と歩くのだった。

学校を目前にして急に高知は立ち止まった。

横を歩いていた俺はそれにすぐには気付かず、数歩先に行ってから声が聞こえなくなったことによって気付いた。

大概に俺もやつと言葉を流しきっていたようだ。慌てて後ろを振り返った。

「高知？」

「…あれは」

高知はある方面を見たまま止まっていた。

視線の先には、この桜並木で一番見事な桜。

そして、その桜の木の下で佇む1人の少女。

腰まである栗色の柔らかそうな髪が背中ですらりと揺れており、それと共に桜の花びらが上から舞っていく図は幻想的で、美しかった。高知がおもわず立ち止まってしまったのが分かるほどに。

どれほどの間立ち止まって見ていたことだろう。

強風が舞い、視界を花びらに遮られる。

おもわず閉じた目を開けたときには、もう桜の木の下に少女の姿は無かった。

一瞬の出来事だった。

いち早く現実に戻った俺は、先ほどまで少女がいた桜の木の下を見たまま動かない高知に声をかける。

「おい、遅れるぞ」

「…」

「おい」

「…ああ」

上の空のような声音と共に高知は頷いた。

俺は溜息をついた。

こちらが喋らなくてもお構いなしに喋りまくる高知が、今は意味を為さない言葉を呟き、何かに捕らわれたような瞳で一点を見つめたまま突っ立っている。

いつにない様子の高知に戸惑いながら、このまま式の間も使い物にならなくなってしまうとなると非常に困ると思い、容赦なく後ろからどついた。

「テエツ!!!?」

前のめりに倒れそうになりながらも、かろうじて堪えてこちらを向いた。

高知の目は正気に戻っていた。

若干涙目だったが…。

「目は覚めたようだな」

「…」

俺が叩いたところがよほど痛かったのか、目じりに涙をためたまま無言で睨んでくる。

「お前がいくら色ボケしようとかまわないが、俺に迷惑をかけるな」

辛辣に吐き捨ててやる。

高知は俺の言葉に反応した。

「色ボケ…か…？」

一瞬呆けた顔をした後、豪快に笑い出した。

「皇ーっ！言ってくれるじゃねえかー！」

「本当のことことだろ。あれを色ボケといわずになんていうんだ」

「このおれ様がそんなはずあるかよ…なんとも幻想的な光景について思考が止まっちゃっただけさね」

一笑に付して、高知は歩きだした。

その足取りは俺の言葉に動揺しているかのように多少早足に見えた。不安は残るが、先ほどの光景を見る前の高知に戻ったことに安堵を覚えながら、やつの後姿を少しの間眺める。

その後、俺も高知の後を追うべく歩みを再開させた。

「副会長。これって何処に配置するんですか？」
「それはあそこだ」

ここは体育館。

今日の主役はまだ登校もしていない。

今は、生徒会役員や放送部などの部員等が入学式の準備に追われていた。

「宮ノ内。高知を知らないか？」

「高知なら教頭先生に呼ばれて出て行きましたよ」

近寄ってきた教師に知っている情報を教え、俺は絶えずマイクや椅子の配置などの細々としたことで質問に来る生徒たちを捌いていた。

「分かった。助かった」

「宮ノ内！荷物運んでいたやつが階段で足滑らせちゃった」

教師と入れ違いにやってきたのは、俺と一緒に高知に巻き込まれて生徒会に入った3年の先輩、遠山トオヤマ一哉だ。役職は書記である。

外見的には書記など似合わないほどにがっしりとした体育会系の男

だ。

運動部長と紹介されたらきつとみんな納得すると思われる。

「怪我とかは？」

「ああ、幸いにしてというか、荷物を放り出したおかげで怪我無しだ」

「それはよかった。それで、荷物の中身は壊れたんですか？代えのきかないものですか？」

「どうだろ？先生に聞いてみる」

「分かりました。お願いします」

遠山先輩と俺は軽く挨拶をして、また仕事に戻っていった。

体育館の中の大半を占める椅子の配置を先に準備していたが、まだまだ仕事は沢山あるのだった。

入学式。

新入生たちが座る舞台に向けて正面という場所の右側に教師と、生徒会の面々が座っていた。

ちなみに、反対側は来賓席になっている。

そして、新入生座席後方には保護者席があり、そこはほぼ、埋め尽くされていた。

「後は式が終れば行事の1つが終るな」

俺の隣に座っている遠山先輩が、やり遂げたといった顔をして吐息をつく。

「まだ式は始まってもしませんよ」

俺は遠山先輩に釘を刺し、反対側に座っている高知の方に視線を向けた。

「後はお前のスピーチと片付けだけだ。しっかりやってくれよ」

「おう！まかすとけっ…というか、おれはいつでも完璧だぜ」

自信満々に高知は言う。

何処からその自信は出るのだろうか。

まあ、それぐらいではないと会長職は務まらないのだろうか。

本日の司会進行役の教頭がマイクの前に立つ。

体育館が静かになり、静寂が辺りを包む。

「始まるな」

高知の辺りを憚って抑えた声が、隣に座る俺にはしっかり聞こえた。その直後、教頭がマイクに向かって口を開いた。

「新入生、入場」

新入生の入場である。

ここは桜ヶ丘高校。

少々小高い場所に建っており、校舎に続く通路には見事な桜並木が続いている。

桜が散った後が少々大変だったりするのだが、ここでは端折っておくことにする。

桜ヶ丘高校は在籍生徒人数600人くらいの中型高校で、共学である。

生徒の自主性を重んじているが、偏差値もそれなりに高いため、学生生活を快適に過ごすためには、よい成績を保つ必要があった。

しかし、それさえ保っておけば様々な行事をさせてくれたりと融通のきく、かなりのお祭り高校である。

高知が生徒会長に相応しい学校だ。

俺的には高校選びを間違えた感がややあったりする…。

桜ヶ丘高校を受けたのはただ自宅から通うのに楽だったのが理由だ。

俺の意見は置いておいて、桜ヶ丘高校は近年とても人気があり、年々倍率が高くなりつつある。

倍率がどうして年々上がっているかに関しては知らない。

…知らないから、聞かないように！

新たな出発に相応しい音楽に合わせて、Aクラスから順次入場してくる。

クラスは学年ごとにFクラスまである。

みな一様に幼さの残る顔つきで、やや緊張気味に歩いてくる。

入場してくる新入生の顔は、皆一様にこれからの学校生活への多大なる期待と少しの不安に輝いていた。

去年の自分もこんな表情をしていたのかと思うと感慨深いものがあった。

「俺たちもこんな顔してたのかねえ……」

新入生の顔を眺めていたから、俺は隣の様子に気付かなかった。

次々に入場してくる新1年生を眺めながらあることに気付く。

高知のことだ。

きつとこんな時は冗談で（いや、本気なのか？）女子生徒のことを話題にしているはずだ。

教師に分からないように巧みに隠れて。

なのに、奴は何も言わず、新入生の列をくいいるように見つめているのに、俺は気付いてしまった。

体育館の中が少しざわついたのはそんな時だった。

入場行進も早いもので、今は最後のFクラスが入ってこようとしている最中だ。

その前に入場したEクラスに、周囲をざわつかせるほどの生徒がいたようだ。

なんとはなしにそちらに視線をやり、俺は目を瞠った。

視線の先に、今朝見かけた少女がいたからだ。

あの時遠くから見かけたのにもかかわらず、綺麗な少女だと思った。しかし、今はあの時よりも近い分、その綺麗さは周囲の視線を釘付けにするほどだった。

遠くて判別するには難しかった瞳はヘーゼルナッツの色合いで、瑞々しさを湛えている。

つい周囲が見入ってしまうのも分かる気がした。

ハッと我にかえり、慌てて高知を見る。

朝と同様にまたしてもその少女に魅入られており、他に目がいかなくなっているようだった。

そんな中、ざわめきを残しながらも新入生たちは全員席に着いた。

「これより、第 期入学式を始めます」

高らかに始まりの言葉を体育館中に響かせる教頭の声を遠くで聞きながら、俺は背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

悪い予感つきで。

「おい」

「…」

「おい、高知」

「…」

式を妨害しない範囲の音量で先ほどから声をかけているが、一向に高知は反応を返さない。彼女が座っている場所から視線が固定されている。

（やっぱり一目惚れじゃねえかよ…）

すっかり恋する男に成り果てた、生徒会長をどうしたらいいのか皆目見当がつかなかった。

「宮ノ内」

反対側から声を掛けられて、ハッと意識を戻す。

「遠山先輩…」

遠山先輩の席は俺の横だ。

ずっと俺が高知に声をかけていた様子に、異変に気付いたようだった。

心配した顔の遠山先輩がこちらに視線で問いかけていた。

「どうした、問題か？」

「ええ…かなりやばい状況かもしれません」

冗談など言える気分でもなく、藁にでもすがるように遠山先輩を見て掻い摘んで事情を話す。

一応？高知のプライドを潰さないように遠山に話し終えると、遠山が開いた口がふさがらないといった表情とぶつかる。

俺と同じような心境になって頂けたようで、喜ばしい限りだ。しかし、そうしている場合でもない。

「思いっきり叩いてみたらどうだ？」

「効果ありそうですが、それでは式を妨害するかと」

「ううう…っねってみたらどうだ！」

名案だとばかりに遠山の顔が輝いた。

確かにそれなら式を妨害せずになんとかなるか？

いや、最悪痛みに叫ばれたらどうするか…。

グラグラとその後の展開を考えてみたが、つねる以外の選択肢が出てこなかった。

「はあ…じゃあ、やってみます」

叫ばれそうになった時のために口を塞ぐ手を用意して反対の手を高知の腕に近づける。

ギューーーーーッ

腕の肉を力いっぱいひねる。

しかし、期待した反応は無い。
… どんだけ見惚れんだよ。

「駄目です」

もうお手上げだという風に俺は遠山先輩を見る。

遠山は眉を寄せて困り顔だ。

「高知は外に出しましょう」

思わぬ助けの声は、遠山先輩の隣から聞こえてきた。

「星埜先輩…」

「星埜」

遠山先輩の隣には、これまた3年の星埜^{ホシノ} 慧士^{ケイシ}先輩が座っていた。

役職は会計である。

生徒会に入っただ理由は俺たちと同じだ。

外見的には遠山先輩と反対な感じ。

遠山先輩が体育部長なら、星埜先輩は文化部長の方がしっくりくる。

まあ、会計も似合ってるが。

1つ付け加えておけば、ひよろりとした体躯ではない。

つくところにはちゃんと筋肉はついている。

いつ見たんだとかそういう突っ込みは無しで頼む。

「もう今日は役に立たないでしょ」

「…」

「しかしだな、星埜」

「それか、外には出さないけど在校生挨拶は代理を立てるとか」
「…誰がやるんですか？」

嫌な予感が最高潮まで高まっていた。
恐る恐る聞く。

「そりゃあ、会長が駄目なら副会長の君でしょう。宮ノ内？」

上品な笑顔付きで言われてしまえばもう自分に選択肢は無い。
相手は3年。

俺は2年だ。

こんな時は、役職名より年功序列の方が、力がある。
がつくりと肩を落とす。

「宮ノ内…」

唯一の救い？は、自分を慰めるように肩に置かれた遠山先輩の手と、
同情的な目だった。

…同情的な目は余分か。

「井川先生」

進んでいく入学式。

俺たちの前に座り、舞台に立った校長先生の話をしている生徒会
顧問の井川先生に声をかける。

「どうした？」

「ちよっと…ハプニングがありました…」

「うん」

「会長がするはずだった在校生挨拶ですが、副会長の俺がすること

になりました」

「!？」

井川先生が目を睜る。

それはそうだろう。

今は式の真っ最中なのだ。

前を気遣いながらも後ろを向いてくる。

どうしてか問おうと口を開こうとしたので、高知を指差してやる。

見てもらった方が早い。

指差す方にいる高知を見て、井川先生も絶句し、俺を見る。

「こんな状況で…。何とかならないかいくつかの方法を試したのですが、この状態のままです」

フォローも浮かばなくなり、俺は苦く笑った。

その笑いに何かを感じ取ってくれたのか、井川先生は力強く頷いてくれた。

「よろしく頼む」

これで了承は取れたんだが…。

はあ。

もう溜息しか出てこない。

高知の作った挨拶の原稿を握り締めながら、重い溜息を俺は吐くのだった。

07（前書き）

途中で視点変わります。

適度な長さで校長先生の話が終わり、他の来賓の方々の話も問題無く終わる。

現在は、今年の新入生代表者が挨拶を述べている。

これが終われば次は自分だなあとそれほど緊張という緊張もせず待つ。

ここまできたらもう、腹を括るしかない。

人前で話すのは好きではないが、苦手というわけではないので、なんとかなるだろう。

そうこうしている内に、新入生挨拶も終る。

教頭先生にも顧問の井川先生が話を通してくれているので問題は無い。

式は後少しで終る。

さっさと終わらして帰りたいと思った。

「在校生挨拶。在校生代表、宮ノ内皇紀」
「はい」

やってきますか。

腹を括れば堂々としたもので、皇紀は遅くもなく早くもない速度で前に進み出た。

来賓、保護者、教師といった場所に視線と体を向け、お手本のような礼をする。

舞台横の階段を上がり、国旗と校旗にも挨拶をすませ、壇上に立つ。

皇紀が前を向いた瞬間、少々新入生と保護者席からざわめきが起った。

大抵、生徒会長の派手な外見に隠されがちだが、整っていて落ち着きもある皇紀は、会長と同じくらい生徒たちに人気があった。

それも、本当は生徒会長がやるはずだった在校生挨拶を彼がすることになり、新入生にとって一番最初の印象に残る先輩が皇紀になったのである。

その後の影響などは露とも知らずに、皇紀は淡々と祝辞を述べていく。

それがまた一層皇紀のオーラを引き立たせ、新入生たちの視線を釘付けにしていた。

「うわぁ…きつと後で、高知は悔しがるだろうね」

はんなりと笑って、星埜は席から全ての様子を見ていた。

「おいおい…笑い事じゃないんだぞ」

「ふふふ…あれ？」

「どうした？」

「ほら、あの一番目立っている新入生の子」

入場の際、ざわめきと共に体育館に入ってきた少女に遠山の視線を誘導する。

「ああ、どうした？」

「…君はまったく。見てみなよ。あの真剣な目」

星埜の言葉に従って注視する。

「あ」

「なにやら意味深だね。彼女の宮ノ内を見る目は」

「知り合いか？いや、しかし宮ノ内はそんなことはこれっぽっちも…」

首を傾げる遠山を他所に、星埜は意味ありげな笑みを見せる。
だが、式に意識を戻させようと星埜はひとたび声をかける。

「ほら、そろそろ祝辞も終って、式も終わる。あと少しだから他ごととは後、後」

「あ、ああ」

自分から話をふっておきながら、それをおくびにも出さず遠山を促し、自分も式に意識を戻す星埜であった。

無事式も終わり、俺はほっと一息ついた。

後は新入生が退場するだけ。

教頭先生がマイクの前に立つ。

「新入生退場」

そろそろ新入生が入場してきた順で退場していく。

「宮ノ内、お疲れ様」

「いえ、無事終わって本当によかったです」

拍手を送りながら、俺たち生徒会役員の面々は苦労を互いにねぎらいあった。

年度替わってそうそうのハプニングに、今年1年を思っで涙が出るかと思っただのだ。

「まあ、まだ片づけがありますけどね」

「それは会長に率先して動いてもらいましょう」

「そうしましょう」

俺と星埜先輩は互いに共犯者の笑みを顔に上らせる。

その近くで居た遠山先輩は何故か固まってしまった。
なんか怖い物でも見たのだろうか？

そんな時である。

ガッターーーーーンッ！！！！？

けたたましい椅子の倒れる音がして、新入生の退場していく列が止まる。

慌てて、俺たちは音の発生場所に視線をやった。
それは新入生が座っていたところだった。

「いったい何が…！」

「会長！」

俺が把握する前に、高知が先程までの間抜け面はなんだったのかというほどの凛々しい顔で、走っていくのが見えた。
音の発生源のところに走っていく高知のスピードに啞然とする。

「宮ノ内。どうやら彼女が関係しているようだよ」

冷静な星埜先輩の声に現状を思い出し、自分も輪になっている場所に近づいていく。

近づいて分かった。

どうも例の彼女が椅子から立ち上がる際に倒れてしまったらしい。
状況を把握しようとする俺をよそに、高知は素早いもので、もう輪の中心におり、例の彼女に声をかけていた。

クラスを担当となる教師も事態に気付いたのか先頭を離れてその場

に戻ってきており、それを囲うように同じクラスらしき生徒たちがいた。

「大丈夫かい？気分でも悪くなったのかな？」

常以上の優しい声で、高知が話しかけている。

そして、彼女が立つのを手助けしようと手をさし出していた。

だが、彼女はその手を取ろうとはせず、自分であぶなかしいながらも立ち上がる。

しかしすぐに膝をついてしまうのが見えた。

教師も何かしら話しかけ、手を差し出すが、彼女は一向にその手を取ろうとはしない。

「どうして手を取らない？」

「嫌なんだろうね」

無意識にでた疑問の声に返事が返ってくるとは思わず、ギョツと声のした方を見る。

そこには星埜先輩と遠山先輩。

星埜先輩はなんだか分かっている様子で平然とその様子を見ている。

「嫌っ！触らないで！！」

突如、切羽詰まった声が響き驚いた。

そこには例の彼女に近づき、起き上がらせようとして拒否された高知がいた。

「おいおい…無理じいか？」

無理に触ろうとした高知に気付き、眉間にしわがよる。

「まあ、いつまでも退場の列を止めておけないしねえ……」

星埜先輩の声が後ろから聞こえてくる。

「しかし星埜先輩、嫌だつて言っているし……」

「でも自分では動けないんだよ。仕方がないじゃない」
「……」

星埜先輩の言い分も分かる。

けれども何故か全てを納得できなかった。

教師も高知も彼女を扱いかねて困っていた。

「宮ノ内」

「はい？」

「君が運んであげなさい」

「は?!」

もやもやと胸に沸き起こる感情も忘れ、勢いよく星埜先輩の方を向く。

星埜先輩は今なんと言った？

「君が運んであげなさい」

「高知も先生方も拒否られたのに：無理ですよ」

「いや、僕は大丈夫だと思っているんだけどね」

意味深な笑みでこちらを見てくる星埜先輩に、俺の頭の中はこんがらがる一方だ。

「：そうだな、物は試した。宮ノ内行って来い！」

何故か遠山先輩までもが俺に行って来いと言う。
本当にわけが分からん。

「遠山先輩まで…」

「ほら、先輩命令」

先輩命令とまで言われてしまえば断れない。

俺はあからさまに肩を落とした。

俺のこの気持ちたちが2人に伝わってくれればと思いつながらのパフォーマンスだが…きっとスルーされるんだろうな…。
全てが虚しくなりそうだ。

「…じゃあ、駄目もとで行ってきますよ」

「おう」

先輩2人に見守られて、輪の中心に入っていく。

彼女を取り囲んでいた外側の生徒たちが俺に気付いたのか、道を開けてくれる。

なかなか気がきいている1年生たちだなと感心する。

どうも今年の1年生たちは当たりのようだ。

そんな場合じゃないと思いつながらも、ついつい見定めようとしてしまふ。

悪い癖だ。

「高知」

「皇。お前も来たのか？彼女が触れられたくないらしくて…な」

「…ちよつといいか？」

彼女に近づこうとする俺を何故か高知が邪魔をするように前を塞ぐ。

「無理だつて」

俺を彼女に近づけさせたくないようだ。

俺はだれかれ構わずナンパすることもないし、触ったからといって感染しないぞ。

…俺は女たらしではないし、そして、ばい菌でもない。

高知の俺への認識はどうなっているんだ？

高知に物申したい気持ちでいっぱいになったが、こんな人が沢山いるところである話でもない。

諦めよう…。

（…今はそんなところじゃないだろう。それもお前の彼女じゃないだろが…）

そうはいつでも、心の中の声までは抑えることは出来なかった。

彼女に近づけず、どうしたもんかと悩んでいると、それを見かねた

星埜先輩が高知にどくように言ってくれた。

ナイスですよ！先輩！！

さっきのはチャラにしておきます！

「星埜先輩なんで…」

「はいはい、いいーからいいから。これ以上時間を延ばすのは得策じゃないでしょ」

「…」

高知が押し黙る。

星埜先輩は苦笑して、俺を促す。

俺は頷いて、彼女に近づいた。

「大丈夫か？動けないなら手を貸してもらうか、運んでもらえ」

彼女の前にしゃがみ込みながら言う。

これといって普通の調子で。

俺の声を聞いたとたん、彼女は俯けていた顔を上げた。

「！」

急に顔を上げるから驚いた。

彼女の視線と俺の視線が交わる。

「誰か女の子にでも手を貸してもらうか？」

彼女は無言で首を振る。

「動けるまでここにいいのか？」

頷くのかと思えば、意外なことに彼女はまた首を振った。

「じゃあ…どうしたい？どうして欲しい？」

「…」

「…」

無言が続く。

「皇、お前じゃ無理だって」

高知が割り込んできた。

何をこいつはそんなに焦っているんだ？

いつもと違って、余裕の『よ』の字もない。

しかし、確かに彼女の反応もこれといって芳しくないので、高知の言葉を区切りにして、立ち上がるうとした。

「！…ッ」

「うわっ」

立ち上がるうとした瞬間、彼女に縋られてしまった。

倒れこみそうになるのをかろうじて耐える。

さすがに予想外の動きには簡単には対処できない。

倒れなかったことことを褒めて欲しい。

「「「！」「」」」

そんなことを悠長に考えた俺を他所に、周囲はそれどころではなかったようだ。

教師も高知もその光景に啞然とした顔をしていた。

無言の空気が俺に重くのしかかってくる。

あからさまな視線は出来ればご遠慮したいのだが。

「あゝ…」

「…」

ギョツと制服を掴まれたまま、俺は周囲を見る。高知の固い表情や教師の呆けたような表情。

そして最後に星埜先輩と遠山先輩に行き着いた。

星埜先輩は笑っていた。

そして入り口を指す。

それをみて俺は冷静に戻った。

うん？俺もちよつと動揺していたらしい。

「俺が保健室まで運ぶ…OK？」

彼女に確認をとる。

彼女の頭が縦に揺れた。

それを了承と受け取り、彼女を抱き上げた。

いわゆるお姫様抱っこと呼ばれるしなものだ。

この時点で、周囲の視線はあらかた意識からシャットダウンする。認識しても疲れるだけだからな。

「うわ…軽いな」

予想以上に軽く、驚きのまま口から言葉が出てくる。

すぐさま体重のことに關しては女性にはタブーかと思ひ直し、口をつぐむ。

しかし、彼女からは非難の声はあがらなかったもので、こっそりと吐息を吐いた。

「彼女は保健室に運んでおきます。後はよろしくお願いします」

顧問の井川先生に声を掛けて入り口に向かう。

これ以上ここに留まるのは得策ではないから、みんなの視線を背中に受けながら体育館を出て行った。

「…なんとも楽しくなりそうだねえ」

この時、ポツリと星埜先輩が声を零したのだが、誰にも聞こえてはいなかった。

ガラガラガラ…。

保健室。

沈黙のまま、保健室までたどり着き、腕に彼女を抱き上げたまま保健室のドアを器用に開ける。

保健室には誰もいなかった。

当たり前である。

今さっきまで入学式だったのだ。

養護の先生もばっちり入学式に参加だ。

「あゝ…とりあえずベットに寝るか？」

ここまで運んでなんだが、どうしたらいいのか首をひねる。

だが、立ってられないのなら寝かせてしまえと結論を出し、彼女をベットに運ぶ。

「…」

彼女は無言。

俺も無言。

途方に暮れた。

「宮ノ内君、ごめんなさいね」

勢いよく保健室の出入り口が開き、先生が駆けつけてきた。先生の勢いをみるに、廊下を走ってきたような気がしたが、気付かなかった振りをする。
ここは空気を読むべきだ！

「…いえ。じゃあ、体育館の片付けあるんでおれはこれで…え？」

先生が来たことにほっと吐息を漏らし、体育館に戻ろうとした。

…のだが、それは阻止される。

制服の端を握ったまま離さない彼女に。

「…どうした？」

「…」

振り向いて、問いかけても返事なし。

ただ、ギュッと制服の端を握って離さない。

「…どうして欲しいんだ？自分の口で言え」

さすがに彼女のだんまりに疲弊し、そっけない言葉が口をついて出る。

無言の言葉を拾えるほど察しのいい人間ではない。

「…」

「言わないのなら俺は行くぞ」

「み、宮ノ内君」

戸惑ったような先生の声が背中の方から聞こえてきたが、あえて無視する。

申し訳ないが、これは俺と彼女の問題（？）だからだ。

「…側に」

「なんだ？」

「側にいて」

微かな声。

普通だったら掻き消されてしまうほどに小さな声だったが、あいにく保健室は静寂に満ちていた。

ポトリと言葉は保健室に落ち、俺の耳に入ってきた。

「…最初からはっきり言え」

ベッドの横にある丸椅子に座り、彼女の頭をクシヤリとなでた。

彼女の手はまだ俺の制服を握ったまま。

「逃げやしないから離してくれないか」

「…」

緩慢な動作と共に制服から彼女の手が離れる。

「よし」

ついつい犬を褒めるような言い方になってしまった。

満足して、背後に立っている先生を振り返り、俺は言った。

「と、言うことなので、彼女には俺がついています。先生、申し訳ありませんが、井川先生に伝えてきてくれませんか？」

「え…ええ、分かったわ。」

俺たちのやりとりをボウツと見ていた先生は、我にかえり、頷くと保健室を出て行った。

「…」

「寝てな」

じつとこっちを見ている彼女に言うが、目を閉じようとしなかった。まだ何かあるのだろうか？

いや、この視線は俺が出て行かないか見張っているのか？

「…」

「ここに居ると言っただろう」

「…手を」

手を差し出してきた理由を察し、固まった。

そんなに俺が目をつぶったら出て行くと思っているのか…。

そこまで薄情にみえるのか。

ついつい彼女を凝視する。

しかし彼女もこちらを静かな…いや、揺れる瞳で見ている。

逸らすことなく。

「手を握っでいて」

もう一度彼女から、今度ははっきりと言葉にかえた願いが聞こえた。声に促されるように俺は手を差し出す。

彼女はその手を握り、そっと目を閉じた。

「はあああああ」

特大の溜息。

発生源は俺自身。

片方の手は自分以外のぬくもりと共に。

もう片方の手で、俺は頭をガシガシとかいていた。

「なんだってんだ…」

自分の手だけ、拒まない少女。

そして、それをなんだかんだ言いながら受容している自分。

分からないことだらけで、溜息しか出てこない。

寝ている少女を見る。

見覚えはない。

…多分。

言い切れるほどの自信がないことにつくりだ。

保健室に遠い喧騒が微かに聞こえる。

保健室だけ切り取られた空間のように静寂が支配していた。

ガララ…

「…ッ」

どれくらい寝ている彼女を見ていたのだろうか。
保健室のドアを開ける音にハッと現実に引き戻される。

「宮ノ内いるか？」

「は、はい」

遠山先輩の声。

白いカーテンに隔離された空間から返事を返す。
室内を歩いてくる音が響く。

少ししてカーテンが揺れ、遠山が顔を出す。

「こっちは無事終わったぞ。またこれからの予定についてはまた明日話し合うってことになった」

「あ、はい。ありがとうございます。お疲れ様です」

「…」

「遠山先輩？」

一通りの段取りなどの話は終わったのだが、遠山先輩は動かず、ある一点を凝視している。

遠山先輩の視線を辿ると、そこにはオレと彼女の手が…。

「…こ、これは…」

ずっと握っていたのを忘れていた。

不覚！

慌てて外そうとするが、遠山先輩に無言で止められる。
以心伝心じゃない。

ただ、遠山先輩が頭を振ったからだ。

「その子が起きてしまっただろうが」
「……」

居心地悪が悪くて体を揺すった。

外そうとした手をそのままに、遠山先輩を複雑な目で見つめた。

「高知が荒れてるぞ」

ニヤリと少々意地の悪い笑顔と共に爆弾を落とされる。

遠山先輩にしては珍しく意地悪な言葉だ。

たかが知れてはいるが。

「……だと思いました」

そうだろうなとは思っていた反応を高知が案の定していると聞かされて、余計に疲れを感じる。

「大丈夫だ。星埜もついてる」

そうだろうか？

余計に煽っているような気がして気持ちは晴れない。

ガララ…

遠山先輩と話しているうちに、保健の先生が帰ってきた。

「あら、遠山君来ていたの？ 宮ノ内君、井川先生に伝えといたわよ。今日はもう生徒会の方はいいからそのまま帰るようになって」

「ありがとうございます。お手数おかけしました」

「いいのよ。それよりもその子の親御さんに連絡を入れたから、もうちょっとしたら迎えが来ると思うわ」

「そうですか」

寝ている彼女を起こさないように、出来るだけ小さな声で話をした。

「宮ノ内。俺は生徒会の方に戻る」

「あ、はい。わざわざありがとうございます」

片手を振って保健室を後にする遠山先輩に軽く頭を下げ、視線をベツドのほうへ戻す。

俺は眠っている少女の顔をなんとかはなしに見る。

見れば見るほどに緻密な造作に、つつい魅入ってしまった。

ガララッ…

「すいませーん。宮ノ内います？」

「！」

聞きなれた声が聞こえて、とつさに後ろを振り向くが、カーテンに遮られて見えない。

分かっていたことなのに、動揺してしまったようだ。

「あら、高知君。宮ノ内君なら奥のベッドの方にいるわよ。でも、あの娘が寝ているから静かにしてあげてちょうだいね」

「はい」

高知が何でここに。

生徒会のことでは何かあったのか。

それとも…。

いろいろなことが頭の中でめぐり、混乱する。

混乱している間に目の前のカーテンが開き、高知が顔を覗かせる。

高知は先程先生と話していた時とは違い、少し固い表情をしていた。

「…よう」

「お、おう。お疲れ」

なんとなく気まずくて、皇紀は視線を少しそらした。
高知の視線を感じる。

男に見られて喜ぶ趣味なんて無いので、やめて欲しい。

「
…」

沈黙が支配する。

「
…」

「片付けでなんかあったのか？」

いつまで待っても高知が口を開こうとしないので、仕方無しに口を開く。

何故に俺がここまで俺が気を使わないといけないんだ…。

「
いいや、万事つつがなく。俺がいて問題なんて起こさせるか
よ」

不遜だ。

やっと口を開いたと思えば、いつもどおりのふてぶてしさ。
いつもどおりの高知の口調に、力が抜けた。

「じゃあどうしたんだ？…彼女が寝ているから、その枕元に居られ
たらさしあたりがあるんだが」

「…お前はいるのか？」

「…手を掴まれているんでな」

「
…」

また無言。

高知にはれないようにひっそりと溜息をつく。
面倒だな、本当に。

「俺は…」

高知は椅子に座っていることにより視線より下にいた俺を強い目で睨みつけて言った。

何故睨みつけられなければならないんだ！

「…」

「負けないからな」

いきなりの宣言。

高知の言葉は唐突で、意味が理解できない。

「はあ？」

思いつきり疑問が口をついて出てしまった。

素直なんで…疑いの目で見ないでくれよ。

高知はそれにより一層闘争心を刺激されたのか鼻息も荒く、俺を睨みつけてきた。

友に睨みつけられるってどうよ、本当に。

「だから！」

次の発言はさすがに大きい声で、ベッドで寝ている彼女が緩慢な動作で身動きする。

「高知君！静かにしてちょうだいって先生言ったわよね」

カーテンの向こう側から先生の非難の声。

高知は口を開けたまま何かを言おうとして数回口を開けたり閉じたりしていたが、最後は自分を何とか諫めて口を閉じた。思いつきり不満そうではあったが。

そんな時、保健室のドアが開いた。

「失礼します。ご迷惑おかけしました。先程ご連絡もらいました、筒井です」

「ああ、どうも。今、ベッドの方で寝ているんですよ」

朗らかな可愛いらしい声をした女性の声が聞こえてきた。彼女のお迎えが来たらしい。

だが、俺にとってそんなことはどうでもよいことだった。

この声。

いつも聞いている声だから間違えるはずがない。

彼女の手を振りほどいてカーテンを開ける。

「おい、皇！」

俺の唐突な行動に驚いたのか、高知の呼びかける声が後ろからかかる。

しかし、今はそれに答える余裕は無かった。

「宮ノ内君！？」

ギョツと先生がこちらを振り向いた。

けれど、全てを無視して先程の声の主に近づいていった。

多分後で振り返れば余裕無さ過ぎだろって落ち込みそうなほどに体裁構わず、ずかずかと。

「なんで…」

目の前にいるのは間違いなく、数時間前に見た顔だった。黙ってなんていられなくて、声が俺の口から零れ落ちる。

「なんで母さんが来てるんだよ！」

動揺しまくりだ。

学校で使っている冷静な仮面をかなぐり捨てて、目の前にいる人物に詰め寄った。

「母さん?!」

高知と先生は交互に俺と彼女を迎えに来た女性　俺の母親を見ているのが視界の隅に見えた。

「まあまあ、皇紀。ここは保健室でしょう。騒いではいけないわ」

俺の驚きなんてなんのその。

母さんはにこりと上品に微笑んだ。

「…どうしてここに」

「お迎えに来たのよ」

「誰をつ」

「それは…あらら、皇紀がうるさいから起きちゃったわ。おはよう、珠姫ちゃん」

母さんの言葉に、ハッと後ろを振り向くと、そこには寝ていたはずの彼女がいた。

「気分はどうかしら、珠姫ちゃん」

「…大丈夫」

固まった俺を放置したまま、母さんは彼女に近づいていく。彼女も母さんに普通に返事を返す。

「か…母さん。珠姫って」

珠姫という母さんの呼びかけに、固まっていた俺は反応した。だって珠姫といえば…。

「あらま、嫌だわ。うちの愚息は珠姫ちゃんのことを忘れちゃったのかしら。小さなときからずっと一緒にいたのに」

「忘れるわけがない！…ってか、珠姫なのか？」

おそろおそろ彼女に声をかけた。

彼女は首を縦に振る。

信じられない面持ちで彼女の…珠姫の動きを見ていた。

「そんな…」

「本当は帰ってきてからのお楽しみだったのよ。都ちゃんたちのお仕事が一段落したから戻ってきたのよ」

母さんはケラケラと笑いながら告げる。

俺の動揺も気にせず。

とても母さんらしいが…。

「…」

一瞬殺気を宿した目で母さんを見たが、すぐに肩を落とした。母親にはかなわない。そんなもんだ。

逆らうだけ無駄だと言つことを嫌と言つほど体験しているので、こ
ういうときは早めに諦めることが肝要だ。

「… 皇ちゃん」

「珠姫…」

いつの間にやら…いや、俺が動揺している間に、近寄ってきた彼女が、俺をすぐ側で見上げていた。

先程までの彼女の行動が、珠姫だと分ければ全て納得できてしまう
自分がいることに少なからず驚く。

俺の心はもう彼女を珠姫だと認識してしまっているのだ。

「皇ちゃん」

腕に絡んでくる珠姫の腕を享受しながら、母さんの方を向く。

心が納得しても、やはりすぐには珠姫にどう対応したらよいのか戸
惑ってしまったから。

「… ところで、なんで母さんが迎えに来ているんだ」

「それがね、都ちゃんたちすぐには帰ってこれなくなっちゃったの
よ」

片手を頬にあてて溜息をつく。

母さんのそんな仕草を見ていたら、その後にさらりと爆弾を落とさ

れた。

「だから珠姫ちゃんを当分の間うちで預かることになったから」

「は？」

「都ちゃんたちもそうしてくれると助かるって言っていたから。皇紀によろしくって」

「な…」

俺は銅像のように固まってしまった。

「皇ちゃんと一緒」

ギユツと手を握ってくる珠姫をギギツと首を動かして見る。
珠姫は心なしか…。

「珠姫ちゃん嬉しそうね。嬉しい？」

「嬉しい」

止めを刺された…。

「…そうですか」

頷く以外に何が出来ただろう。

「珠姫ちゃんは連れて帰ります。お世話になりました」

驚きを隠せない保健室の先生に母さんは挨拶をする。

かろうじて先生も職務を思い出したのか、慌てて頭を下げる。
 どれだけ驚いてるんだろうな…。

かくいうオレも、人のことは言えないけど。

「じゃあ、行きましょう。皇紀も一緒に帰るでしょ」

「…ああ。でも鞆取ってこないと。先、行つといってくれよ」

「分かったわ。さて、珠姫ちゃん行くわよ」

「皇ちゃんに行く」

「あら、皇紀に付いていつてくれるの？ありがとね」

「おい、ちよつと待て…」

「じゃあ、先に行つて待つているわね」

さつさと話を済ませて去つていつてしまった。

相変わらずマイペースな人だ。

「…」

気付けば珠姫を置いていかれた。

…迎えに来たんじゃないのか？

いや、車で待っているのだろうが…納得いかないのは何故だろうか。

「でさ、珠姫ちゃん」

「…」

「俺さ、生徒会長だし、困ったことあったら力になるから」

「…」

生徒会室においてあるカバンを取りに行く道なりで高知の声だけがやたらと響いていた。話しかけても珠姫は何も返事をしないのに、話が途切れないのだ。

俺は感心していた。

珠姫は珠姫で俺の腕にベツタリだった。

気まずいのは俺だけか？

「…高知」

「でさ」

「高知」

「なんだよ、邪魔するなよ」

「…こいつ、さっきまで保健室で寝てたんだ。今日はそれくらいにしとけ」

「…すまん」

「分かってくれたならいいんだ。それに着いたしな」

第3校舎の三階、一番奥。

それが俺たち生徒会メンバーの根城だった。

「珠姫ちゃん…ごめんな。疲れているのに。…何かあったらほんと何でもいいから言ってな」

「…」

やはり無言。

さすがに高知が可哀想になったから、珠姫に声をかける。

「珠姫。高知が何かあれば力になってくれるってさ。礼言っとけよ」

「…ありがとう」

「！お、おう。まかしておけて」

珠姫が視線を初めて向けたことに高知は興奮したのか、どもりながらも嬉しそうであった。

よし、任務は完了した。

変な達成感を感じた。

ホッとしたのもつかの間、珠姫は更に言葉を続けた。

「でも、私には皇ちゃんがいるからいいです…」

ピキン

その場の空気が一瞬にして凍った。

（珠姫~~~~~！！）

心の中で悲鳴を上げる。

「た、高知…」

「…じゃ、じゃあ俺用事思い出したから行くな！珠姫ちゃん、皇またなっ！！」

クルリと180度まわって逆走していく高知の背を痛々しい目で見送る。

どっぷりと疲れを感じた。

ため息が出るのを止められない。

いや、止めてくれるな。

「皇ちゃん？」

「ああ…急がないと母さんが怒るな」

なんとか珠姫に笑いかけて、オレは、生徒会室ドアを開けるのだった。

高校生活2年目に突入した初日。

俺のところに変化をのせた春風が飛び込んできた。

珠姫という名の春風が。

こうして、俺の2年目の高校生活は騒がしく、幕を開けたのだった。

幕間 01

「亜紀ちゃん、本当にごめんね」

夕食が終わって、就寝するまでの間の時間。

夫と共にテレビを見ていた宮ノ内家の最強と名高い宮ノ内 亜紀恵は一本の電話を受けていた。

亜紀恵の顔は始終笑顔だ。

それもそのはず、電話の相手は十何年来の親友で、珠姫の母の筒井 澪だったからであつた。

「いいのよ。澪ちゃん気にしないで。全然迷惑じゃないから」

「そう？」

「ええ。それよりも、澪ちゃんたちのほうは大丈夫なの？」

「大丈夫と言えば大丈夫なのだけど、当分こちらのほうに居ないと
いけなさそうなの」

「あらあら。大変ねえ」

「本当！わたしもマコも仕事終わらせて『さあ、引越した！』と思
ったのに、馬鹿な新人が」

聞いてといわんばかりに澪の言葉は止まらず、亜紀恵は相槌を打ち
ながら聞いていた。

「お気の毒さま。珠姫ちゃんのことには任せておいてね！」

「ありがとう、亜紀ちゃん!!」

「うん。と、言っても、全部皇紀がお世話してるけどね」

「それは想像通りというか…でも、皇くんが悪いわね」

「いいのよ。皇紀が自分でしてることだもの」

「とか言って、どうせ珠姫がいちいち皇くんの側で何かするんですよ？」

「ふふ。さすがね、澪ちゃん」

「分かりきったことじゃない。珠姫は意識が生まれてから私たちより、何より皇くんが大好きなんだもの」

「それにしても今まで音信不通だったじゃない」

「それこそ色々あったのよ。連絡入れる間もありやしないわ」

「それも凄いわねえ」

「ま、終わったことよ。珠姫は皇くんがいれば大丈夫でしょうし…。というか、皇くんのほうが心配よ」

「そうねえ…皇紀もお年頃だから」

「まあ、何かあってもこちらは全然OKなんだけど」

「あはは。本当に皇紀ってば好かれてるわねえ」

「ううん。愛しちゃってるのよ」

「ふふふ…そうね」

「出来るだけ早くそっちに帰れるように頑張るけど、それまでお願いね」

「ええ。任せておいて。皇紀は問題起こさなかったからちょっと物足りなかったから楽しみよ」

「そう言ってくれると助かる」

「珠姫ちゃんは大丈夫。皇紀とわたしと皇輔さんで守るから」

「うん…。あ」

「ん？」

「今、珠姫は？」

「…それ聞くの？」

「そう言われると余計聞きたくなつたわ」

亜紀恵は視線を2階と時計に走らせる。
お風呂は終わっている。
それならば。

「じゃあ、教えてあげる。多分この時間だと皇紀は予習をしている頃だから、構ってもらおうと皇紀の側をウロチヨロしているでしょうね」

「あは。ウロチヨロかあ…」

「あわよくば、皇紀の膝をゲットして、まどろんでいるでしょうね」
「ぶっ」

「可能性的には五分かしら」

「あら？五分なの？」

「ええ。今のところは」

「…『今のところ』は、なのね」

「時間が経つたびに、珠姫ちゃん優勢よ」

「…皇くん」

「ふふふ。やっぱり、皇紀も珠姫ちゃんには弱いつてことよ」

「もしかして、珠姫的には今のこの状況って望むべくも無い状況かしら」

「そうかもね」

「ちよつとお母さんは複雑よ、珠姫…。マコが聞いたら泣くわ」

「ああ…真くんは泣くでしょうね」

クスクスと笑いが漏れる。

皇輔の視線がテレビから逸れて亜紀恵のほうにやってくるのにウィンク1つ。

それにやれやれといったように肩をすくめる。

そんな夫の行動にますます笑みを深くする亜紀恵。

「言わないであげたらって思っけど、どうせ邊は言っちゃうんでしょ？」

「ええ。マコの泣き顔好きだもの」

「悪い子ねえ」

「お互い様よ」

「あら、言っわね」

「言います」

「まっ」

「…」

「…」

「「ぷっ」」

笑いが回線を挟んで弾ける。

笑いあう声とテレビから流れてくる音だけが部屋の中を満たす。

「あはは。よく笑ったわ。そろそろ切るわね」

「ええ。何かあれば連絡して。こっちも何か楽しい進展があれば連絡してあげる」

「それはぜひ。些細なことでも連絡頂戴」

「メールするわ」

「楽しみにしてる」

「じゃあね」

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

回線が切れた音が聞こえる前に、受話器を戻す。
電話が来るまで座っていた夫の横に戻る。

「やあ、奥さん。とても楽しそうだったね」

「ええ、旦那さま。とても楽しかったわ」

茶目っ気たっぷりに話しながらお互いの視線はテレビの画面。

「澪さんと真は相変わらずなようだね」

「ええ」

「当分帰って来れないようだね」

「半年はこっちに帰ってこれなそうだわ」

「大変だね」

「そうね」

穏やかな時間。

こんな時間は昔からずっと続いてるもので、それを壊すものはいない。

しかし、最近は　。

「珠姫っ」

2階から微かに聞こえた皇紀の声。

それは多少怒った声で、困った声だった。

「やれやれ…今日は随分皇紀が抵抗しているようだな」

「そのようね。…皇紀ってば抵抗するなんていけない子ねえ」

「亜紀恵さん」

ソファから立ち上がって、今にも皇紀の部屋に突入しそうな妻を皇輔は止める。

「皇輔さん」

「皇紀と珠姫ちゃん2人のことなのだから介入は無しだよ」
「だって」

ぷつと頬を膨らます亜紀恵の頬を優しくつついて皇輔は優しい笑みを見せる。

「抵抗したって、最後には皇紀が負けるんだからいいじゃないか」
「…」

「亜紀恵さん？」
「はい」

少々不満そうな顔だが、突入は諦めたのか、皇輔の横に大人しく納まる。

さて、皇紀の意見的には母である亜紀恵が最強であるが、真に最強なのは誰なのか…。

一言言うならば、宮ノ内家は夫婦円満だということだ。

こうして宮ノ内家の夜は更けていくのだった。

幕間 02

カリカリカリカリ

じーーーーー

カリカリカリカリ

じーーーーー

カリカリカリカ

「…珠姫」

「なあに？」

「…肩に頭を乗せるのをやめてくれ」

「いや」

「…背中にもたれかかるのも」

「いや」

「…」

お風呂からあがって、30分。
それぐらい経っていた。

いつものように水分補給をし、自室に戻って問題集を開ける。
何冊目になるかはもう分らないノートに問題を写して解いていく。
このほば毎日の行動に陰が射したのはいつ頃からか…。
いや、皇紀には分かっていた。

珠姫が、宮ノ内家に来たその日からだった。

肩と背中にかかる重みを無視して、問題を解くのを再開させた。
ノートに書き込む音だけが皇紀の部屋を支配する。
だが、それも数分のことだった。

「…重い」

ますます肩と背中へ重さがかかる。
これではさすがに勉強を続けられない。
ため息を零して椅子を引く。

途端、背中の重みはなくなり、膝の上に重みが…。

「珠姫」

咎めるような声が皇紀の口から上がる。
しかし咎められた張本人は聞く耳を持たないのか、べったりと皇紀

の首の後ろに腕を回して引っ付いた。
その際、皇紀の胸板に頬をすり寄せるのも忘れない。

「…珠姫」

「…」

「まだ今日のノルマが終わってない」

「いや」

「…」

腕に力を込めてますます引っ付く珠姫。

皇紀は複雑だった。

「…珠姫」

「なあに？」

「今日：俺のところに『俺は筒井珠姫の何なんだ』と聞きに来た奴
がいたんだが覚えているか？」

「うーん？」

「1人じゃないぞ。6人もだ」

「ふ…ん」

「…」

明確な返事が返ってこないことに肩を落としながらも、返事が返って
くるとも思ってたなかったこともあってそこまでの脱力感には皇紀に
はない。

しかし、今日の出来事を思い出せばずっしりと沈むものがあって…。

皇紀は今日の勉強を放棄することにした。

別に毎日しなければならぬものでもない。

皇紀にとってそこまで重要な時間でもなかった。

「珠姫」

「なあに？」

「…もう寝るか？」

「皇ちゃんが寝るなら」

さつきと違つて明確な返事が返ってくる。

それに突っ込んでやりたいと思いつつも、皇紀は机の上のノートと問題集を閉じて珠姫を抱き上げた。

軽い身体にむくむくと心配がもたげてくる。

珠姫は食べる量が毎食少ないのだ。

皇紀はそれがとても気になっていた。

「珠姫」

「なあに？」

「もつとちゃんと飯食えよ」

「皇ちゃんが食べさせてくれるなら」

「…」

珠姫をベッドに下ろして横に置いてあつた布団を広げる。

ベッドが皇紀の物で、布団が珠姫の物だった。

本当は、珠姫の部屋も用意されているのだが、珠姫がその部屋を使つた試しなど無かつた。

ただ、珠姫の荷物が置かれているだけだ。

皇紀が何度言おうと珠姫は皇紀の部屋にやってきて、皇紀のベッドに潜り込むのである。

皇紀も数日は抵抗したが、父と母の「構わないだろう」の一言で抵抗する力を失つたのである。

だが、最後の抵抗として布団が運び込んだのだが、それを珠姫が使

うのはせいぜい皇紀が眠り込むまでだ。

朝氣が付くと皇紀の横で、皇紀のパジャマの裾を握って寝ているのだから布団が役に立っているのかは怪しかった。

それでも皇紀は毎日布団を広げる。

皇紀の平穩のために。

「皇ちゃん」

「なんだ？」

「珠姫は布団いらない。こっちで寝る」

「…分かった。俺が布団で寝る」

「なら珠姫もそっちで寝る」

「珠姫がベッドで寝るといったんだろう？そっちで寝ろ。俺のベッドを貸してやるんだからこっちに潜り込むなよ」

「…」

「珠姫？」

「…」

「電気消すぞ」

上掛けを引いて珠姫にベッドに寝るように促す。

のろのろとだが、間に入り込んだ珠姫に上掛けをかけて髪を梳いてやる。

現金なもので、珠姫の目がとろんとなる。

「おやすみ、珠姫」

「ん…」

もう一押しと、優しい声音を皇紀がかけるとゆっくりと瞼が落ちていった。

無言で髪を撫でる。

数十秒が経って、ソツと細心の注意を払って手を引いた。

「今日は成功か？」

ポツリと声を落として皇紀は息をつく。

久しぶりに再会した幼馴染は別れたときと変わらなかった。

姿形がおとなびてこようと、中身は相変わらずだ。

いや、昔よりもっと皇紀にべったりとなった気がする。

皇紀は再会してからそんな珠姫を受け入れながらも戸惑わずにはいられない。

今の状態が異常だとひしひしと感ずるのである。

亜紀恵は何も言わない。

皇輔も何も言わない。

皇紀は疑問でいっぱいになりながらもそのままだ。

だからと言って、もう珠姫がない生活というのもしっくりこないだろうことも無意識に皇紀は理解していた。

眉をしかめることが毎日起ころうとも最後には諦めるように。

珠姫の寝顔を凝視したまま固まっていたことに気が付いて、皇紀は頭を振る。

「俺も寝よ」

珠姫のために用意したはずの布団に潜り込み、皇紀は瞼を閉じるのであった。

明らかに最近の俺は災難続きなんだろうと思う。

それでも生まれてこのかた17年、真面目に生きてきた自信があるのだが、こつも立て続けに災難に巻き込まれると、その自信も揺らぎそうだった。

事の起こりは2年に進級し、面倒くさい生徒会副会長なんぞに指名されてしまったせいでありだされた入学式だった。

何年もの長い間離れていた幼馴染にその入学式で再会した。

久しぶりに会った幼馴染は、とても綺麗になっていた。

うちの生徒会長様に一目惚れさせるほどに…。

そして、その幼馴染は…俺にベツタリだった…。

「宮ノ内く、ご指名だぞ」
「ああ？」

現在、昼休み時間。

母のお手製お弁当を食べ終え、少々気の置けない友人達と話している最中だった。

ちなみに今日のメニューは三色コロツケ。
うちの母親はそういうものに手を抜かないから毎食美味しく頂いてる。

「宮ノ内」

「はい？…何か用でしょうか、先輩」

見覚えのない顔だが、ブレザーについている校章を見ると3年だと分かる。

桜ヶ丘高校は学年ごとに校章の色が違う。

現在は1年が緑、2年が青、3年が赤といった風だ。

まあ、まだまだ入学間もない1年生などはひよろりとしているから校章を見るまでも無いが。

ムキムキマツチヨってものではないが、なかなかの筋肉がついた男だ。

俺が席を立つ前に、俺を呼んだ3年は教室に入ってきた。
席を立つくらいの時間も待てないってどんなんだ？

「筒井珠姫のことだ。これで分かると思うんだが」

なんとも不穏なオーラをしょって俺を見下ろしてくる。
見下ろされているのは、椅子に座っているからだ。
身長は俺とそうかわらないはず。

3年の口からでた珠姫の名に、内心でどっぴりと溜息をつく。

「『俺に聞け』ですか…」

「そうだ」

入学式から一週間。

日々絶えずして何かしら起きている。

…ほぼ9割がた珠姫がらみで。

あとの1割は 珠姫がらみでの生徒会長様による。

あゝ…なんか一気に疲れが出てきた。

「…」

珠姫は類を見ないほどの美少女だ。

だからこそ、入学式以来ある誘いが絶えず…間を置かずくる。

そう…告白してくる輩だ。

もう社会現象と言ってもいいくらいだ。
俺的に。

「宮ノ内。筒井はお前に聞いてくれと言った…どういうことだ」

どういう事だと言われても…訳すと『断る』の一言だろうに。

いや、訳すまでも無いだろ…。

「どういうことと言われましてもね…」

「お前の了承を取れば付き合つということか？」
「…」

…なかなか自分に都合のよい風に解釈する輩だ。

あきれを通り越して頭が痛くなってくるような気がして無意識が手が頭にのびる。

友人たちもあきれた顔をしてそっぽを向いている。

出来れば自分の代わりに真実を教えてやって欲しいと切実に思う。
しかしその望みは叶わない。

友人たちはそ知らぬ顔で俺の視線から逃れる。

…まったくいい友人たちだ。

「…おいつ」

痺れを切らしたのか、突然の闖入者たる3年生は俺の肩に掴んだ。
咄嗟に振り払おうとして寸でのところでこらえる。
上級生とのトラブルは後々問題を残す。

…面倒だった。

その一言に尽きた。

「…先輩」

できるだけ穏便に…。

激昂させることなく退場を…。

「あんた馬鹿ですかね」

俺のささやかな望みは叶わないようだ。

俺がなんとか穏便に終わらそうと決意したその途端に、その望みが潰えるってどうよ？

ここっで泣くところか？

泣いていいなら泣くぞ。

本当に。

続きを口にする前に、覆いかぶさるように後方から声がとんできた。聞きなれた、そしてこの時に一番聞きたくなかった声が。

「お前：高知」

我らが桜ヶ丘高校広報（？）担当、高知 奏。
桜ヶ丘高校全生徒の頂点、生徒会長様だった。

「高知っ！」

「お前は黙ってる」

一言の下に黙らされる。

友人たちに助けて欲しいと思ったが、何故ここで高知がでてくるんだ！

高知の援護をもらっくらいなら自分ひとりで対応した方がましだっ

！！

「確か…空手部副部長の片畑先輩でしたよね」
「！」

闖入者 片畑が目を瞠っているのが見える。

生徒会長が自分のことを知っていたことについて驚いてるようだ。
しかし、高知にとってこんなこと朝飯前だ。

必要なデータはきっちり頭に入っているんだろう。
さすがはというか、生徒会長様だ。

「俺がお答えしてさしあげますよ。珠姫ちゃん…彼女が言いたかったことを」

意味ありげに笑いながら、高知はじつと自分を凝視する片畑を見分けているのが分かった。

「お前が…？」

「ええ。彼女の返事は皇紀に聞くまでもありません。『NO』です」

キツパリはつきりと高知は告げた。

見事だ。

本当に、いつそのこと見事だった。

ここまで場の雰囲気を考えず、結論を言ってしまう高知にもはや言うべきことは無い。

…拍手でも送るべきか？

「」

気が付けば教室には静寂が満ちていた。
みんなが注目してるよ。

「な……」

片畑は絶句して声が出ないのか高知を凝視したままだ。

「彼女が入学して1週間。告白した輩は数知れず……」

淡々と高知は喋る。

「……そして彼女の言う言葉決まって一言だけ。『皇ちゃんに聞いてください』……大抵の奴がこれを聞いた後、肩を落としました。分かります？これは彼女なりの断り文句です」

なんの感情もうかがわず、高知は片畑を見ていた。

そんな姿は生徒会長として見栄えがいい。

……いつもこうだと助かるんだが。

「……し、しかしそれは」

「皇の言う通りにする？ですか？」

なんとか声を絞り出した片畑は反論しようとしたが高知に遮られる。

てか、反論しようとしたその勇氣は褒めてもいいくらいだ。

いや、やっぱり馬鹿だと言ったほうがいいか？

「彼女は信じています。……皇が自分の意にそわないことをするはずがないと」

少しだけ感情を抑えられず高知は喋る声を止めたが、ほんの数秒で、

誰も気付かなかったと思う。
…俺以外は。

「ッ…」

何も言わず片畑は2年の教室を出て行く。
人を射殺さんばかりの視線を高知と俺に送って。
全然納得していないと気付いたのは、その視線を送られた俺たちだけだったはずだ。
やっぱりひと悶着ありそうだ。
やだなあ…。

「…もう少し穏便に事を片付けられないのか」

どつぷりと重い溜息を吐きながら高知に文句をたれる。
それぐらいは許されるはずだ。
後のことを思うと頭が痛い。

「ああいう輩はキツパリ言っておいてやらないと分からないさ。」

そうだが…てか、納得してなかっただろうが…。
あの視線で高知も分かっているはずだ。
まあ、今ここで指摘する内容でもない。

平然と高知は答えながら周囲に視線をやる。
自分に視線が集中しているのが分かっているだろうからの行動。

「鈍い男ってやゝね」

真剣な表情から一転、ニヤリと人の悪い笑みを貼り付けて高知が言う。

通常運行の顔だ。

緊張をはらんだ静寂がその途端破られる。

「高知君最高〜！」

「おい、イイ男からカマ男に転向か〜」

「は〜い、ありがとさ〜ん」

瞬時に戻った喧騒に半ば感心しながら、俺はまだ気を緩めることが出来なかった。

片畑の最後の視線が気になって…。

新たな面倒ごとの予感をひしひしと感じた。

「珠姫」

「なあに？」

片畑が俺のクラスにやってきたその日の夕食時。

食卓の上には今日のメイン、豚カツがドンと置かれており、大根サラダ、お味噌汁等、温かいご飯が並んでいた。

母さんの横、俺の正面の席に座った珠姫は食べる手を止めこちらを見る。

珠姫の頬つぺたにご飯粒が。

「…ご飯粒がついてるぞ」

話そうとしていた内容を横にどけて、ひとまずご飯粒について申告してやる。

「え？」

緩慢な動作で珠姫が口元に手を持っていくのを見ながらふっと力を抜いてそのまま手を伸ばす。

「そこじゃない。ここだ」

頬つぺたからご飯粒をとってやりながら珠姫を見る。
珠姫はなすがままだ。

「ほら」

とつたご飯粒を見せる。

すると、珠姫は何気ない動作でご飯粒のついた俺の指を銜えた。

「！っくら」

目を見張り、慌てて珠姫の口から指を救出する。

…ご飯粒はない。

すでに珠姫の口の中だ。

『ほら、ご飯粒がついてる』

『本当だ』

『こらっ！指まで食べちゃ駄目でしょ！』

『へへっ』

…自分がこんなベタな出来事を体験することになるうとは思わなかった。

それも立場的にどうなんだ？

普通逆じゃないのか？

ギギギツと銜えられた指を凝視した視線を珠姫に戻す。

「皇ちゃん、ありがとう」

「…」

先に礼を言われてしまい、怒ることも非難することも出来なくなり、文句を言おうとして開けた口を閉じた。

「ラブラブね〜」

のんきな声が珠姫の横から聞こえてくる。
やべっ…イラッときた。

「母さん…」

ギロツと睨むが、母さんは悪びれた様子も見せずご飯を食べ続ける。
いや、それどころかニコニコと満面の笑みだ。

「亜紀恵さん、おかわり」

スツとお茶碗が母さんの前に差し出される。

「はあい。皇輔さん、軽く一杯でいいかしら？」

「ああ」

俺たちの状態など知ったことかといわんばかりに茶碗を差し出した
手の持ち主。

父親の宮ノ内 皇輔が俺の隣で、ニュースを見ながらご飯を食べて
いた。

この2人、いまだに子どもの前でも気にせず名前で呼び合うラブ
ブ（死語）夫婦だ。

物申してやりたい気もしたが、やり返されるのが落ちだ。
家に帰ってきてまで精神的に疲れるのは嫌だ。

ここはスルーしておく。

そして、珠姫と『お話』をするほうが先決だ。

「…珠姫、お前また相手を振るときに俺の名前出したな」

「あら。珠姫ちゃんモテモテね」

「珠姫ちゃんは可愛いから仕方がないな」

すかさず母さんが割り込みをかけ、父さんもこれといったニュース
もなかったのか、会話に参加してきた。

「皇ちゃんに聞いてじゃいけないの？」

首をかしげながら珠姫が聞いてくる。

可愛いな、おい。

…って、それどころじゃないだろ！俺っ！！

「その場で断れば済むだろうが」

「まあっ！なんて事を言うの、皇紀はっ」

珠姫ではなく母さんが反論してくる。

つい食事の場でこの話題を出したのは失敗だった。

「もし、その場ではつきり断って珠姫ちゃんに何かあったらどうす

るの！あんたは男の子なんだから別にかまわないでしょ」

…

…

…

理不尽である。

もう一度言おう。

理不尽である。

俺はこう主張したい。

その気が無いのなら無視してしまえと。

俺はこう言いたい。

話を聞いてやるにしても、人が居るような場所で話を聞けば最悪の事態は無いはずだと。

俺はこう思う。

母さん、俺は本当にあんたの息子なんですかと。

くそ、1日に2度も泣きたくなるなんておかしくないか？

さすがに、ここで本当に涙でも流そうものなら指を俺につきつけて
笑いそうなのが約1名いそうなので、しないけどな！

「……」

「皇紀」

「…なんだよ」

横に座る父さんがポンと俺の肩を叩いてくる。

視線をやると父さんは無言で頭を振った。

その意味するところは…。

「逆らっても無駄だよ」

妻に逆らわないのが宮ノ内家円満の秘訣のようだ。

「くそ…」

なんとも釈然としない。

イライラとしながら服を脱ぐ。

身体の疲れに感じる。

心の平安を取り戻そうと風呂に入ることにした。

日本人ですから。

年寄りくさいとか突っ込みはいらなから。

「この頃の俺ってついてないか？」

洗面所でシャツを脱ぎながら一人ごちる。

心なしに独り言が増えたような気がする。

ブツブツ独り言を喋るのはちょっと痛い気がする。

いや、かなりか？

脱いだシャツを洗濯機に八つ当たり気味に投げ入れ、ズボンを脱ごうとベルトに手をかけたその時、何の応えもなく洗面所のドアが開いた。

「
…」

珠姫である。

固まってしまった俺に驚きもせず、開いたドアの前で突っ立っている。

なんなんだ。

「
…」
「
…」

いつまでも続きそうな沈黙に終止符を打ったのは俺だ。
てか、そうしないと話が進まないんだ。
それに、いつまでも上半身裸じゃ風邪引くしな。

「何か用か」

「
…」

「歯でも洗いに来たのか」

「
…」

「…一緒に風呂に入るか？」

冗談だった。

はつきり言っておこう。

本当にただの冗談だった。

反応を返さない珠姫に、ちょっとした意地悪のつもりだった。
しかし、俺は珠姫を侮っていたらしい。

「入る」

間髪いれず珠姫が頷いたのだ。
心なしか嬉しそうだ。

それに焦ったのは、冗談を言った俺だった。

「まてまてまて〜!!?」

焦って手を体の前でぶんぶんと振る。

今にも目の前で服を脱ぎそうな珠姫を押しとどめる。

行動が早すぎるぞっ!! 珠姫!!?

そして恥じらいというものを持ってくれ!

切実に思う。

「冗談だ! 冗談!!」

そんな俺にやや不満そうな顔をして珠姫はじっと見つめてくる。
やや?

いや、大いに不満そうにだ。

「ほ、ほら。用がないなら居間にでも行ってる」

「…用ある」

「…なんだ」

「一緒にお風呂入りたい」

「…」

脱力。

その言葉の通り、体から力という力が向け落ちていくようなそんな

錯覚を感じていた。

「……」

「…分かった。でも着替えはどうした」

目を逸らし、力なく言葉を口から搾り出しながら珠姫に問うた。

「取ってくる」

嬉々として洗面所から出て行く珠姫を見送って、どつぷりとため息をひとつ。

そして音を立てずにドアを閉めてきつちりと内鍵をかけた。

「…これからは忘れずに鍵をかけないとな」

男である自分が、なぜ女のような行動をしなければならないのか。そう思いながらも、俺は胸にそのことを強く刻むのだった。

「閉め出された」

数分後、洗面所続くドアの前で珠姫がぽつんと立っていたとか。

短い休息（一人の時間）を手に入れた。
身体を洗い、湯船につかる。
湯気を見ながらまったりとする。

「今度…温泉の素でも買ってくるかな…」

口にして、それっていいなと思う。

そう思う反面、やばいなと思う。

このままお風呂の魅力に取り付かれたら、温泉マニアとかに近い将来なりそうな気がする。

さすがにこの年で没すぎる趣味だと思う。

迫りくる危機が頭の中をちらついたが、今だけはと無視する。

…それだけ俺は疲れているらしい。

何とか気分を回復させることに成功し、髪をバスタオルで拭きながら居間に入る。

「皇紀！嘘はついちゃいけないのよ」

居間の出入り口を塞ぐように、仁王立ちになった母さんが待っていた。

「……」

浮上した気分がまた落ちそうになるのを感じながら、居間の入り口の壁に手をつく。

「…じゃあ何？…一緒に風呂に入れとでも？」

苦々しく口を開く。

まさか肯定なんかしませんよね？母上様？

「そうよ」

やられた。

きつぱりはつきりと母上様が肯定しやがった。

問題ありだ。

なぜ、この人はこうはつきりと断言できる？

今後のことを思うと、空恐ろしい物を感じる。

なんで子は親を選べないんだろっ！いや、それは失礼か、親も子を選べないし。

そう考えるとうちの両親は全然悪い親ではない。

それどころか、いい親だ。

…あれ？なんか話がずれてるか？

「…」

あれこれ思考が空回りしている間も、母さんは色々と力説している。

それ以上返す言葉もなく、俺はそつと進路を変える。

廊下を進んで、台所に直接つながるドアから入る。

母さんはそれに気付かない。

「男に二言は無しよっ！」

母さんは一人、燃えていた。

「15歳の、他人様から預かっている娘と、17歳の息子が仲良く一緒に風呂に入ることのへの矛盾に気づけ。てか、道徳観を持て！」

母さんに聞こえないような小さな声でぶつぶつと言いながら、俺は冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して一気に飲み干した。

自棄酒の代わりではない。

一応主張しておくが。

「『据え膳食わぬは男の恥』とも言っぞ」

俺の小さな声を拾ったのか、父さんがちらりとこちらを見て笑った。

「……お預かりしている他所様の大切なお嬢さんに、息子が手を出して父さんはどうなんだよ……」

ますます脱力するものを感じながら、軽く父親をにらむ。

「それはそれ、これはこれだよ。皇紀」

やっぱり笑ったままのたまう父親。

やべっ。イラッときた。

そして、言いたいことを言って、父さんは見ていたテレビに視線を戻す。

…タンスのかどに小指ぶつけて悶えてしまえっ！！

「…」

口からは、もう何も言い出す気になれず、無言で台所を後にする。
まだまだ続く熱い母さんの言葉を後ろに聞きながら。

自室のドアを開けるとそこには
…珠姫がいた。

「…風呂は？」

何も言わず、こちらをじっと見つめる珠姫からソツと目線を逸らし
て口を開く。

珠姫がうちに来て数週間、気づけば自分の部屋に珠姫が居ることに
驚かなくなった。

驚かなくなったというか、なんて言うか…まあ…諦めたんだ。
諦観？

そんなもんだ。

驚くだけ損だ。

気力が減っていくんだから。

「明日朝入る」

返答を待ってみれば、お年頃的女子高生には相応しくない台詞が聞こえた。

夏場ではないとはいえ、それはちよつと…。
そう思う俺は間違っていないはずだ。

「今、入ってこい」
「…」

無言で応じる珠姫。

まあ、それも分らないでもない。
先程の洗面所と同じように、閉め出されるとでも思っ
て、部屋から出て行きたくないのだろう。
学習したようだ。

それは正しかった。
あわよくば、1人の時間をもっと堪能したかった…。
ため息をひとつついて考えを散らす。

最近はため息ばかりだ。
ああ…幸せが減っていくつか？
誰か、ため息の出ない生活を俺にくれ。

「風呂入ってこい」
「…」
「鍵はかけずにおいてやる」

「…」

「髪も乾かしてやるから」
「入ってくる」

表情には出てないが、嬉しそうなのが分かる。

ん？

他のやつに分かるかって？

多分…いや、きっと他のやつには分からないだろうな。

珠姫の両親と俺の両親を除けてであるが。

珠姫の喜びようを言い表すならば、尻尾があればあらん限りに揺れていたことだろうってとこだろつか。

俺は、珠姫が軽やかに部屋を出て行くのを見送った。

毎日のごとく一緒に寝る、寝ないで押し問答をしている。

最終的には、大半の割合で俺の負けで終止符が打たれる。

珠姫が居候となったその日から毎日。

さすがにもう俺の部屋で一緒に寝ることについては諦めていたが、毎日押し問答を繰り返すのは、そのまま受け入れてしまうのはどうかと思う俺の意地のようなものだ。

15歳と17歳の、血のつながってない（つながってたとしてもどうかと思うが）男女が、一緒に寝るといふのは普通、親が止めるは

ずだ。

しかし、俺の両親は普通の常識では測れない人たちだった。

珠姫が我が家に来た初日、俺の部屋に居る珠姫に吃驚し、絶句し（パジャマに着替え、枕を抱えてベッドの上に座っていれば誰でも驚く！）、俺は部屋に背を向けて居間に戻り、母さんに言いに行った。だが、返ってきたのはありえない台詞だった。

「何が悪いの？」

驚愕である。

いろいろと言いたいことがあったが、そのありえない一言に、言い募ろうとした言葉を全部封じられた（…様な気がした）。

その日はいろいろとあった（入学式でのあれやこれ）ので、通常以上に疲れており反論する気力がもう無く、そのまますごすごと部屋に帰ってしまったのだった。

初日が肝心だったはずにもかかわらず、母さんの先制パンチにやられたのである。

…見事な右フックだったぜ。

そして、珠姫は毎日俺のベッドに潜り込むようになったのである。
これをなし崩しというのではないだろうか…。

それでも、同じベッドは自分も男だからということ、頑なに俺は
珠姫を拒み（男が使う言葉ではないと思われる。てか、ぜったい違
う！）、お布団一式をいつも置くようになった。

「…でも朝起きたら…俺の横で寝てるんだよな」

乾いた笑いしか出てこない。

俺は、どこか遠くを見つめながら、昔の平和の日々を思い出すので
あった。

「明後日の部活紹介なんだけど」
「各部活には連絡済みだぞ」

放課後の生徒会室。

桜ヶ丘高校は、部活動が必須というわけではないが、豊富な部活動があることで有名で、ちらほらと全国に名を連ねる運動部や選手などが居た。

そのため、一年生たちが学校に慣れたところを見計らい、5・6講時目を使って部活紹介が毎年、生徒会主催で行われている。

なので、今現在、生徒会室はいつもの穏やかさを打ち破り、とても賑やかだった。

その中でも忙しいのは生徒会長である高知 ではなく、何故か副会長である俺だった。

「会長、昨日頼んでた資料は？」

「あゝ？…ああ！皇に渡したよな？」

「…そのまんまな」

「やってあるんだろ」

「…」

パサ…

無言で机の上に置く。

「サンキュー」

礼を言いながらも、さも当然のように資料を受け取り役員に渡す高知。

高知の無駄にいい顔を無性に殴りたくなる。

殴っても許されるよな？

なあ？

そんな俺の不穏な空気を感じたのか定かではないが、高知はあっさりとその場から移動していった。

チッ

…舌打ちは見逃してくれ。

追いかけてまで殴る気力も無く、目の前に積まれた資料の山に向き合うことにした。

やることはいっぱいあった。

各部活の部活紹介の順番や、そのことによって起こるトラブルの仲裁。

決まっているはずの紹介時間を延ばすように言ってくる輩への対処。内容チェックもある。

極め付けが此度の部活紹介に対する書類の作成および、体育館使用におけるマイクや椅子などの各使用物関係について教師への根回しなど。

何故そこまでといわんばかりに後から後からやることが出てくるのだ。

これは当然のことだが、会長から指示の下、役員たちがそれぞれに動く体制が出来てる。

そのはずなのにだっ！

全てに近い仕事が俺の下に集まり、俺の下から各役員に仕事が渡っていくのだ。

なんつーか…うん。高知、殴らせろ。

お前を殴れば全てがすっきりする気がするんだ。

そう思うのに、高知はのりくらりとかわして…。

結論を言つと、高知に構っている暇があるのなら、とっとと仕事にかかったほうがいいってことだ。

悲しいことに。

カタカタカタ…

パソコンのキーを打つ音が生徒会室に響く。
先程までの喧騒が聞こえなくなる。
過去の資料とパソコンの画面を交互に見ながら、提出書類を作成する。

カタカタカタ…

「
」

カタカタカタ…

「う、皇っ！」

「！
」

肩を揺さぶられてハッと画面から視線を引き剥がした。
後ろを見ると、高知が呆れた顔で立っていた。
どうも集中しすぎてしまっていたらしい。

「おい、何度も呼んだんだぜ」
「すまん」

一概に悪い癖とは思っていないのだが、ひとつのことに集中してしまつとつい周囲の様子が気にならなくなってしまう。

昔、それで母さんに何度とはなしに頭をはたかれたのはちょっとした幼き日の思い出の1ページだ。

最近はずがに気を付けていたんだが…。

予想以上の仕事量に、つい癖が出てしまっていたらしい。

「で、なんだ？」

高知を見て呼ばれた理由を尋ねる。

しかし、高知は答えず、生徒会室の入り口のほうへ顎をしゃくつた。尊大な仕草だ。

そう思いつつも視線を入り口に向けるとそこには…。

「珠姫…」

鞆を胸に抱え立っている、珠姫の姿があった。

「皇ちゃん」

珠姫の顔に笑みが上る。

それだけで、周囲がパツと華やいだ。

生徒会室に居た男共が、そうそう拝むことの出来ない眼福に、全ての作業をそのままに見惚れる。

…確かに珠姫は可愛い。

男共を一瞬で魅了した笑みを湛えたまま、珠姫が俺の傍へやってくる。

「皇ちゃん、帰ろう?」

すぐ傍で小首を傾げて聞くその様は、偶然、俺の近くにいた数人の男どもを軒並みノックアウトするほどの威力を持っていた。

…どんな凶器だ?

「…」

そんな周囲の様子を呆れた眼差しで見回して、返事を待つ珠姫に視線を戻す。

残念ながら、俺にはこの攻撃は効かないのだ！

「まだやることが終わってないから」

先に帰ってろ　という前に。

「じゃあ、待ってる」

珠姫は俺の横に折りたたみ椅子を取ってきて陣取ってしまった。

すごく強引だ。

なんていうか、オバタリアンも認める図太さだと思う。
きっと、誰も俺の意見に同意してくれないと思うがな。

ははっ（乾笑）

「…篠川はどうした？」

がつくりと肩を落としながら、珠姫の友達の名前を挙げてみる。

篠川綾香は珠姫のクラスメイトで、入学初日から何かと悪目立ち（
シノカワアヤカ
俺的意見）した珠姫に、次の日に声をかけてきたらしい。

人伝に聞いた話になるが、声のかけ方からして凄かったみたいだ。

…確かに篠川の台詞には俺も驚いた。

「あたし、べらべら喋る人って嫌いな。あなたなら口数少なそうだし、余計なこと言わないでしょ。それに、近くで見ると断然可愛い子だと思うんだ。あなた色々と問題多そうだけど、助けてあげる。だから友達にならない？あたし意外とお得よ。てか、友達になつて損はさせないわ」

と、堂々とHR前で人の多くいる教室で言ったとのことだった。

めでたく珠姫と篠川が友達づきあいを開始してから、俺も彼女に会う機会があった。

彼女と初めて会ったときの話はまたの機会があれば話そう。

ひとこと言っておくとすれば、当分は忘れられないであろう出会いだった。

篠川は身長171センチ（珠姫から聞いた。てか、彼女が自分から言ってきたそうだし）。

スレンダーな体型で、髪は短めでさっぱりとしていて、女子にもてる系の美人といえる。

珠姫への誘い文句がちょっとあれ？だったのにも拘らず、女子の人氣が高いのだ。

この学校ってM気質の人が多いのか？

…やべ。恐ろしい考えに至ったので、今の発言は無かったことにしておく。

成績も上位のほうで、頭の回転が速く、珠姫のフォローが上手かった。

確かに、自分で売り込むだけあって、お買い得物件といったところだった。

俺的には、珠姫にあんな友達が出来たことに未だに首を傾げなくなる部分もあるのだが、なかなかいいコンビのようだった。

俺の苦勞を少しとはいえ減らしてくれているわけだから、俺からは特に文句はない。

…今のところは。

そのままよろしく頼む！

「今日は用があるって帰った」

俺の疑問に答えながら、珠姫は俺の手元を覗き込む。

見られて困るものでもなかったので、したいようにさせる。

それに、篠川の言うとおり、珠姫は余計なことはいしな。

「そうか…。高知。テニス部と写真部の順番はどうなった？」

「…」

「高知？」

珠姫の返事を聞きつつも、報告書類の束を片付けながら高知に声をかける。

が、返事が一向に返ってこない。

手元から視線を離して、高知の姿を捜す。

高知の姿はすぐ見つかった。

しかし、探していた人物は珠姫を見たまま 手も顔も何もかも
動きを停止させていた。

ピキッ

額に青筋が出来たであろう音。

思わず、使っていたペンを投げそうになって、さすがにそれは危ない
と思い直して机に転がしてあった消しゴム（小指大）を掴む。

ここまで配慮した俺は偉いだろう？

おもうさま投げつけてやった。

ポコンと間の抜けた音と共に命中する。

弱かったか？

もつと持てる力を全て使って投げつけてやればよかったかもしれん。
悲しいことに機会があればそうしよう。

「あだっ！」

「仕事をしろ！この色ボケ会長っ！！」

高知の悲鳴を聞き流して辺りを見やる。
生徒会室に居た男共が全て同じ状態だということに気付き、俺は目
を細めた。

見れば、女子の視線も冷たく、色ボケた男共を蔑んだ目で見下しており、高知の悲鳴で正気に戻った男共は、女子の視線にそれぞれ顔を青くした。

女子の視線にちょっとゾクツとしたのは内緒だ。

…俺が蔑まれたわけではないのにも拘らず、すごい威力だった。

「終わらなかつたら、お前らだけ残ってやれ」

女子の視線から目を逸らし、俺は言った。

へたれとか思わないように。

俺をへたれとか思う奴は、1度その目で見られてみるとここで主張しておこう。

…生徒会室は、一気にツンドラ地帯に突入してしまったもようです。

言い捨てて、気付けば残り一枚となった書類の整理に戻る。
それもすぐ終わり、席を立つ。

いっちゃなんだけど、今、生徒会室はめっちゃ寒い。
温度的にじゃない。
精神的に、だ。

なんていうか…うん、心に優しい場所に移動したくなった。

いい考えだ。

そうしよう！

すぐにしよう…！

「細川、立木、島岡、休憩しないか？」

真面目にやっていた女子軍に声をかける。

俺の言葉に視線をくれる彼女たち。

視線は元に戻っていたが、周囲に漂う気配は半端無い。

どもりそうになるのを何食わぬ顔と長年の努力と精神力をもってして回避しつつ、口の端を上げる。

彼女たちもきりのいいところだったのか、各々持っていたペンなどを机に置いて席を立つ。

もしかしたら、もうやってられるかといった感じだったのかもしれないが……。

先ほどの彼女たちの目を思い出しそうになって、慌てて記憶を消去する。

あれは憶えていてはいけない記憶だ。

速やかに抹消しろ、俺。

俺は今後とも、彼女たちと円滑な関係を続けて行きたいと思っているのだから。

「学食で飲み物でもどうだ？」

「そうね」

「いいですね」

「そうしましょう」

3人はにつこりと笑って同意してくれる。

3人の笑みを見ていたら、やっぱりさっきの目は… ゲフンッ！

オレハ、ナニモ、ミテナイヨ？

「…珠姫行くぞ」
「うん」

自分の思考に蓋をして、珠姫を促して生徒会室のドアを開ける。
その間、男共に口を挟む隙を許すことはしない。

女子軍を先に出して、出る前に中を見渡す。

無言でこちらを見てくる男共に、笑みを見せる。

どつという訳か、この笑みを見せると、大抵の男共が固まる。

星埜先輩いわく、『淒味がある笑み』だと、前に言われた。そう言った星埜先輩自体は、楽しそうに笑っていたから、そこまでこの笑みに過大評価をするつもり無い。

しかし、実際に『淒味のある笑み(?)』を向けた先の男たちが少なくとも固まるのだから、効果があるのだろう。なので、使い勝手がなかなか良くて、つつい習慣的に使っている代物だったりする。

まあ、使いすぎると効力もなくなりそうなので、使いどころは考えていたりするが。

人つてもんは慣れる生きものだからな。

「俺らが帰ってくるまでに、そこにあるものは終わらせとけ」
「は、はい」

同い年のはずなのに、奴らが敬語になる。こういう反応を得た時は、笑みの効果があつたのだと思うようにしている。

過去の実績？を振り返ればその通りだからだ。

「おい、皇」
「自分の分が終わった奴は、後から来てもいい」

高知の言葉を遮って、言うだけ言ってドアを閉めた。

「誰が会長だと思ってるんだよ…」

その後、情けない声が生徒会室に響いたようだが、それは俺のあまり知らぬことである。

25（前書き）

皇紀視点ではありません。

食堂。

昼食という慌しい時間がかかり前に過ぎた学生食堂は、今とても穏やかな空気が流れていた。

桜ヶ丘高校の学生食堂は、実は珍しいことに夕方まで開いている。さすがに昼食時のような豊富なメニューは無いが、軽く摘めるような軽食や、甘いものが用意されていた。

数人の女子が窓際の席で甘い物を囲んでキヤイキヤイとお喋りをしたり、昼食だけでは足りなかった欠食男子が軽食を口に運ぶ姿が見られる。

何代か前の生徒会長が、学校に掛け合ってこうなった。

理由としては、遠距離通学をしていたり、色々な事情で友人との交流を上手く取れない学生たちの憩いの場所を作りたいとのことだったらしい。

他にも下手に繁華街で遊ぶなどの厄介ごとに巻き込まれそんな行為をされるより、学校内で交流を深めてくれたほうが安全で管理しやすく、問題が起これないのではという意見があったとか…それはは

つきりと文書に残っていることではないので、生徒たちには知るはずの無いことである。

結局は、学校側と学生側の意見が上手いこと合致したことで、理事長のOKが出たこと（これが一番大きい）で、学生食堂は午後も開くことに相成ったのであった。

そして現在。

「珠姫、いちごミルクティーでいいか？」
「うん」

紙コップ式の自販機で、皇紀は珠姫のイチゴミルクティーと自分のモカラテを購入し、各々に飲み物を買った女子たちの座る席に移動する。

空いている席に、横に並ぶように自分と珠姫の飲み物を置いて、皇紀は珠姫を見た。

「ちょっと残り物のパン見てくる」

珠姫に座っているよう視線をやり、1人売店のほうに向かう。

珠姫は、皇紀の言いつけを守って、いちごミルクティーの置いてある席に座る。

しかし、珠姫の視線は、ずっと皇紀の背中を追ったままだった。

そんな珠姫の一連の行動を反対側に座る細川、立木、島岡は、アイコンタクトを取りながらクスクスと笑いながら見ていた。当然珠姫は気付かない。

というか、皇紀以外の人を気にしていないのだろう。

しばしそんな珠姫の行動と、パンを物色しているだろう皇紀を交互に見ていたが、それだけでは満足できなかったのか、口を開いた者がいた。

いや、3人が3人とも口を開いたのだ。

「…珠姫ちゃん、本当に宮ノ内くんのが好きなんだね」

島岡はポツリと零す。

「とても微笑ましいです」

立木もホワンとした笑みを浮かべて同意する。

「副会長にこれといって浮いた噂がなかったのはこういうことだったわけね」

細川が落ち着いた口調でうなずく。

3人とも興味津々ではあったが、珠姫を困らせようという意図は無かった。

なので、口から出たのは2人に対する感想に近かった。

「違っの」

そんな3人に、珍しくも、珠姫が言葉を挟んだ。

3人は、珠姫が自分たちに話しかけてきたことに、軽く目を瞠る。
当の本人である珠姫は、これまた珍しくも視線を3人に向けていた。
これといった濁りの無い、森の奥深くに隠れるように存在する泉の
ようにと表現できそうなほどに澄んだ瞳。
吸い込まれてしまいそうだ。

「…えっと、何が違うんですか？」

何とか現実に戻った立木が、珠姫に返事をした。

「珠姫は皇ちゃんがとっても大好きなの」

口元に笑みを上らせ、恥ずかしげもなく告げる。
その顔のなんと可愛らしいことか。

3人は自分の頬が熱くなるのを感じた。
きつと…いや、絶対に赤くなっていると、思った。

「そ、そうなんだ!」

「ほえ、あてられちゃいました」

「…かわいい」

男たちが騒ぐのも仕方がないと、妙に納得してしまった3人だった。

売店でパンをGETして、珠姫たちのところに帰る。

ん？なんか様子がおかしい？

向かう先には珠姫の横顔。

そう、珠姫の横顔が見えるのだ。

え？おかしくないって？

そんなことは無い。

自意識過剰と言われそうだが、珠姫が俺を見ていないという状況こそが珍しいんだ。

珠姫は側に 見える範囲に俺がいると、他の全てを放って俺を見ている。

珠姫に用があつて視線をやると、いつも俺を見ているし、何より母さんからの情報だ。
確実だろう？

別に見られて不味いことがあるわけでもないから放つてある。

いや、不味いことが最近あるか…。

この頃は高知とかに親の敵のように見られがちだ。
近々高知の目から血の涙でも流れるんじゃないか？

…それは流石にごめんこうむりたい。

珠姫の習性？習慣？なあの行動。

どうしたらやめさせられるんだろうか…母さんに相談するか？

そんな無駄なこととしてどうする！

きっと、いや絶対もつと悪い状況に陥る。

確信がある。

ああ…なんか目頭が熱いなあ。

「皇ちゃん」

俺が立ち止まっている間に珠姫が気づいたらしい。
嬉しそうに惜しげもなく満面の笑顔で俺を迎えてくれる。

「…ん？どうかしたのか？」

対面に座っている3人の視線に気付く。

珠姫の横に腰を下ろしながら問うてみる。

珠姫ではなく、細川たちの様子がいつもと違う。

「い、いいえ、たいしたことじゃないわ」

「そうです。ただ、珠姫ちゃんは今副会長のことが大好きだった話してただけです」

「そうそう」

「…何の話をしてるんだ」

3人の言葉に呆れながら、紙コップに口をつける。
そんな俺の横では、幸せそうな顔をして、珠姫がこれまた紙コップに入ったイチゴミルクティーを飲んでいた。

モカラテを味わいながらひと時の休息を手に入れる。

やっぱり、学食に移動して正解だったな。

一応、生徒会室にも日々のおつとめの合間の休息の為、紅茶やコーヒー類が用意されていたりする。

他にも生徒会役員が各々持ち込んだ菓子とか。
これは生徒会所属のやつらだけの内緒事だが。

色々頑張っているんだから、これくらいはな。

今日に限っては、俺が持ち込んだ食べ物も生徒会室には無かったし、購買の閉店間際の時間的に割引対象物になったパンを物色したってワケだ。

人気の惣菜パンはさすがに売り切れており、手にしたのはメロンパンだ。

甘いものも嫌いじゃないしな。

「珠姫、食べるか？」

「うん」

「ほら」

頷くだけ頷いて、口を開ける珠姫。
要望に応えて、1口大にちぎったパンを口に放り込んでやる。

ここまでの動作に淀みなどない
よくあることだからだ。

そんな中、対面に座る3人は、変な顔をして俺たちから視線を逸らすのが視界の隅に入った。

「なんか胸いっぱいです」

「ご馳走様」

「仲良いわね」

3者3様に頬がほんのり色づいていた。

何なんだ？この反応は？

「ん？」

珠姫も俺の変化に気付いたのか、首を傾げてくる。

しかし、それだけだ。

もっとパンをくれと言わんばかりに口を開けるので、パンを放り込む。

疑問を感じてはいたが、これといって大きな問題ではないだろう。
そう答えをまとめて、俺はパンを咀嚼するのだった。

食堂で休憩している間に他の生徒会員はやってこなかった。

どれだけ仕事溜めてんだよ…。

そろそろ戻って仕事を再開させるかという話になり、席を立つ。

紙コップを燃えるゴミ指定のゴミ箱に放り込み、視線を向ければ、細川たちも各々に片付けて集まってきた。

ソツと様子を窺えば、ありがたいことに、もう先ほどの生徒会室での出来事は忘れたように珠姫を囲んで楽しそうに話している。

珠姫も細川たち3人に気に入られた様だし、一安心だ。

これからも生徒会室で会うこともあるだろうし、仲良くなっておけば、何か珠姫がやかしたときに助けに入ってくれることだろう。

救済者は多ければ多いほうがいい。

俺的に。

それに、変に欲望持った奴らに助けられた時が厄介であるからして、無償か、害がなさそうな願いで助けてくれる奴らのほうが断然いい。

打算ですまん。

しかし、これから何があるか未来予測が出来ない（出来たら凄い！）俺にとって、大切なことなんだ。

髪の毛を3人に弄られながらも気にせず俺を待っている珠姫を見ながら、俺は思っのだった。

さすがにそろそろ戻らないとやばい。

3人を促して学食の出入り口に移動する。

4人だつて？

いや、珠姫は俺が動けばついてくるからな。

出入り口で、俺たちと反対に入ってきた人物とぶつかりそうになり、横に避ける。

相手が通り過ぎるのを待っていたが、待てど暮らせど通り過ぎないので、訝しげに視線をやる。

（げ…）

視線の先には、数日前に教室に乗り込んできた上級生がいた。

名前は確か…片畑。

空手部副部長だったな。

片畑は、数人を引き連れた形でその場に立っていた。

てか、こっちが避けて待ってんだから通り過ぎろよ。

ガタイがいいことから察するに、空手部の奴らだろう。
部活の休憩に残り物のパンでも買いに来たのだろう。

憎憎しげに俺を睨む片畑。

どつぷりのため息を心の中でつきながら、軽く頭を下げて横を通り過ぎようとした。

通り過ぎる寸前、横から言葉が落ちてきた。

「いい気なもんだな。女ばかり侍らせてよ」

「……」

反応しそうになったのを辛うじて押しとどめ、その場を無言で去る。
俺と一緒にいた3人も同様だ。

何度も言うようだが、珠姫はこんな奴らを相手にしない。
てか、視界の隅にも入れてないかもな。

後ろからは盛大な舌打ちが聞こえてきたが、それも無視して食堂を後にした。

「何あれ」

「男の僻みって嫌ね」

「間違っても、あんな男の人には侍りたくないです」

食堂から数メートル離れたところ、女性軍の口から視界の隅から片畑が消えるまで我慢されていた言葉が次々に紡ぎだされる。これはあれだ。

女性軍をしつかりと敵に回したらしい。

同情なんてしないがな。

「珠姫」

「なあに」

「当分1人で歩き回らないようにしとけ」

「うん」

俺を憎憎しげに見ていたあの男。

珠姫を視界に入れたときにねつとりとした視線に変えたのだ。あの視線を見たときに、まだ珠姫を諦めてないと確信した。

ああいう輩は気をつけないと危ない。

頭の隅で赤信号が点滅しているような気がした。

これは勘だが、警戒しておくに越したことはない。

（…高知にも言っておくか）

目まぐるしく今後の展開を考えながら、生徒会室に向かう。

ソツと手に差し込まれた珠姫の手を、無意識のうちにしっかりと手に握りながら歩いた。

生徒会室に入ったときに、それを嫉妬に荒れた高知に指摘されるまで、俺は珠姫の手をしつかり握り締めるのだった。

夕飯を食べて、風呂に入った後の寝る前のひと時。

俺は両手を後ろに組み、枕代わりにしてベッドに寝転んでいた。

珠姫はお風呂である。

ボウツと生徒会室での高知との会話を思い出していた。

「学食で片畑に会った？」

「…仮にも先輩だろうが」

「尊称なんて付けたくないね。どうせお前だって心中で呼び捨てだろうが。いや、そんなことよりも…だ。今の問題は、あの野郎が珠姫ちゃんをまだ諦めてないってことだよ」

「ああ」

「まあ、あれくらいで諦められるほど珠姫ちゃんくらい魅力のある女の子はそうそういないからな。驚くことではないわな……。しっかりと、空手部か……。ちょっと厄介だな」

いつも快活な男が珍しくしかめっ面で上を仰ぐ。

「高知？」

「ん……。最近なんだが、空手部がきな臭いというか、荒れているというか……。ぶっちゃけて言うと、部長と副部長の仲が険悪らしいんだわ。前々からそんなに仲は良くはなかったみたいなんだが、4月入ってから指導方針での？意見が分かれたみたいなんだよな」

「指導方針？そんなものは大体、顧問の先生の仕事じゃないのか？」

「うん。数年前まではそれなりの段もちだった先生が仕切ってたらしいんだが、その先生が異動して、顧問の先生が代わってから今の形らしい」

「今って……。誰だ？」

「内山先生だな」

「ああ……。あの先生じゃ、指導は無理か」

「そういうことだ。内山先生は、運動系はからっきしだからな。……どうして空手部の顧問になったのか理解できん」

「……。で？」

「ん？ああ！なもんで、その年々の部長と副部長が部を引っ張っていつているというのが現状だ」

「ふむ。最近の空手部の戦績は？」

「選ばれるだけあって、部長、副部長はそれなりの成績持ちだな。あと参謀っぽいのがいたか？」

「参謀ねえ……。ちなみにそいつはどっち派だ？」

「部長」

「……。部長は誰だ？」

「覚えとけよ、副会長様」

「覚えるから今聞いた」

「…はあ。ほんじょうれいじ本条怜二先輩だ」

「あの人か」

「そうだ。あの本条先輩だ」

言われてみれば、顔を思い出せる人物だった。

ガタイがよくて、顔もそれなりに整ってるので、女子に人気な１人だ。

言葉で語るよりも、行動で示すような人なので、無口な部類の人だろう。

別に人付き合いが悪いような人ではなかったが、広い交友関係をもつ人ではない。

確か、彼をサポートするように横には常にある人物がいたことを思い出す。

あれは確か…。

「ひしめがわ菱目川先輩か」

「お。そうそう！その菱目川先輩が参謀」

高知から返事が返ってくる。

そうか、あの人が参謀ね。

確かに、本条先輩がいて、あの菱目川先輩がいるなら彼は参謀役だろう。

あの人は本条先輩のサポート役だ。

腐れ縁で、小学校から一緒だったか？
ちよっと情報があやふやだな。

学食での出来事を思い出す。

確かにあの時、本条先輩は一緒には居なかった。

ようよう思い出してみると、一緒にいた奴らは空手部部員のような奴だが、柄の悪そうな奴らばかりだった。

偏見かもしれないがな。

「3日後にはオリエンテーリングだからな…ゴタゴタは勘弁だな」

「そうなんだよな。部活紹介だから、奴らも関係してくるし」

「当面は、珠姫には1人にならないように言っている」

「おう…周りの奴にも気を付けてくれるように注意でも促しておくか」

オリエンテーリングさえ終わればどうにかなる。

それは裏を返せば、オリエンテーリングが終わるまでは、こちらも対処のしようが無いということだった。

「…あいつは使いたくなかったんだが…背に腹はかえられないか」
ブツブツと呟いている高知に視線を向けると、とても不本意そうな顔で見られる。

何だ？

何か気に障ることもしたか？

いや、してない！（反語）

「忍を駆り出そうと思う」

「忍？…ああ、お前の弟か。あれ？弟、ここに来ていたのか？」

「そうだ。言う必要は無いと思っていたからな。クラスは違うが、珠姫ちゃんと同じ1年なんだから、彼女の周囲に気を配るように伝えておく」

「いいのか？じゃあ、珠姫に顔合わせしとかなきゃな」

「いや、顔合わせは必要ない！」

「そんな訳にはいかないだろうが。何かあったときに顔合わせしとかなきゃどうにもならないだろう」

「…忍は珠姫ちゃんのことを知っているから大丈夫だ」

「そっちじゃない。珠姫の方が知らない奴には近づかないし、無関心なんだよ」

「その方が、都合がいいんだが…」

「何を言っているんだ？」

「……」

「おい」

「……」

「高知！」

「分かった！分かったよっ！！明日昼休みに生徒会室で顔合わせさせよう！！！」

「？」

怒ったような顔で喚く高知を、エイリアンを見てしまったような面持ちで見してしまう。

高知が何を考えているのか全然分からなかった。

そこで話し合いは終わったのだった。

パタン。

ドアが閉じる音で、意識を今に戻す。

案の定、部屋に入ってきたのは珠姫だ。

入ってきた珠姫を見て顔をしかめる。

「……毎日言っているが、髪の毛をきちんと乾かして来いって言っているだろ」

風呂上りで、明らかに髪が濡れています。と、見える珠姫にため息が落ちる。

いつものことだが、珠姫は髪を乾かしてこない。
風邪を引くとか、髪が痛むとかそういう理由より、もっと俺にとって切実な問題があった。

「そんな濡れた髪で横に寝られる俺の身にもなってくれ」

そういうことだ。

これって地味に辛いんだぞ！
何度夢の国から帰ってきたことか！！

「……」

目に見えてシユーンと落ち込み、悲しそうな顔をする珠姫から目を逸らす。

じーっと見られていることは分かっていたが、見ない振りをする。

「髪を乾かしてこい」

ドアのほうを示してやる。

しかし、俺の求めに応えず、その場に立ち尽くす珠姫。

数秒だったのか、数分だったのか。

結局のところ今日も白旗を掲げるのは俺で。

「分かった。乾かしてやるからここに来い」
「！」

嬉々としてベッドに座った俺の脚の間に腰を落ち着ける。

首に掛けられていたバスタオルを手にとって丁寧に水分をとっていく。

こうしておくとかきが早いのだ。

とれるだけ水分をとって、身体を伸ばしてベッドのサイドからドライヤーを取り出した。

ここに常備されるほどに、珠姫の髪の毛を乾かしている事実には、物悲しさを感じる。

そんな俺を他所に、珠姫は気持ちよさそうに身体を預けきってきた。

…冷たい。

「そうだ…珠姫、明日なんだが、昼休みに生徒会室に来てくれるか」
「うん、分かった」

「篠川と一緒に来いよ」

「うん」

「篠川がもし都合が悪くて、1人だったら、そのまま教室にいてくれ。迎えにいくから」

「ん」

温風に髪をさらしながら、優しく梳く。

気持ちよさそうに目を細めている珠姫の姿が、さながら猫のように見えた。

「終わったぞ」

「…」

「不満そうな顔するな。終わったもんは、終わったんだから」

「…」

「…寝るぞ」

ドライアーを片付けてベッドに乗り上げる。

さっさと寝ようとベッドに潜り込むと、スルリとお布団に入ってくる熱。

面倒くさくなって、何も言わずに目を閉じた。

同じシャンプーの匂いがすると思ったのを最後に、俺の意識は沈んでいった。

29（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

皇紀と珠姫の幼いころの話を急に思いつき、書き始めました。
よければ、そちらのほうも読んでいただけたらと思います。

「珠姫ちゃん来ないな」

生徒会室の唯一ある入り口を熱心に見続けたまま、椅子に腕を預けて高知は言った。

高知の横には、そんな高知を意味ありげに見下ろす、見るからに入りましたといった卸したての制服を身につけた高知の弟が立っている。

「まだ昼休みが始まって5分も経ってないんだが…」

こちら、4時限目の鐘がなると同時に、引っ張られてきたのだ。なんとか弁当を掴んでくことに成功したが、中がシェイクされていて、開けるのが少し怖い。

グチャグチャになっていたらどうしたらいいんだ…。

きっと今、恨みがましい目で見てしまっていることだろうが、当の原因である高知は、生徒会室の扉を熱い瞳で見ているわけであって、

俺の視線に気付くはずもない。

それを楽しそうに見ている高知弟。

…あれ？

そうになると、高知弟も4間目のチャイムが鳴ってすぐにここへ来たということになる。

俺らと変わらないくらいにここに来たよな？

高知は弟に無茶な命令でもしたのか？

「高知弟、今日はすまないな。それと、協力感謝な」

「忍と呼んでください。それに、構いませんよ。それどころか、こちらが感謝したいくらいです」

「？…それじゃあ、忍、これからよろしく頼む」

「いえ、こちらこそ末永く」

につこりと笑顔を向けてくる高知弟…忍に何か引つかかるものを感じたが、スルーすることにした。

最近スルー能力が上がってる気がする。

近いうちにパラッパラッパラ…とかってレベルアップすんじゃない？

何故か高知が熱心に扉に向けていた視線をこちらに向けていた。とても忌々しげな目だった。

今回協力してもらったために、何か取引でもしたのか？

珠姫のためにご苦労なこった。

いや、ここは感謝するところか…後で珠姫にお礼を言わせよう。

結局、そこから5分ほど待ったが、来る気配がないので、教室まで迎えに行くことにした。
高知と忍を置いて。

これは当然だよな。

しかし。

「一緒に行く」

「お供しますよ」

2人ともついてくると言ったが、ここで目立つわけにもいかない。
そう言って、置いてきた。

だつてそうだろう？

何のために生徒会室に集まってると思ってるんだ。

片畑に目を付けられたら厄介だ。

俺は正しい！

「目立つつてお前もだろうが…」

高知がこんな風に零していたが、ワケが分からん。

いや、そりゃあ副会長をしている身として、少しは認知しておいてもらわなければならないが、高知に言われるほどではないはずだ。それに、俺は珠姫の幼馴染だつてことも知られているはずだ。

まあ、上級生が下級生の教室に行くのだから、どうしても悪目立ちはしてしまうが。それぐらいだろう。

そう言ったら、2人同時のタイミングでため息を吐かれた。なにやらムカついたので、高知の頭をはたいておいた。

後ろで悲鳴が上がったような気がしたが、取得している（本当にいつの間にだ！）スルースキルを最大限利用してやったわ！！

1年の教室への最短ルートを進みながら、俺は生徒会室でのやりとりを思い出す。

ああ…思い出すとイラッとするな。
もう一発入れてくればよかった。

思い出していた間に、あつという間に1年のテリトリー内に入った。
2年が1年の教室の廊下にいれば悪目立ちする。

しかし、今は昼食真最中だ。

学食を利用する者は多い。

教室には半分居れば多いいほうだ。

それに、廊下を歩いているやつも突発的な用事（用足しだろ…突っ込んでくれるなよ）で出た奴くらいで、まばらだ。

ちょっと廊下側に面した生徒が気づいて目を瞠ったり、何かこちらを盗み見てコソコソしているくらいだ。

うん、問題ない。

1 - F

ここだ。

前のほうの出入り口から顔を覗かせる。

ザワッ

ん？今変じゃなかったか？

…気のせいだな。

見渡せば、すぐに珠姫は見つかった。

「は？」

そして、その横には篠川の姿が…。

おい、なんで居るんだ？
てか、なんだ。

あのいい笑顔は。

「
…珠姫」
「皇ちゃん！」

意志の力を総動員して珠姫を呼べば、笑顔で珠姫が席を立てて寄ってきた。

それに続く形で来る彼女。

変わらずいい笑顔だ。

「こんにちは。宮ノ内先輩」

「やあ…珠姫が今朝…君に何か言わなかったか？」

「ええ。聞きました。」

「…なんと？」

「今日は昼休みに生徒会室に行くと」

「ほう？」

「そして、一緒に来て欲しいと」

「ああ」

「待っていれば、宮ノ内先輩が来てくれるって」

「…」

これはどういう意味で捉えればいいんだ？

珠姫が、俺が迎えに来るからと言ったのか？

それとも、行かずに待っていれば、俺が迎えに来ると言ったのか？

…

……

……

うん、深く考えるのはやめておこう。
時間は無限ではない。
昼食を食べる時間がなくなってしまう。

それに、なにやら人の視線が痛い。
時間が経てば経つほどに痛いのは何故だ？

「そうか。…遅くなってすまない。出れるか？」
「はい、大丈夫です。」

お弁当を前に掲げて頷く姿が視界に入る。
頷き返して、1 - Fの教室に視線をやる。
全ての視線がこっちにあった。

…

「すまない。昼食の邪魔をしたな」

何も言わないで去るのも失礼なような気がして一言口にして、踵を返した。

うん。聞こえない。

後ろで何やら声が上がった気がしたが、俺は何も聞いていない。

キ イ テ イ ナ イ ヨ ？

珠姫に文句を言えいいのか、篠川に苦言を言えいいのか…。
分からなくて、黙り込んだ。

「珠姫の宮ノ内先輩って人ができてるわね」
「うん」

後ろで聞こえる声にもノーコメントだ。
いや、言えるのなら『珠姫の』ってなんだと突っ込みたい。

そして、何故珠姫は突っ込まないんだ！

…珠姫が突っ込む？

やべ。ありえないな。

まだ後ろの2人は喋っている。

しかし、ここは『忍』の時だ！

そう！耐え忍ぶ時なのだ！！

そう心に言い聞かせて歩けば、あっという間に生徒会室に着いた。

「待たせ」

「こんにちは！珠姫ちゃん！！」

「お待ちしました！」

「…」

生徒会室を開ければ勢い込んで口を開いた2人組み。

「宮ノ内先輩フア～イト～」

「応援どうも…」

すぐ後ろからの篠川の応援に力なく応えた。

「じゃあまずは自己紹介からするか？」

「あら。私、みんな知ってますよ？」

「ふむ。確かに俺も篠川さんのこと知ってるよ」

「俺もです」

高知の言葉に、篠川が答える。
そうすると、高知兄弟が頷く。

と、言うことは、顔合わせしておかなきゃならないのは。

「珠姫」

「なあに？ 皇ちゃん」

「高知の弟の忍だ。覚えておけよ」

「分かった」

よし、これぐらいだな。

1人納得して、さすがにお腹がすいた俺は弁当を広げることにした。
珠姫も俺に続いてお弁当の包みを開く。

「まっ、待ってくださいっ！」

…ランチタイム突入はまだらしい。

視線を向けると、いやに楽しそうな高知と何故か焦る忍。
そして珠姫の隣でお弁当を広げながら口の端を上げる篠川。

「どうした？ 詳しい内容については食べた後にしようかと思ってたんだが」

「そ、そうじゃなくて…」

「いやゝさすが皇！ 期待以上の反応だ」

「素敵です。宮ノ内先輩」

「？」

ワケが分からん。

「あのっ…自分でた…筒井さんに挨拶したいのですが」
「ああ…すまん、気が利かなくて」

そういうことか。

忍は礼儀正しいやつだったようだ。
それじゃあ、あんな一方的な紹介は気にして当然だよな。

納得がいつて、珠姫に声をかけた。

「珠姫」

「？」

「挨拶」

「ん。筒井珠姫です」

「！高知し、忍ですっ。同い年なので、これからよろしくお願いします」

「よろしく願います」

ペコリ

小さく珠姫が頭を下げる。

それに忍も慌てて頭を下げる。

ん？顔が赤いな。この部屋暑いかな？

ああ、窓開けてないな。

「皇ちゃん」

換気をしようと席を立とうとして、袖を引かれた。
見てみれば珠姫がジッと俺を見ている。

これはあれか。

「よく出来ました」

言葉と共に頭を撫でてやった。

嬉しそうに珠姫が口元に笑みを刻む。

キチンとできたら褒める。

これが子どもを育てるコツだ。

挨拶は基本だからな。

…なんか、俺って珠姫の親みたいだな。

年齢詐称はしてないぞ！

俺は正しく、高校2年在籍の男子だ！！

「なんていうか…」

「言ってやらないでくれ…後生だから」

「…」

篠川と高知の声。

俺と珠姫を残して話が進んでいる。
意味は分からなかったが。

もうランチタイム突入してもいいよな？

モグモグモグ…

「今週から学食の甘味メニューに、パフェが増えたんだよ。よければ今度一緒に行かない？俺奢るよ！」

「それよりも近くに美味しいお茶を出す喫茶店が出来たと聞きましたよ！お茶は好きですか？」

「…」

モグモグモグ…

頑張るなあ…。

というか、そうか。

忍は高知と同じってことなのか。

兄弟ってもんは好みが似るのか？

お互いを牽制しながら、2人は一生懸命珠姫を誘っている。

しかし悲しいかな、珠姫はそれを齒牙にもかけない。

それも誘いが食べ物系ばかりだ。

高知兄弟は珠姫を太らせる気か？

確かに、珠姫はもつと食べたほうがいいのだが。

珠姫が食べ物に釣られるってことはないと思うぞ。

じゃあ何なら釣れるのかって言われても答えられないけどな。

俺にはよく分からん。

うちの母親にでも聞けば分かるかもしれんがな。

高知兄弟のお誘いの嵐(?)をボケーツと見ながら、お弁当を食べる。

シェイクされて心配された中身は奇跡的に原型を保っていた。

喜ばしいことだ。

そして、命拾いしたな、高知よ…。

玉子焼きを口にしようと思つて箸で摘んだところで、袖を引っ張られる。

犯人(?)は珠姫だ。

「…」

「…」

「…」

「口で言え」

無言で俺に訴えてくる珠姫にこちらは無言で対応したが、声は上がらない。

時間も惜しくて、こちらから口火を切った。

珠姫が何を求めているかなど分かってはいたが、不精は許さん。

言葉を使え、言葉を！

何のために声や言葉があると思ってるんだ。

「玉子焼き」

「玉子焼きがどうした？」

「玉子焼きが欲しい」

「で？」

「ちようだい」

よし。よく最後まで言った。

…だが、断る！

食べ盛りの男子高校生の食料を奪おうとするとは鬼の所業だぞ、それはいっ！！

と、思いつつも、じーっと玉子焼きをやるまでずっと珠姫は見てくるだろう。

そうするとだ！

絶対、高知の視線（玉子焼きくらい珠姫に捧げろという物言わぬ視線だ…）が俺に突き刺さるわけだ。

どんな試練だ。

…

……

……さらば、俺の玉子焼きよ。

心弱き俺を責めないでくれ。

「ほら」

摘んでいた玉子焼きを弁当箱から持ち上げる。
すると、珠姫の口が開いた。

待て。

慌てて俺は玉子焼きをお弁当箱に戻す。

玉子焼きを半分に箸を使って割る。

そして　　。

パクリ

「美味しいか？」

「ん」

モグモグモグ

咀嚼の音が聞こえてくる。

「……」

無言で口を開ける珠姫。

残った玉子焼きを口にもう一度放り込んでやる。

モグモグモグ

ああ……さらば。俺の玉子焼き……。

珠姫の血となり肉となり、身体のすみずみにいきわたればいいさっ
！！（ヤケ）

「何をしているんだ……皇……」

横合いから高知の声。

なんだ？

微妙に声が揺れているが。

「何って珠姫が玉子焼きをくれというから」

「いやいやいや！」

「？ああ！半分にしたことか？さすがに珠姫の口にそのままのサイズは入らない」

「をいつ！？」

「うるさい。食事も静かに食べれんのか、お前は」

まったく。

何が言いたいんだ、この男は。

その横を見ると、忍が固まっている。
笑顔で。

…ちょっと怖いぞ。

「本当に素敵です。宮ノ内先輩」

華やかな笑顔つきで褒めてくる篠川。

「ありがとう？」

何を褒められたのかは分からぬが、お礼は言っとくべきだよな？

褒められた時は。

「宮ノ内先輩」

「何だ？」

「はい。実は、駅の近くにパフェ専門店があるんですけど、そこに珠姫と一緒に行きたいなって、話をしていたんです」

「へえ？」

珠姫が寄り道ねえ？

珍しいこともあるもんだ。

珠姫は基本、家と学校を往復するだけの日々を送っている。

今まで誰かと何処かに寄って帰るなんて行動をしたことがない。

出掛けるといえば、家に帰ってから母さんに上手いこと誘い出されて買い物に出掛けるくらいだろう。

夕飯の買出しだとか、ショッピングに行ったりとか…な。

珠姫が母さんの都合のいい玩具扱いみたいに見える。

言い方は酷いかもしれないが、本当にそんな風なんだぞ。

だってなあ…この前、母さんが、

「皇ちゃんは男の子だったから、こんな風に着せ替えとかさせてくれなかったのよね」　　「やっぱり女の子はいいわね」

なんて言っただけだぜ？

俺も珠姫も母さんの玩具じゃないってーの！

つと、思ったわけだが、珠姫はこれといって嫌だったとか言わなかったし、それどころか、いろいろ試着して選んだという一品を、学校から遅く帰ってきた俺の前でくると回って披露してくれた。

…あれは珍しい光景だった。

珠姫が服の端を摘んで、はにかんだあの姿は。

ついつい呆けて、母さんに「何とか言え」って新聞紙を丸めたもので叩かれるまで固まってしまったのは記憶に新しかったりする。

…

……うん。脱線してしまったが、なもので、珠姫が自分から興味を示すって言うのは珍しいってことだ。

本当に、母さんはどうやって珠姫を動かしているんだが？

「いいんじゃないか？」

この前のことを回想しながら、篠川の言葉にうなずいた。

「皇ちゃんも」

「は？…俺もか？」

「ええ、ぜひ。実は食べたいパフェっていうのが、特大パフェで、2人じゃ絶対食べきれないんです」

「そうか…」

パフェねえ…。

まあ、甘いもんは嫌いじゃない。

それに、今は2人で行かせるのもまずい。

そうなると答えは決まってくる。

一緒に行くか、片畑の問題が解決するまでやめさせるか。

だが、そこまで珠姫の行動を制限するのもいかなものか。

それこそ、珠姫が珍しくも友人とパフェを食べに行きたいと言っているのだ。

それはいい傾向だと思う。

ならば、言えることはひとつだけだ。

「篠川は俺と一緒に構わないのか？」

「いや、それが珠姫を誘い出すための餌　　んっ！はいっぜひ！来てください！！」

ん？

何やら篠川が小さい声で言ったような気がするが、聞こえなかったが、力強く頷かれて、決めた。

「それじゃあ、行かせてもらうか。でも、オリエンテーリングが終わるまでは待つてくれるか？オリエンテーリングが終わるまでは、生徒会の仕事を立て込んでいて、手が離せないんだ」
「はい。それはもちろん！」

ニコニコと頷いてくれる。

てか、笑顔の大安売りだな。

篠川の笑顔もお高いはずだと思ってたんだが。

男女共に人気だからな。

いくらか女子のほうの人气が高いらしいが。

「珠姫、よかったわね。一緒に行ってくれるって」
「うん。嬉しい」

おお。こっちも笑顔だ。

反対側では高知と忍が首まで赤くして固まってるし…。

珍しい顔ばかりでなにとも。

俺も何か変な顔でもするべきか？

「ご飯も食べ終わって、お茶でまったりと一服中。

昼休みが終わるまであと20分弱。
十分だ。」

「わざわざ今日ここに集まってもらったのは、珠姫のことで頼みたいことがあるからだ」

「何かあつたんですか？」

篠川が聞いてくる。

忍はもう高知から聞いているのだろう。
口を挟まず、傍観姿勢だ。

「篠川は片畑 先輩を知っているか？」

おっと。もうちょっとで呼び捨てにするとところだった。
高知のと言えねえな。

「片畑先輩ですか？… ああ」

遠くに視線をやるその姿から、記憶を探っているのだろうことが窺えた。

数秒も経たないうちに篠川が声をあげる。

「あの、珠姫に告白しに来た36番目の男ですか！無駄に筋肉誇張しくさって…コホンッ…失礼しました。3年生の空手部の副部長さんですね」

36番目って…数えてるのか…。

それに、筋肉誇張って…。

ははははは…。

いやだな、君たち。

俺は、何も聞いていないぞ！

「…それで合ってる」

「そういえば、この前、宮ノ内先輩の教室に乗り込んだって聞きました。まさか、珠姫の『皇ちゃんに聞いてください』とかいうあの台詞を真に受けてとか？いや、さすがにそんな馬鹿なことはいらないですね」

「…」

俺と高知は無言でそれに答える。

俺らの無言に、篠川の口元が微かに引きつったのを見てしまった。

「…大馬鹿だわ」

その通りである。

「はあ…なんていうか、とっても迷惑」
「…」

一通り話し終わり、篠川の感想がこれだ。

とっても迷惑。

本当に、その通りだ。

こんな忙しいときにあの筋肉馬鹿が。

コメントは差し控えさせてもらったが、心の中で大いに同意した。
そんな時、視界の隅で忍が身じろぎするのが見えた。

「宮ノ内先輩」

「なんだ？」

「はい。実は同じクラスに空手部のやつがいます」「もう部活やっているのか？」

早い奴もいたもんだ。

いや、やりたいことが決まっているってことはいいことだ。

「いえ、推薦で入ってきたやつなんで。入学するより前から練習には参加しているようです」

「ああ！推薦か。確かに推薦ならもう部活始めていておかしくない」

「ええ。兄貴から昨日のうちに話を聞いていたんで、今日、ちょっと話しかけてみました」

「どうだった？」

「…かなり部活中の空気は悪いみたいです。さすがに練習中に言い争いはしないらしいんですけど、練習の前と練習の後は綺麗に部長派と副部長派に分かれてて、1年のそいつにとったら、スゲー居づらいつて言っていました」

「どっちのほうが多いか聞いたか？」

「はい。部長派對副部長派で5：2つてところです」

一応、部長派のほうが人数多いわけだ。

「でも、副部長派の奴らはガラが悪いのばかりだって言っていました」

「…」

ガラ悪いのばかり…そういう奴からの人望しかないってことか？悪いが納得してしまった。

「練習態度とかは？」

「まあ…概ねはきちんとやってるかと」
「概ね…ね」

思い出すのは学食でばったり出会ってしまった件についてだ。
よくよく考えてみると、たかが練習の合間の休憩時間にパンなど買
いには来れるはずもないと思に至る。
普通、運動部の生徒は部活前に食料を手に入れるに不足だ。

なんであの時気付かなかったんだが。
ちよつと自分に呆れた。

昼休みの時間いっぱい使って話をつめる。

珠姫には引き続き1人で行動しないように伝え、篠川には教室にいる間のフォローを。

忍も同様だが、それ以外にも空手部の情報などを集めてもらうことになった。

「授業が終わって、すぐ帰れば部活をしている奴らとかち合うことは無いはずだ。珠姫、早めに帰れよ」

「ん」

「篠川もすまないが、オリエンテーリング終わるまでは珠姫のことを頼む」

「分かりました」

「忍」

「はい」

「何かあれば高知にでいいからすぐ知らせてくれ。それと、篠川にも気になることとかあれば直接伝えてくれると助かる」

「了解です。…筒井さんにはなくて、篠川さんにですね？」

「ああ…珠姫に言っても意味無いからな。篠川に頼む」

「…了解です」

「あら？私じゃ不満なのかしら」

「いや…そんなことは」

「ふふふ」

キラリと光る篠川の目。
やべっこえつ。

「皇、時間」

「おう」

時計を見れば鐘が鳴るまであと数分。

「じゃあ、何かあれば即連絡ってことで…」

「即連絡ってことなら、宮ノ内先輩の携帯番号とか教えてください」

「あ、俺もお願いします！」

「そうだな」

確かに連絡を密に取りたければ、携帯番号は教えておくべきだ。
ついでにアドレスも。

しかし、時間がない。

悠長にしてたら、授業に遅れてしまう。

これでも生徒会長と生徒副会長だ。

授業に遅刻するのは体裁が悪い。

「珠姫」

「はあい？」

「篠川に俺の番号とアドレス教えといてくれ」
「ん」

「高知」

「了解！忍には俺から送っておく」

「あの…筒井さんの携帯番号もよければ…」

忍が緊張した面持ちで言ってくる。

珠姫の携帯か…。

そりゃあ、好きな奴の携帯番号とか知りたいよなあ…。

だが

「教えてやつても構わないと、言いたいところではある」

「はい！…え？」

俺の言葉に喜色に溢れた忍だが、俺の台詞を理解したのか疑問符があがる。

「珠姫は携帯を持っていないんだ」

「そ…そうなんですか」

明らかにテンションの下がる忍に、素直だなと感心する。そして、高知と同じだと心の中で笑ってしまった。

実は、すでに高知からも珠姫の携帯番号を教えろと言われていたのだが、持っていないものは教えようがない。

ありのままに伝えると、高知もがっくりと肩を落としていた。

母さんも珠姫に携帯を持たせようか悩んでいたな…。

珠姫に聞いたらしいが、それほど興味がなかったみたいで、返事はいまひとつだったようだ。

そのため、毎日ではないが、澪さん 珠姫の母親から家に夜電話がくる。

…電話か。

外に出て行くタイプではない珠姫には必要ないと思っていたが、多少なりとも交流関係が広がっていけば、あつて困るものではないのかもしれない。

じつと俺を見つめてくる珠姫の視線を感じながら、思う。

母さんに話してみるか。

ここでいつまでも考えていても埒は明かない。
そう思つて、思考を閉じる。

「珠姫の携帯に関しては考えてみる」

「え？」

「ああ？」

「はい」

忍、高知、篠川の順で声が上がる。

篠川だけは疑問の声ではなかった。

色々と、珠姫と俺のことを理解しているようだ。

本当にいい友達を手に入れたもんだ…

「おい、皇！」

「宮ノ内先輩っ！」

やっと理解したのか、高知兄弟が爛々と光る目で俺に迫ってくる。
うん。鬱陶しい。

「だが、早くてもまだ先の話だ。周囲に気をつけてくれ」
「おう！」

「了解です！」

力強く頷いた高知兄弟の声を最後に、解散と相成った。

明日はオリエンテーリング。
これといって問題なく時間は過ぎた。

表向きは。

「……」

「副会長、空手部がオリエンテーリングでの時間を増やしてほし
いって言うてきてます」

「今さら……考えてみるって言うって」

「わかりました」

「会長」

「あー？」

「食堂のほうで、小競り合いが勃発しているそうです」

「そんなのは、風紀に言えって」

「風紀からの要請です」

「……か……っ……っ！！出てくる！」

「おう……」

高知が目に見え立ちを浮かべて生徒会室を出て行く。
それを見送る俺の前には積み重なった書類と各部から回ってきた要
求書だ。

地味で小さな嫌がらせを俺たちは受けていた。

俺たちは1分1秒さえも惜しんで事にあたっている。
なので、意外とこの小さな嫌がらせが痛い。

「暇人共め」

口の中で悪態を噛み潰しながら、パソコンに向かい合う。

明日で終わる。

そう胸に言い聞かせながら何とか動いている最中だ。

「体育館の設置終了したぞ」

声と共に入ってきたのは遠山先輩。

その後に続いて姿を見せたのは、星埜先輩だ。

「お世話になりました」

「いんや、そっちの業務のほう全然手伝ってなかったし、他に何かあるなら言ってくれて構わんぞ？」

「そうだね。他に何かあるかな？」

「ありがとうございます。：では、すいませんけどこれ、収めてきてもらえませんか？」

目の前にあった案件の書いた紙を2人に渡す。

渡した紙に目を通した遠山先輩の顔が歪む。

星埜先輩は笑顔だ。

とても意味深な。

「明日がオリエンテーリングだよな？」

「そうですね」

「…こいつらは今頃何を言っているんだ？」

渡した紙は今さらながらに出る順番に対する変更やら苦情。そして要望だ。

俺たちが要望などをほったらかしにしていたとは1ミリも思っていないようで何よりだ。

「んふふ…。何かきな臭いね？」

「…想像通りですよ」

「分かったよ。これは僕らでなんとかしよう」

「お願いします」

とても楽しそうに頷いた星埜先輩に、要望を言ってきたやつらに少しだけ憐憫が沸いたが、自業自得と思って切り捨てた。

俺は忙しいから、優しさなんか求めるなって感じか？

「遠山。上から順番に回っていきこうか」

「お、おう…」というか、分けたほうが効率よくないか？いつものお前ならそう言うだろう？」

「そうだね。でも、今回は裏がありそうだから、遠山1人で回すより、2人で回った方がいい」

「そうか。お前が言うならそういうことなんだろうな」

「理解が早くて助かるよ」

「…どれだけお前に振り回されてきたと思ってるんだ」

「ふふふ」

楽しそうに生徒会室を出て行く星埜先輩のあとを疲れた顔をして追

う遠山先輩。

うん。この2人もいいコンビだ。

「僕が話をするから、遠山は黙って僕の後ろに立っておいてね？」
「あ？分かった」

…。

切って捨てたつもりの憐憫が湧き上がりそうになった。
成仏しろ。馬鹿野郎共

遠山先輩と星埜先輩のおかげで、案件は恐ろしいほどスムーズに片付いた。

他の役員総出で、オリエンテーリングの準備を終わらせ、帰途に着く。

「ただい」

「皇ちゃん！」

玄関のドアを開ければ珠姫が全力で駆け寄ってくる姿が視界に映る。

…お、おい！そのまま来るのか！！

慌てて後ろに片足を踏ん張ると同時に、珠姫の身体がかぶさってくる。

「っ！！」

「おかえりなさい」

何とか間に合い、後ろに倒れこむのを防ぐことに成功した。

セーフだ。コンクリに頭からなんてありえないぞ！

「…ただいま」

ぐりぐりと頭を押し付けてくる珠姫に怒る気力もなく、背中を叩いてそのまま引つ付けたままダイニングに移動する。

「遅かったな、皇紀」

「ただいま、父さん」

ビール片手に野球中継を見ている父さん。

てか、今の状態について突っ込んでくれよ。

…いや、突っ込まれても余計に疲れるか。

「皇紀、おつかえりなさい　まあ！皇紀ってば、ちゃんとお姫様抱っこしてあげなきゃ」

「…何がお姫様抱っこだ」

分かった。

これは母親の入れ知恵だ。

珠姫が自分でこんなことをするはずがない。

疲れて帰って来た息子に、どんな仕打ちだ…。

「母さん、ご飯」

余計なこととは言わず、ダイニングの入り口付近に鞆を置いて洗面所に移動する。

この間、珠姫はそのまま。

手で支えてはいるが、大半は珠姫が自分の力で俺に抱きついていて、意外と力あるんだよね…。

洗面所で手を洗おうとすれば、さすがに邪魔で声をかける。

「珠姫、手が洗えない」

「…ぎゅー？」

「…」

近場から覗き込まれる。

疲れてるんだぞ、俺はっ！

抵抗するのもエネルギーが要る。

そして、そのエネルギーはほぼ空っ欠だ。

「ほら。『ぎゅー』…ただいま、珠姫」

珠姫の願いのままに抱きしめてやる。

ついでに、もう一度帰宅の挨拶をする。

手を離せば、今度は素直に俺から離れた。

「よし」

泡ハンドソープを手に押し出し、手を洗う。

うがい用のコップを使って、うがい。

出来るだけ風邪から身を避けるには必要なことだぞ！

やっておいて、損はない。

口元を手で拭って、振り向けば、珠姫が無言で待っていた。

「…」

「
…」
「…行くぞ」

抵抗するには（以下同文）

貼り付く珠姫を引っさげて戻れば、ホカホカと湯気を立てた味噌汁が俺を待っていた。

今度こそ珠姫を離して席に着けば、差し出される白いご飯。
今日の晩飯はカレイの煮付けらしい。

「いただきます」
「はい、どうぞ」

味噌汁に口をつけると、しっかりと出汁がきいている。
うまい。

使い切ったエネルギーを補給するように、ガツガツと食べる。
ええ、無言で。

3杯おかわりすれば、やっと腹が落ち着く。
いつものゆっくりペースに戻せば、母さんから声が。

「皇紀」

「ん？」

「珠姫ちゃんの携帯のことなんだけど」

「ああ…」

「澪ちゃんからはOKが出たわ。というか、ぜひ購入して、珠姫に
使い方を教え込んで欲しいと頼み込まれたわ」

「…了解」

「真くんは、ぜひ珠姫からのメールが欲しいって泣きつかれたわ」

「……」

メルアドはこれねと、母親からメモを渡される。
無言でポケットにねじりこんで、ため息をつく。

どうしたって出てしまうから、幸せが逃げていくぞとかの突っ込み
はいちいちいらないので、よろしく。

携帯の使い方は教えるのは構わないが、メールを送ることに關して
は、確約できん。

珠姫が小まめにメールしている姿が想像できないんだ。

…真さん、すいません。

善処しますが、来なくても俺を恨むのだけはやめてください。

オリエンテーリング当日。

…この日をどれほど待っていたか。

「これが終わったら…覚悟してろよ」

クククと笑いが漏れる。

奴らをどうするか決めた。

その為にしなければならぬこともつつがなく…だ。

「悪役の顔になってるぞ」

「高知か」

顎を撫でる。

そこまで悪人面してたか？

「授業は午前中のみで終わりだが、やはり帰宅している奴が少ないな」

「そりゃあ、当然でしょ。新一年生のためのオリエンテーリングだとしても、『これ』も立派なうちの恒例行事だからな。そもそも、どこの学校でもやっているオリエンテーリングと一緒になら、俺らは

こんなに走り回ることなんてなかったっつーの」

「まあ…そうだな」

俺の通っている桜ヶ丘高校は、お祭り好きが集まることで有名だ。そして、ここの創立者からして大のお祭り好きだったと聞いている。

なので、ここではどんな行事も普通の枠から離れた仕様になってたりする。

まあ、さすがに入学式と卒業式だけは厳粛に行われるが。

…ちなみに付け加えておくと、卒業式には普通の形式をとっているため、それだけでは物足りなくなってしまうっている生徒たち（教師に、保護者もか？）のためにその後、卒業式第二部なるものがある。

内容は語らんが。

ん？気になる？しかし無理だ。その年々で内容が変わるからな。

あれはその年の生徒会長の采配なので、内容の全ては生徒会長によって決まるものなのだ。

…恐ろしいぜ。

…。

コホン

そういう訳で、今日行われるオリエンティングも各部挙げての新人部員争奪戦の場となり、そしてどの部も全ての力を集結させて挑むので、参加しない生徒も何が出てくるのか楽しみにして来る。

1年生のための行事ではあるが、他の学年が参加してはいけないと

いう縛りはない。

それを証拠に、全ての学年が午前中で授業が終わり、部活動の類もこの時間はしてはいけないことになっている。

： どんだけえって感じだが、桜ヶ丘高校は、祭り（？）のために学校自体がその為に必要な時間調整をしているのである。

自分で言ってて本当に驚く。

ああ、安心してくれ。

別に全ての行事が強制的に参加しなければならないものではない。したいものを自分である程度選んで参加できるようにもなっているからな！

良ければ、来年どこの高校へ行くのか悩んでいるその君！考えてみてくれ！

お祭り好きなら、楽しい3年間になると120パーセント保証できるからな。

「順調だな」

演劇部の劇を観ながらの高知の感想。

演劇部は、毎年恒例の即興劇。

色んな芝居の主演・脇役の名を書いた紙を入れた箱から、適当に1年生に引かせる。

そして、その年ごとに決まった演目を1年生がチョイスした役柄で、演劇部員たちが演じるのだ。

今年の演目は『白雪姫』だ。

まともに上演してれば時間がかかるが、オリエンテーリング用に山場辺りだけを上手く盛り込んで構成されている。

今はもう城から追い出されて、小人たちと暮らしているとこだ。
クスクスといたるところで笑い声があがっているのが分かる。

しかし…。

7人の小人の中に、白雪姫の継母が入ってるのってどうなんだ？
それに、赤頭巾ちゃんの猟師も小人の中にINしてやがる…。

というか、泉の女神が継母役って…ああ…白雪姫に渡されるりんごが金と銀になってしまっている。

『あなたが食べたいのはどちらのりんごですか？ 普通のりんごがいい？ まあ、なんと正直な娘でしょう。どちらもあなたに差し上げます。え？ 知らない？ 食べなさい』

舞台から聞こえてくる台詞に、どっと体育館が沸く。

「今年もなかなか力オスしてるな…」

汗も流れてないのに、つい、顎の下を拭う動作をしてしまう。どう終着をつけるのか分からないから、1秒たりとも目が離せない。

演劇部が終われば、オリエンテーリングの半分が消化されたことになる。

時間もいい塩梅だ。

確かに、連日頑張っただけあって、オリエンテーリングがスムーズに進んでいるのが分かる。

「そうだな…」

「まあ、もうすぐ問題の空手部だったりするけど」

「空手部は、瓦わりのパフォーマンスだったか？」

「だな。…まあ、奴は副部長で、部長は本条先輩だし、問題なく終わるだろう」

「…」

「何か引つかかるのか？」

「ん…」

何事もなく終わる気がしないのはなぜだろうか。

「そうだな」と高知に言葉を返してやりたかったが、返してやれない。

はつきりしない俺の返事に、高知が横から視線をくれるが、漠然とした不安では口に出れることもなく、唸ってしまう。

「歯切れ悪いな。お前の『悪い予感』類はよく当たるんだから、自重しろよ」

…。

何だそれは！

高知の台詞に物申したいぞ！！

『自重しろ』ってなんだっ！

別に感じたくて嫌な予感を感じているわけじゃないんだ、俺はっ！！

「壇上で無様にこけてしまえ」

ボソツと零す。

この場合、呪いの言葉か？

「おいっ！」

ちゃんと聞こえていたらしい。

…まあ、聞こえるように言っただけだ。

「何が起こつてもいいように、心構えはしとけよ」

「…はあゝ。何か起こること前提かよ」

「何も無ければいいんだがな。覚悟してれば、大抵のことは対処できる。そうだろう？」

「…まあな」

俺の言葉に、高知が不敵に笑う。

こいつはそんな顔がよく似合う。

巻き込むだけ巻き込んで、あとはよろしくつてやつじゃない。

こいつは有言実行型で、頼りになるのだ。

だからこそ、面倒ごとに巻き込まれてしまってもいまだに友人関係でいられる。

生徒会長様のお手並み拝見といけたらいいな。

「オリエンテリング前半の部、終了です。これからトイレ休憩10分を挟んで後半の部へ入りたいと思います。始まる前に体育館に帰ってきてください」

進行役の放送部のエースの言葉と共に、生徒たちが動き出す。

足早に体育館を出ていく者が見える。

それは学食に走ったのだろう。

飲み物を買に行ったのか、食い物を買に行ったのかは分からないが。

「あ、珠姫ちゃん！」

高知の嬉々とした声に視線を動かしてみると、こちらに向かって歩いてくる珠姫と篠川。

「おう」

「こんにちは。宮ノ内先輩」

「どうだ？」

「はい。噂で聞いていましたけど、本当に桜ヶ丘高校のオリエンテリングは凄いですね」

「オリエンテリングなんてまだ序の口なんだがな…」

篠川の言葉に苦笑い。

本当に、この学校でオリエンテーリングなんてお祭り道への扉を開けたところだ。

そりゃあ、この日のために、年度変わる前から準備し始める部活も多々あるけどな。

まだまだ触り程度だ。

「はあ、やっぱり凄いですね」

「そうか？まあ、やってみたい部活が見つかるといいな。…いや、決まっていたりするのか？」

「帰宅部で決まっていたりします。…でも、オリエンテーリングのおかげでグラグラしてます。どの部活も見せ方分かっていて、ずるいですよ」

「ははは。そりゃあ、どの部活も部員獲得に必死だからな」

「後半の部もじっくり見て、考えてみます」

「そうしてくれ。篠川は引く手あまただろう。帰宅部では勿体無いと思う。ああ、生徒会にも欲しい人材だな」

「…宮ノ内先輩も天然ですか？」

「は？」

急に黙り込んだ篠川が眉間に皺を寄せて俺を見ている。

いつも奥を見透かせないような笑みなのに…初めて見たな、こんな顔。

なんか悪いこと言ったか？

褒めたつもりなんだが？

「すまないな、篠川さん」

「…どうしてお前が謝るんだ、高知」

「俺が会長様で、お前が俺の部下の副会長だからだ」

「ワケが分からん」

「わからんでいい。お前はお前だ」

「…なんかイイこと言ってるようで、馬鹿にされてる…諦められてる感じが伝わって来るんだが」

「いやいや、とんでもない」

「…」

なんなんだ、本当に。

「皇ちゃん」

ぐいつと袖を引かれる。

視線を向ければじつと見られる。

珠姫の視線が無言で用を伝えてくる。

「お前も大概に口を動かせ。…ほら」
「ん」

ポケットからあるものを取り出す。

そのまま包みを剥いて口に入れてやる。

「もうひとついるか？」

「ん」

今度は手のひらにのせてやる。

珠姫の手の上にはキャラメルが1つ。

俺の大切な糖分である。

頭を使うんでな。

小まめに糖分は摂取しないと頭の回転が悪くなる。
珠姫はそれを狙って来たわけだ。

ポケットからもうひとつ出して、篠川にも渡す。
やけにキラメルを凝視する篠川に、もしやキラメルは嫌いだったかと心配した。

「嫌いか？」

「い、いえ…ありがとうございます」

聞いてみれば、杞憂だったようだ。
キラメルをポケットに入れる篠川を見ていると隣からジト目でみ
てくる高知の視線。

「なんだ？お前もいるのか？」

「お前って奴は…いや、いるけど」

ブツブツいいながら手を出してくる高知の手にものせてやる。

素直に欲しいと言えばいいのに。
いちいち物欲しげに睨むなよ。
まったく。言葉を使わないやつらが周りに多くて困ったもんだ。

困った。

その言葉が今この場に合った感情を表す言葉だろう。

数十分前に時間を戻そう。

10分のトイレ休憩が終わり、後半の部の先発隊である朗読部と手話部合同での部活紹介が始まった。

朗読部が語り、手話部がそれを手話にて話す。合間に今流行のヒットポップを上手いことくみこみながら、ひとつの作品を作り上げてきたその手腕は素晴らしかった。

ひとつ。またひとつと終わり、とうとう空手部の番が来た。

本条先輩が胴着を着込んで壇上に立つ。

すると、後方から黄色い声が上がる。

2、3年女子だ。

言葉の多くない本条先輩の隣に並んでマイクを持つのはやはり菱目川先輩だった。

そつなく流暢に喋る菱目川先輩にも、歓声があがったり、合いの手

の聲があがる。

本条先輩とは違って、こちらは大半が男からではあったが。

菱目川先輩が喋っている間にも、その後ろと舞台の下にこれまた胴着を着込んだ男たちが並び、次々に型を決めていく。

それはなかなか見ものであり、予想以上に楽しませてもらった。

「問題ねえな……」

横で見ている高知からも感心と安堵に似た声が零れたのを覚えている。

気付けば空手部のメインとなる瓦わりに突入した。

3年を中心としたメンバーが、2年が用意した瓦を順番に割っている。

それに生徒たちは、瓦が割れるたびに歓声を上げた。

最後を飾るのは本条先輩と片畑。

しかし、ここで、菱目川先輩から体育館にいる生徒たちに向かって提案があがる。

「見ててやりたくなかった人いるかな？ 実は意外と簡単じゃないの？ とか思っている人がいるんじゃないかな。と言うことで、ここでいきなりの体験タイム！！我こそは！って人を募集するよんっ やってみたい人。瓦の枚数は、1〜3枚の中から自由に選べるよ。好きな子にアピールしたいそのあんだ！これはやるっきゃないっ！！？」

軽快な言葉に、一瞬静まり返った体育館が騒がしくなる。

「瓦割ったら賞品出るんですか？」

「うわ。がめつい奴がいる。てか、まず瓦を割ってから言えよ」

3年だろう男子から声が飛び出し、それに菱目川が軽く返す。

「たくっ……お！1年生から手がっ！！　って、お前は空手部員だろ
うがっ！！」

仕込んでいたのだろう、もう入部している1年の空手部員がまっすぐ手を上げていて、それを扱き下ろす。

そんなこんなで、体育館中を沸かせながら、何人かの挑戦者が壇上に上がり、次々に瓦わりに挑戦していく。

だが、残念なことに瓦は割れず、手の痛みに悶える挑戦者たちがまた生徒たちを笑わせる。

「残念！あ、これ参加賞ね」

そう言つて、菱目川先輩が出したのが飴玉だったのを覚えている。

「ケチ……！」と野次があがれば、「うるせえ！自腹だ！！」と返すその姿は何故だが雄雄しかった。

挑戦者も居なくなり、そろそろトリである本条先輩と片畑が舞台の真ん中に移動しようとしたその時、体育館後方より数人の生徒からの声が壇上に向かって投げかけられたのだ。

「生徒会長の格好いいとこ見てみたいぞ……！！」

「副会長でもいいぞっ!！」

「会長~~~~~!!！」

「副会長~~~~~!!！」

投げかけられた声はまたたく間に体育館中に広がり、コールにかわった。

「やられた」

一瞬の気の緩みを付いたように起こった出来事に、呆然と呟く高知の声が耳に入った。

困った。

その言葉が、今、この場に合った感情を表す言葉だと俺は思った。

しかし、それは俺の感情ではなくて、高知の感情を表しただけであつて、俺はこれといって困惑などしていない。

むしろ、怒りを感じていたりした。

続く俺と高知を呼ぶ声、声、声。

舞台の上では顔を歪ませた菱目川先輩と、多少眉をしかめた本条先輩。

それを見たら、これは予定になかったことなんだと一目で分かる。

そして、その横でにやりと口元を歪ませ、悪意に満ちた顔の片畑がいる。

これは確定だ。

あの最初に俺たちのことを呼んだ生徒たちは、片畑とグルだ。

これは俺たちを貶めるための罠だ。

高知を気に入ってない者はいる。
それは仕方がない。

高知が皆に選ばれた生徒会長であろうと、全ての生徒がそれを支持したわけではないのだ。

支持されていると同時に、高知はやっかまれている。
致し方のないことである。

「だが、それを今、納得できるかは別だろうか？」
「皇？」

どれだけのやつらが、この日のために頑張ってきたと思っているのだ。

空手部だってそうだ。

対応を間違えれば、色んなところに齟齬が出る。

片畑はそれを分かっているのだろうか。

自分の仕出かしたことを。

高知が恥をかけばそれで終わるのか？

答えは否だ。

いや、この場は終わるかもしれない。

しかし、この桜ヶ丘高校での生徒たちの頂点である高知がこんな場

面で失敗を犯せば、今後学校が荒れる。

そんな大げさな？

大げさではないのだ。

桜ヶ丘高校での生徒会長という立場は、想像以上に…一般の生徒が想像できないくらいに過重な責任を背負っているのだ。

だからこそ、多々ある行事の采配を振れる権力ちからを持っている。

「あれがしたいな」

「じゃあしよう」

などと本来は、簡単に出来ないことなのだ。

それを可能にしているのが生徒の代表である生徒会長なのだ。

あいつらは何もわかつちやいない。

誰が自分たちの楽しい学校生活を支えているのかを。

だから、俺は怒っている。

たかだか珠姫に振られて、恥をかかされたぐらいでやってはいけないことを片畑はした。

恥をかきにきたのは自分だということも忘れて。

「仕置きが必要だよな」

この時の俺は怒っていた。

横で見ていた高知が俺から離れるように後ずさりしたほどに。

そして、そんな俺のことを遠くから見ていた珠姫にも、俺の感情の揺れが分かってしまったのだろう。

目まぐるしくどう行動し、この場を治めるべきか脳をフル稼働させていた俺は、珠姫の様子が違うことに気付かなかった。

しかし、珠姫の心の機微を知ったのは、そのすぐ後のことだった。

最初に気付いてコールをやめたのは誰だったのか。

それは多分、珠姫のすぐ側に座っていた生徒だろう。

何も言わず、手をまっすぐに上に伸ばして静止している珠姫。

珠姫を中心として、次第にコールが波のように引いていき、最後には体育館全体が静かになった。

「え…ええと…」

菱目川先輩が戸惑ったように頭をかいてる。

静かになったのを合図に、珠姫が席を立つ。

俺には珠姫がこのあとどうするのか分かってしまった。

何故分かるか？

それは俺にも説明できない。
ただ、分かってしまうんだ。

そして、俺の心の些細な動きを珠姫も、何も言わなくても気付いてしまう。

…少々、厄介だ。

「会長」

高知に顔を向けて、それなりの音量で言葉を伝える。
これだけ静かなら、周囲に聞こえるはずだと判断して。

「何だ？」

いつもと違う呼び方をした俺に、高知が一瞬黙って、それから平静を装って返事を返してくる。

「会長が出るほどのことでもありませんし、俺が行ってきますよ」
「ああ…そうだな。行つて来い」

席を立つて、舞台に近づく。

生徒会役員は舞台近くに席が設けられているのだ。

先に行動に移していた珠姫が、舞台端に設置されている階段を使って壇上に上がる。

菱目川先輩の目の前に行つて止まる。

「こ…これは、これは、可愛い挑戦者？の登場…かな？」

戸惑いつつもマイクで喋り始めた菱目川先輩に、珠姫が頷いた。

その瞬間、体育館が揺れた。

「ちょっといいですか？菱目川先輩」

珠姫に少し遅れて舞台上上がった俺は、菱目川先輩からマイクをもらう。

「オリエンテーリング、楽しんでいただけいるだろうか？」

おおーーーーー！！

なにやらハイになった生徒たちから雄叫び？が。

それに笑みを顔に貼り付けて手を振る。

「ありがたいことに、ご指名？いただいたので、空手部の瓦わりに挑戦させてもらおうと思う」

きや~~~~~~~~~~~~!!

これまた上がる声。

さっきより女子の声が多いような気がしたが、気にしない。
むしろ、男の雄叫びより聞き苦しくなくて結構だ。

「しかし、勇敢なことに、彼女が先に名乗りをあげた。彼女のその
勇氣に敬意を表し、先に彼女の挑戦を見届けたいと思う」

「おい、宮ノ内」

俺の言葉に沸く体育館を横目に、菱目川先輩がマイクに拾われない
ように囁く。

それを流し見て、頷く。

大丈夫だと。

「用意してください」

舞台の真ん中に置かれる瓦。

その数一枚。

男共には1〜3枚の中から選べるようにされていたのだが、どうやら珠姫には一番少ない枚数しか用意されないようだ。さすがにそこらへんは、考慮されたらしい。

しかしだ。

ちらつと珠姫を見れば不満そうな顔。

多分…いや、絶対他のやつらには珠姫が不満そうなのが分からなかっただろう。

それほどに表情はちらとも動いていない。

だが、俺には分かる。

…。

俺、意地悪（悪魔？）だって思われるかもな…。

そう思いつつも、珠姫の不満を解消してやることにした。

「み、宮ノ内?!」

横に積んであった瓦を2つ手に取って、珠姫の前に置かれた瓦に載せてやる。

舞台下からも非難の声。

高知の声が聞こえたのは気のせいだろうか？

…いや、気のせいじゃないだろうな。

苦笑いしながら離れれば、珠姫が周囲を気にせず、瓦に近づいた。足を軽く開き、腰を落とす。

この動作を見て、近くで菱目川先輩が、そして離れた場所で本条先輩が目を瞞るのが見えた。

そう、それは知ってる人が見れば分かる素人とは違う動き。

「はっ！」

瓦に一度軽く右手を当てて、一瞬のうちに上げて振り下ろした。見事に瓦が割れる。

歓声が上がるところのはずだったが、体育館は異様な静けさに満ちた。

きつと、俺以外のやつらには、この結末は想像してない事態だったのだろう。

分からないでもない。

俺はマイクを菱目川先輩に返す。

だが、菱目川先輩の動作はとても緩慢だった。お構い無しに手にマイクを握らせる。

うん、働けよ。お前等の出し物の最中だろうが。
こっちを見た引きつり気味の菱目川に笑顔で頷いた。

「すっ…素晴らしい！！なんと可愛らしい猛者が居たもんだっ！皆、拍手~~~~！！」

あ、ヤケになってる。

そう思っても、フォローする気もなく傍観する。

声につられて皆が拍手しているが、顔は驚愕に染まったまま。

「よ、よければ何か一言」

マイクが珠姫に向けられる。

珠姫が何か言うのだろうか？

いつもだったら何も言わないだろうと思うが、今日の珠姫はいつもと違う。

だから、ちよつと分からない。

どうしたのかとか、どう行動するとか、珠姫の顔を見れば大抵分かるが、言動までは俺も神様じゃないから分からないんだ。
じつと珠姫を見ていれば、口が開いた。

「皇ちゃんを困らす人は許さない」

あれ？もしかして俺がヒロインか？

固まった体育館をそのままに、珠姫が俺の側に戻ってくる。

褒めてくれといわんばかりに、俺を見ってくる。

促されるそのままに頭を撫でてやれば、気持ちよさそうに目を細める珠姫の姿。

ここが何処かも珠姫にとって問題がないらしい。

俺も感覚が麻痺していたんだろう。

こんな衆人環視の真っ只中で珠姫の頭を撫でているんだから。

ここに居ろよと目線で言えば、頷きが返ってくる。

その場を離れて菱目川先輩に近づけば、まだ硬直したまま。

マイクをその手から抜きさって前を向けば、同じように固まった生徒たち。

ところどころに居る教師たちは大半が笑っていた。

うん。これぞ桜ヶ丘高校の先生たちだ。

生徒と同じように固まっているのは、新任だな。

「あゝと…予想外のことに固まっている諸君。人は見かけによらないってことを知って、君たちはひとつ賢くなった。良かったな。…そういうわけで、筒井珠姫に下手にちょっかいをかけないことを俺はここで助言しておこう」

「宮ノ内」

横で俺の名前を呼ぶ声が聞こえるが無視だ。

せつかく珠姫が作った機会？だ。
有効に使わなければ損だろう。

珠姫が俺を守ろうとした結果でもな。

「彼女と進展のあるお付き合いをしたいやつは、俺のところ直談判しに来る前に、自分を鍛えることを勧める。しかし、力のみが強さではないとも言っておこう。…君たちの未来に期待している」

「宮ノ内　っ!？」

菱目川先輩が若干涙目だ。
なんだ？

気のいい先輩でも、男の涙では俺は指ひとつ動かさないぞ？

「じゃあ、俺はそのラインに達しているということだな」

聞きたくなかった声。
自失したままでいればいいものを。

「片畑先輩」

「俺は3枚、瓦を割れる。そうだろう？」

「…そうだな」

片畑が視線をやったその場には本条先輩。

少ししてそれに同意が返り、やつの顔に歪んだ笑みがあがる。

やつは分かっている。

いつも分かっている。

事実、片畑が瓦を3枚割ることができても、付き合う資格があるかどうかを。

もう、一度告白して、断られていることを。

ほんの先ほど言ったように、強さにも色々あって、力だけが強さじゃないのだ。

やつについているあの耳は、ただの飾りなのだろうか？

片畑には、こういつてはなんだが、力しかない。

そんなやつに預けられるものなど、なにひとつない。

口にせず、やつを見ていたら瓦を示された。

「で、お前はこれが割れるのか？」

…。

瓦わりの話はもう終わったもんだと思ってたんだけどな？

片畑の指示で、空手部員が舞台の中心地に瓦を設置する。

どうやら、やはり瓦を割らないといけないようだ。

しっかりと瓦が3枚：4枚積まれている？！

…何故だ？

視線を片畑にやれば、にやりと笑われる。

…お前の歪んだ笑顔なんて見たくないんだが。

よければ永遠にその笑みは封印してくれてもいい。

「俺は、4枚割れるぜ」

ああ…そういうことですか。

…OK、理解した。

自分の力を誇示したいらしい。
脳まで筋肉で出来ているらしい。

可哀相過ぎる。

「…分かりました。 …おい？」

神妙に頷けば、舞台袖のすぐ近くに居た珠姫が。

そして、やってくれた。

俺のために積まれた4枚の瓦の上に、プラス3枚置く珠姫の姿に、俺は苦笑も出なかった。
いや、口元は多少引きつっていたと思う。

「珠姫さん？」

「ん」

「これを割れと？」

「ん」

答えが分かっているにも、人は問わなきゃいけない時がある。
それが今だ。

しかし、無常にも頷き返されてしまえばそれで終わりだ。

「…そうか」

珠姫が満足したように、俺がさっき居るように提示した場所に戻っていく。

ははは…賢いぞ、珠姫…。

そのまま何もせず、そこに居てくれればよかったのに。

盛大なため息をつこうとして　やめた。

いつのまにやら硬直から復活した生徒たちは、固唾を吞んで舞台上の俺たちを見守っている。

見守っている？

いやいや、そんな易しい視線ではない。

ちらりと時計を見れば、あと少しで空手部の時間が終わる。
他より少し長めに時間をとっておいてよかった。

前日にきた時間延長の願いをうやむやにせず、調整していたおかげだった。

無言で見守る？周囲の視線を無視して瓦の前に立つ。

珠姫が先ほどして見せたのと同じように、足を軽く開き、腰を落と

す動作をする。

息を深く、深く、吸って、吐く。

何度かそれを繰り返し、瓦の一番上に手を添える。

一瞬の間。

「せいっ!!」

ドゴッ!!?

…。

……。

…………。

大きな歓声。

俺はやり遂げた。

良かった。

最近、道場に行く暇がなかったので、鈍っている。
なので、全て割れるか心配だったんだ。

当初の予定よりハードルを上げられて焦ったが、何とか頑張って良かった。

珠姫が置いたはいいが、割れなかったでは恥ずかしすぎた。

…よかったぜ。

さて、ここはひとつ、でかい釘を刺しておかなければ。

そう、俺を凝視したまま固まっている片畑に、盛大に釘刺しておかなければ安心できん。

俺にここまでさせたんだ、追い込ませてもらうぜ。

「残念ながら、俺のほうが出来るようですね。申し訳ありませんが、力という単一の強さしか誇れない先輩では彼女を任せられません。一昨日来てください」

「なっ……」

よし、伝えることは伝えた。

伝わったよな？

てか、これで分からなかったら救いようがないというか……なあ？

「菱目川先輩、マイク」

「あ、ああ」

「本条先輩、最後のシメですよ」

マイクを投げれば、危なげなく本条先輩の手におさまる。

「せっかくの出番、取ってしまってますいません」

「構わん」

ここで初めて本条先輩が笑った。

うわ。珍しい。

めったに笑わないことで本条先輩は有名なのだ。

これで俺の運が向けばいいんだが。

それよりも、もしかすると運を使ってしまったのか？

珍しいといつても、男の笑みで運を使い果たしてしまったなんてことになっていたら、枕を涙で濡らすぜ…。

俺の幸運が残ってることを全力で祈ってるぞ！神さんっ！！

「力の強さと、心の強さを同時に鍛えられる部活だと思う。まあ、たまに勘違いする奴も出ては来るが…。興味を持った者は、一度武道館に見学に来てくれ。我々はいつでも歓迎する」

本条先輩の芯の通った声がしっかりと耳に落ちてくる。

いい声だな。

なにかをやゆった言葉が入っていたが、俺は知らん。

今こそ！スルースキル発動！

彼の言葉を最後に、空手部の出し物は無事、幕を閉じたのだった。

「すまん」

全ての部活紹介が終わって、全員での片付け。
あっという間に片づけが終わり、手足となって働いた役員たちは帰った。

反省会はまた後日だ。

そして今は、生徒会室に居る。

そんな生徒会室で、俺は高知に頭を下げられていた。

ズビシッ

「たっ！」

下げた頭にチョップをくれてやる。

トップが軽々しく頭を下げるな！

桜ヶ丘高校のトップの自覚があるのか無いのかはつきりしろよ！！

「素直に謝ってんのに、何してくれんだよ！」

分かってない。

いや、分かっただけやってるのか？

「謝るよりも何か奢れ」

「…了解」

俺の言葉に黙ったと思ったら、苦笑と共に頷かれた。
調子が狂うからやめて欲しい。

「いや、でも凄かったね」

「…星埜先輩」

ニコニコ笑って話に参加してきたのは星埜先輩で、その横で苦笑いしている遠山先輩も居る。

「宮ノ内」

「何です？遠山先輩」

「お前、空手習ってたんだな」

「あゝ…まあ…そんなところですよ」

遠山先輩に歯切れ悪く答える。

俺が習ってるのは空手ではなくて古武術。

これといって、人に触れ回るようなものでもなかったもので、今まで誰かに古武術を習っているなんて、言ったことは無かった。

これからも触れ回る気はない。

古武術を習い始めたのは必要に駆られたからで、仕方なかったからだ。

そう、珠姫を守るために。

珠姫は小さいころから美少女っぷりを発揮していたから、面倒ごとに遭遇する機会が半端なかったんだ。

もれなく俺も巻き込まれるわけだから、身を守る方法を身につける必要性があったわけだ。

なもので、本当に幼い時からやっている。

うん？小さいときにはそんなものは無理だって？

まあ、入った当初は確かに身体に負担のかかる鍛錬など全然したことはない。

だが、それだけが鍛錬ではないのだ。

精神鍛錬。

そういうものを中心に行っていた。

あと体力作り。

これらのおかげで、何かあったときでもまずは頭が動く。頭が動けば身体も動く。

まあ、そういうことだ。

「？あの後は、何事も無く終わったし、よかった、よかった」

深く突っ込まず、無事にオリエンテーリングが終わったことを喜んでくれる遠山先輩は素敵だと思う。

ん？

いや、これはフラグとかいうものでは断じてないぞ！

心配りの出来る遠山先輩を褒めただけだ！

「これでやつらは大人しくなるかな？」

「どうでしょうね…自分たちでまいた種とはいえ、恥をかかされた訳ですし、報復してきそうな気も」

脳内で否定することに必死な俺を置いて、星埜先輩と高知が話している。

「それなんです、俺に考えがあるんです」

慌てて会話に参戦する。

「ほお？」

「何かいい案ありか？」

「ああ。せっかくだし、性根を叩きなおしてもらおうかと」
「は？」

俺の返事に意味が分からないといった顔をする高知と遠山先輩。
その隣でひとり星埜先輩が笑顔だ。
や、それ怖いんですって。

しかし、俺も星埜先輩に負けず劣らずに意地の悪い笑みを浮かべた。

片畑だけじゃない。

片畑に賛同する他の空手部員もまとめて性根叩きなおしてくれる!!

オリエンテーリングから2日経った。

今、俺は武道館の前に居る。

そう、空手部の活動場所だ。

俺の横には高知ともう1人。

高知と視線を合わせて頷きあう。

高知を先頭に、俺たちは武道館に足を踏み入れた。

練習に勤しむ空手部員たち。

オリエンテーリングのおかげか、予想以上に入部希望者が入り、それなりに人数が揃っていた。

俺たちが入っていくと、武道館の中がざわつき、皆一様に練習を止める。

「高知？」

武道館に居た部員たちを代表する形で、本条先輩と菱目川先輩が寄ってきた。

今の状況が分からず戸惑っているのが分かる。

それも当たり前だ。

事前の取り次ぎなど誰にもしてもらっていないのだから。

「練習中に失礼します」

高知が頭を下げる。

…おっと、俺も下げねば。

「高知くん！宮ノ内くん！」

ここで、武道館の奥から新たな登場人物が。
顧問の内山先生だ。

笑顔で出迎えてくれる。

なんか、ほっとするのは何故だろう？

「わざわざすまないね」

「いえ。我々生徒会は、生徒たちのためにあるのですから、気にしないでください」

「でも、言わせてくれ。ありがとう」

「…」

おっとりとした内山先生と高知の会話を聞いてたら和んでしまう。
さっさと本題に入らせてもらおう。

「内山先生、こちらが赤坂伸さんあかさかしんです」
「こんにちは」

俺の紹介と共にビシツと挨拶をする赤坂さん。
彼の名前を聞いて、本条先輩たちを含めた数人が驚いたように目を
瞠る。

「こんにちは。今日はわざわざありがとうございます」

「いえ…これからよろしくお願いします」

「いやいや、それはこちらがお願いすることです！お忙しい身なの
に、この度は引き受けてくださり、本当に助かりました」

「何処までお手伝いできるか分かりませんが、精一杯務めさせて
いただきます」

内山先生と赤坂さんがお互いに深く頭を下げるのをオレと高知は見
守り、本条先輩たちはワケが分からず困惑顔で見ていた。

2人の挨拶が終わり、赤坂さんが空手部のやつらに向き直った。

その瞳は静かだったが、何か相手を射抜くものがあつた。

空手部員たちが一様に固まり、次いで姿勢を正す。

「赤坂伸だ。5年ほど前にこの空手部で主将をしていた。今は実家
の道場で師範をしている。今回、縁あつて君たちの指導にあたるこ
とになった。よろしく頼む」

彼の言葉に空手部員たちがざわついた。

内山先生が彼の横に並ぶ。

「この赤坂さんが主将を務めたとき、桜ヶ丘高校は全国に行き、ベ
スト4入りを果たした。大学に進学し、その間も多彩な戦績を残し
て卒業。社会人となった今、これからを期待された人物の1人だ」

「やはり…」

「すげ…」

内山先生の説明に皆が驚きに目を瞠っている横で、本条先輩が瞳を輝かせているのを発見した。

これも珍しいワンショットだ。

本条先輩のファンがいたら騒いで大変だろう。

俺は女たちのように騒ぐ気はせんがな。

「し、しかしっ！内山先生っ！！オレたちは自分たちで……」

慌てたように声をあげたのは片畑だ。

てか、懲りもせずいたのか。

それに馬鹿丸出した。

「今までは顧問としての私が不甲斐ないばかりに不自由をさせた。よく指導する者がいない中、頑張ってくれたね。ありがとう。しかし、やっと指導にあたってくれるという人物が見つかった今、自分たちを高めるために頑張って欲しいと思う」

：上手いな、内山先生。

横で高知も感心してる。

そして、片畑も反論する言葉も無いのか、口を閉じた。

内山先生も結構やる。

癒し系なだけじゃないってことか。

覚えておこう。

「では、まずそれぞれの強さを見たい。乱取りをしようと思う。準備をしてるので、用意して待っていてくれ。主将は？」

「はい。本条といいます。よろしく願います」

折り目正しく頭を下げる本条先輩に、赤坂さんの印象もよかったようだ。

男らしい笑みに迎えられる。

武道館の隅に寄って、その様子を見ながら、俺は横で話している高知と内山先生のほうへ耳を傾けた。

「何とかなりそうですね」

「そうだね。」

嬉しそうな内山先生に、一仕事終えたような高知。

いつの間にやら、いつもどおりの内山先生に戻ってる。

「しかし、よく赤坂さんを引っ張ってこれたな、皇？」

おっと、話を振られたか。

…内山先生までそんな尊敬した眼差しはやめて欲しい。

「はあ…まあ…お世話になった道場の先生に頼んでみたら思った以

上に人脈が広がって…な」

歯切れ悪く答える。

そう威張れるものじゃないんだ。

人の力を借りまくりだからな。

それも、最近ご無沙汰してたから、思った以上に搾られて大変だった…。

こっちの仕事が一段落したら、当分小まめに通うように命令されたし…。

…やべ、落ち込むわ。

思った以上の犠牲を払わされたことに気付いた。

これはなんとしても、片畑らをしっかりと矯正してもらわねば…！

心で今後の予定を立ててれば、本条先輩と話し終った赤坂さんが近づいてきた。

「宮ノ内くん、どうだい、一緒に？」

「は…いい？！…いいえ！遠慮しておきます、はいっ」

笑顔でとんでもないこと言われた！

引きつりながらも断る。

冗談じゃない。

正直な思いだ。

何故にこんなところで汗など流さねばならんっ！

「そうか…残念だな」

「は…はは…」

そんな残念そうな顔はやめてくれ！

高知が何か言ってきたらどうしてくれるんだ！！

「おい、皇」

「だが、断るっ！！」

「…何もまだ言っていないんだが」

「…」

タイムリーに高知に呼ばれて、つい力強く断ってしまった。

ははは、ドンマイ オレ！

「ははははは…すみませんね。会長」

「…分かった。俺が悪かったからその笑顔はやめてくれ」

よし！俺は勝ったぞ！！

何か勝負したつもりも無いがな。

…うん、壊れっぷりがひどくなる前に退散したほうがよさそうだ。

約束もあるし。

「内山先生、申し訳ありませんが、今日はこれから予定がありました」

「え…ああ！うん。今日はありがとう！！」

「…赤坂さん、これからよろしく願います。色々…」

「おう。期待に添えると思う。任せてくれ」

内山先生に暇の言葉を向ければ、なんとも可愛らしい返事。
：オレより年上の男のクセに。
そしてそれが似合うから困る。

いや、そのほやんとした空気で生徒たちを癒してくれ！

赤坂さんもニツと笑って頷いてくれた。

話はどうかやらちゃんと通っているようで何よりだ。

無視された形になった高知がブツブツ言っているのを無視：したいところではあるが、思い留まる。

「高知」

「なんだよ」

「話、聞いてただろ。今日はこれから用事があるから後は頼む」

「急だな。：分かった。こっちはまかせろ」

「おお。頼もしい」

「当然。で、何の用事だ？」

「あ？ああ：珠姫の携帯を購入することになったんでな。今から携帯ショップに行くんだ」

お許しも出たことだし、早く買いに行かないと真さんが怖いからな。
今か今かと待っているそうだ。
母親いわく。

ジリジリと携帯を目の前に佇む真さん。

うわ：想像出来るから余計怖い。

「んなっ！おいっ！俺も行くぞっ」

想像でブルっていれば、先ほどの発言を翻した高知が詰め寄ってくる。

近い。

男と接近なんて冗談ではない。

ぐいっと押しやる。

「阿呆。今さっき『まかせろ』と、頼もしい返事をしたくせに、何ふざけたこと言ってるやがる」

「ずりいぞ！先に用事について言ってくれば、言わなかった！」

生徒会長様が何言ってるやがるんだ…。

「ともかく一緒に」

「断る」

一言の下に切って捨ててやる。

「人でなし！鬼！冷血漢！！」

「ほお？」

嗤ってやる。

そうすると、途端に面白いくらいに固まる。

高知をそのまま放置して、俺は内山先生と赤坂さんに頭を下げて武道館を後にしたのだった。

「怖いな」

「そうですねえ。でも、この会長にして、あの副会長ありますよ？」

「ああ、確かに。ぜひともまた話をしたいですね」

「ええ。指導に来てくだされば、また機会もありますよ」

俺が去った後、ほのぼの(?)と話す内山先生と赤坂さんの姿と、未練がましく武道館入り口を見やる高知の姿が、武道館の中でみられたとか。

「ありがとうございました」

携帯シヨップの紙袋を片手に、珠姫と歩く。

「家に帰ったら、使い方教えるからな」
「ん」

家に一番近い携帯シヨップに行った。
機種は俺と同じで、色違い。
これなら、俺も珠姫に教えやすい。

日も暮れかけて、薄暗くなってきた。
街灯が道を照らし始める。

珠姫がオレの制服の裾を引っ張った。
何事かと立ち止まり、視線をやれば、珠姫の視線は小さな公園へ。

その公園は珠姫と幼いころによく遊んだ場所だった。

懐かしい。

傍に居る珠姫と公園を交互に見て、長い月日が経ったのを実感する。
珠姫と離れてから俺がここで過ごしてきたように、珠姫も離れた場所
で長いこと過ごしてきた。

その事実が確かにあるのに、俺は今、昔と同じように珠姫と一緒にいる。

何故か不思議を感じる。

珠姫が横に居るといふ当たり前の日常を過ごしている今の俺には、珠姫が横に居なかった時間が夢の中の記憶のように曖昧に思えた。

「公園寄りたい」

ボウツとしてれば、珍しく珠姫が言葉で意向を伝えてきた。導かれるままに公園に足を踏み入れる。

時間が時間だけに、人っ子一人居ない。

小さな公園の敷地に、詰め込まれたかのようにブランコと滑り台があった。

昔は砂場もあったのだが、衛生面からなくなってしまったと、この公園で遊ばなくなって数年後くらいに何処かで聞いた。

水のみ場があつて、それで全部だ。

公園を囲うようにどんぐりの木が茂っている。时期的にどんぐりはまだ無い。

よくどんぐり集めをして遊んだ事を思い出す。

「そういえば…」

思い出した。

細かい理由は思い出せなかったが、公園でどんぐり集めをしているときに何歳も年上の悪ガキに絡まれた日の事を。

珠姫に手を伸ばしてきたやつらから俺は珠姫を庇った。

生意気だと押されて尻餅をついた。

これはもう抗戦するしかない、意識をかえて飛び掛ろうとしたとき、俺の後ろからどんぐりが飛んでいった事を鮮明に思い出す。一番前に偉そうに立っていた悪ガキの顔に当たってどんぐりが地面に落ちた。

やつらの顔は面白いほどに間抜け面になっていた。

「珠姫がどんぐりを投げてくるとは思ってなかったんだろうな…」

あの後には怒涛のようだった。

珠姫が集めたどんぐりを次から次へとやつらに投げた。コントロールが良く、顔めがけて投げられるどんぐりが、思いのほか痛かったらしく、逃げ惑うやつらに異変に気付いた大人がやってきて、その場はおさまった。

「大概、珠姫もやられっぱなしじゃ無いんだよな」

笑いがこみ上げた。

思い出している間に、珠姫がブランコに移動していた。

「皇ちゃん」

呼ばれてブランコに近づけば、座るように言われる。

…ブランコで遊ぶような年でももうないんだが。

珠姫に従って座れば、その膝の上に珠姫が乗ってきた。

「もうひとつあるんだから、そっち乗ればいいのに」

「やだ」

「さいですか…」

抵抗するのも面倒で、そのまま軽くブランコを揺らす。

キィ…

連結部分のところから擦れる音が聞こえた。

「皇ちゃん」

少しの間ブランコを揺らして黙り込んでいたらまた名前を呼ばれた。

「なんだ」

ブランコを揺らすのをやめずに問えば、珠姫が俺に預けていた身体をより一層押し付けてきた。

「好き」

珠姫の声が静まりかえった公園に落とされた。

「…そうか」

「ん」

幼いころから毎日のごとく珠姫に贈られてきた言葉。そっぴいえば、再会してから初めて言われた。

まあ、年齢的に毎日言われたら困っていたと思うが。

久しぶりに耳にしたストレートな親愛の情に、顔に笑みがのぼった。

「俺も珠姫が好きだよ」

「ん」

俺たちはそのまま公園で少しの間、ブランコで揺れ続けた。

50（後書き）

一応、この回でオリエンテリング編は終わりです。

この後、いくつかのこぼれ話をアップした後、次の話を始めるまで、エンドマークをおさせていただきます。

長くあけるつもりは無いのですが、もしかすると、再開まで少しかかるかもしれません。

よろしければ、お付き合い頂けたら幸いです。

いばれ話01（前書き）

珠姫の携帯購入によって、こぼれたお話。

いばれ話01

「ん」

「…なんだ。その手は？」

お弁当を食べ終わって気の置けない仲間たちと話をしているところに高知がやってきた。

短い言葉とともに差し出された手。

その手を見て、視線を上にあげる。

ワケが分からん。

珠姫とは違ってお前の意図は分からないだから、きちんと口で説明しろよ。

じろりと睨めば、高知も負けずに睨んできた。

本当に、ワケが分からん。

急に勃発した緊迫した雰囲気、クラスメイトたちが何事かと注目してくる。

それに顔をしかめたのは俺だ。

「その手は何だ。口ではつきりと言え」

もう一度、問う。

そうすれば、何故分らないんだとばかりに、ため息をつかれた。

ため息をつきたいのはこちらのほうだ。

本当に、何故こいつはこんなに偉そうなんだ？

「ケータイ」

「…は？」

「携帯。携帯電話！昨日買いに行ったんだろ。珠姫ちゃんの」

「あ？…ああ。そうだな。買いに行ってきたな」

しかしそれがどうしたのだ？

そう思ったのは俺だけだったらしい。

俺の発言に周りがざわめいた。

何なんだ？

「約束だろ。珠姫ちゃんのナンバー教えろよ」

騒ぎ始めた周囲を放って、高知がもう一度詰め寄ってくる。

「なんで？」

「なんでってお前…」

「あいつの件は片付いただろ。教える必要がない。だから俺は教えない」

「なっ」

やっと理解ができて、返事を返す。

当然だよな？

あの時は緊急事態だったからあんな事を言ったが、事態が落ち着けば、俺が勝手に珠姫の携帯番号を教える権利は無い。

たとえば俺がここで珠姫の保護者のように認識されていてもだ。だからそう言っただけなのに、俺の答えが予想外だといわんばかりに驚かれた。

ワケが分からんやつめ！

「皇！」

「駄目だ」

「皇~~~~!!」

「俺に聞かずに、珠姫に直接聞いてくればいいだろうが。そこまで俺は制限しないぞ。出来るだろ、有能な生徒会長様？」

少々意地の悪い言い方はご愛嬌だ。

珠姫の携帯には今、澪さんと真さん、父さんに母さんと自宅、そして俺の携帯くらいしか登録されてない。

いや、多分今頃は篠川の携帯は登録されていることだろう。

彼女が珠姫の番号を勝手に流出しないことは分かっているから、安心だ。

それに、きつと下心満載のやつらが来ても、ばっさり斬って捨ててくれていることだろう。

そして、珠姫も購入した今でも携帯に興味が無いから、ほぼ放置だろうな。

（…携帯持つ意味があるのか？ いや、でもまた変なやつが出てきたら…）

もう購入してしまっただけから考えることでもないと思いつつも、考え

てしまうのは人の習性か。

いや、俺の習性か？

深みに入りそうな思考はシャットダウンする。

高知の様子を窺うと、プルプルと震えている。

どうしたんだか？

声もかけずに見守れば、若干涙目でこちらを睨んでくる。
そういう仕草は可愛い女の子がするべきではないのか？
そう考えた俺は悪くない。

「ああ！やってやるぜっ！！お前なんかの手なんて借りねえっ！！
」

一方的に宣言して、高知が教室を飛び出していった。

これから珠姫のところに行くのか？

やる気満々だな。

うん。強く大きくなれよ！

見送った俺を欲望に満ちた目をしたやつらが待ち構えていたのだが、俺はこの時気付かなかった。

見事逆碎して帰って来た高知が、俺に泣きついてくるまで後、数十

分。

珠姫の携帯番号を巡って新たな苦難の日々がやってこようとは、このときの俺は髪の毛の先ほどにも思っていなかった。

斯くも世の男たちは、おろかな生き物らしい。

こぼれ話02（前書き）

これまた携帯購入による、こぼれ話。

いばれ話02

「み、澪さ～～んっ!!」

ある日、とある県のとあるマンションの一室で、喜色に満ちた声をあげながら走る男の姿があった。

生憎：幸運なことに、それを見たのはただ1人であったが。

「近所迷惑よ。マコ」

「うん、ごめん。でね！澪さん、聞いてよ!!」

相手の非難の言葉にあっさりと謝ったが、本当に悪いと思っているのか分からないほどに、男のテンションは高く、やはり嬉々として手に持った携帯を目の前の女性のほうへ向ける。

男のテンションに、このままでは言っても無駄だと判断した女性
筒井澪つづいみおはため息をついた。

目の前で携帯をかかげる男は筒井真つづいまこと。

澪の旦那様である。

「ああ：珠姫からメールが来たのね」

「そう！そうなんだよ！！元気だった！」

男が何をそんなに喜んでるかというと、携帯を初めて購入した最愛の娘である珠姫から、初のメールが届いたからだった。

現在、仕事の都合で、泣く泣く離れて生活している珠姫むすめからのメール。

それも初メール。

常々、『最愛』と恥ずかしげもなく他人に話すほどの娘である。

これが飛び上がって喜ばすにはいられない真であつた。

それを冷めた目で見つめる妻の視線も気にならないのか、たった一言『元気』と書かれたメールを愛おしいものを見るように見ていた。たった一言の素っ気無いメールに、万感の想いが込められているかのように見つめる夫に、澪は呆れしかなかった。

事の起こりは一週間程前。

いつもの恒例となりつつある、珠姫を預かってくれている宮ノ内家への電話からだった。

昔からの親友である亜紀恵のおっとりとした柔らかい声が、受話器から聞こえてくる。

「え…携帯？」

『そーなの。皇紀が珠姫ちゃんに携帯を持たせたいって言うてるの』
「…皇くんが？」

受話器から聞こえた『皇紀』の名前。
皇紀とは、宮ノ内家の愛息子の名前だった。
そして娘の大事な人の名前でもある。

澪も実は、かなり前から珠姫に携帯を持たせようか悩んでいた。
しかし、実際のところ、携帯を珠姫にもたせたとしてもただの置物
と化する可能性のほうが高く、購入には踏み切れずにいた。
そこに皇紀の名前である。

『そうよ。学校でいろいろあるから、連絡がすぐ取れるように携
帯を持たせたいって』

「皇くんが間に入ってくれるならぜひも無いわ！こちらからお願い
するわ！！明日にでも珠姫に携帯を買ってちょうだい！！！」

脳に言葉の意味が届いて、慌てるあまりに亜紀恵の言葉を途中で遮
るように口を開いてしまう。
数秒、受話器の向こう側が沈黙に満たされる。

（皇くんが珠姫につて…素敵よ！！理想の展開だわっ！！）

沈黙にも気付かず、澪は今後の事を思っただけで知らず笑みをのぼらせる。

『澪ちゃん？』

「…へ？…っ！」「ごめんなさい！！すごい理想的な話だったから
つい…」

『もう。…まあ、いいわ。じゃあ、皇紀に許可が下りたって言つと
くわ』

「ええ。お願い。それと、購入した携帯を珠姫が扱えるようにレク
チャーお願いしますって言っておいて！」

『…分かったわ』

その後、珠姫の様子について聞いて受話器を下ろした。

「澪さん、何かいいことでもあったの？」

後ろから聞こえてきた声に笑顔のまま振り向く。
妻の嬉しそうな顔を見て、真も笑みを見せる。

「うん！とつてもいいことがあったわ」

「そうなんだ！何があったの？」

「えゝゝまたのお楽しみ？」

「ウソ…教えてくれないの？」

からかいがいのある夫に、澪は無邪気な顔を装って、首をかしげた。
案の定、情けない顔をした真にコロコロと笑う。

「澪さゝゝゝん」

「ふふふ。嘘よ。実は、珠姫が携帯を持つことになったの」

「えゝゝう、嘘っ！！？だ、だって、持たせても無駄だって…」

「本当よ。だって、皇くんからの要望だもの」

「うわっ！……で、電話っ…電話しなくちゃ！！」

話を聞いて真は転げるように電話に飛びついた。
これには澪も驚いた。

「ちょっ…マコ！」

「うゝん。うゝん。早く出てゝゝ！！」

「…」

短縮を押したのだろう。

受話器を耳に当てて、相手が出るのを今か今かと待つ真。それを啞然と見ながら、澪は口をあけたまま凝視する。

「あーも、もしもしっ！！皇輔さん！ぼ、僕だよ！！真っ！！！！
…うん！珠姫が携帯を持つことになったって聞いて、連絡したんだっ…
…そう！皇くんに頼みたいことがあつてねっ。あの、僕、珠姫からのメールが欲しくて……
うんっ！お願いします！！ありがとう！！！！」

真の天にも駆け上りそんなテンションに先ほどの自分の喜びも彼方へ。

正直、ドン引きしながら、亜紀恵の夫である皇輔と真の（真の声だけ）会話を聞いていた。

ホクホクとした顔で受話器を下ろした真にため息が出る。

（マコは本当に珠姫ラブで困っちゃうわ…いや、私も珠姫大好きだけど。…珠姫がお嫁に行くときどうするのかしら？）

満面の笑みでこちらを振り返る夫を見ながら、澪はもう一度ため息を吐いたのだった。

いつまでも携帯画面を見て幸せそうな顔をする真を放って、キッチンに移動していれば、澪の携帯がメールの着信を知らせた。早々と登録した珠姫のための着信音だ。

どうやら真に遅れて澪にもメールを送ってきたらしい。

これといって夫より後になったメールに文句を言うつもりの無い澪は、携帯を開く。

操作してメールを見れば、夫と同じように「元気」の一言。クスツと笑う。

しかし、その下に添付のマークが。

夫との違いに首をかしげながら添付を開けば、澪の顔に輝かんばかりの笑顔が咲いた。

「澪さんにもメール来たんだね！良かったね！！」

やっと興奮がおさまった真が後ろからやってきて、澪の開けた携帯に注目する。

澪は勢いよく振り向いた。

それに目を瞠る真。

「来た！超可愛いっ！！」

ギュツと携帯を抱きしめて先ほどの装ったものではない、無邪気に笑う澪に、真は目を奪われる。

そして、我に返り、澪の言葉を咀嚼する。

『超可愛い』

それはどうということだろうか？

首を傾げて澪に問う。

ニコニコと携帯画面を真に向けてくる。
画面を見た真は固まった。

澪の携帯画面には、記憶の中より断然大きくなり格好良くなった皇紀と、愛しい珠姫のツーショットが写っていた。
そして、何よりいつも無表情に近い珠姫が、嬉しそうに笑っていた。

「皇く~~~~~~~~ん!!!!!!」
「!?!?」

近所迷惑極まりない叫び声が、とあるマンションの一室であがるのであった。

いばれ話02（後書き）

次も携帯の話になります。

書き始めたら止まらない（苦笑）

いばれ話03

「珠姫ちゃん」

「？」

「真くんにメール送ってあげた？」

「ん」

珠姫は頷いて携帯画面を向ける。

そこには「元気」の文字。

亜紀恵は想像通りのメールに笑いを隠せない。

そして、そんな素っ気無いメールだろうと、狂喜乱舞しているだろう真も想像できた。

「澪ちゃんには？」

「これから」

「そうなの」

珠姫の返事を聞いて、亜紀恵はある事を思いついてニヤリと笑う。

「真くんと同じにするの？」

「ん」

「せっかくだし、ちょっと足さない？」

「？」

「写メについて皇紀に聞いた？」

「んん」

珠姫が聞いてないと頭を振って否定する。
その様子を視界におさめて、皇紀を探す。
皇紀はソファで、暢気にサッカー中継を見ている。

「携帯で撮る写真のことなんだけど、それをメールにつけて送ることができるのよ。せっかくだから、澪ちゃんに送ってあげましよう？」

「ん…」

（あら。そんなにノリ気じゃないわね…なら）

「皇紀と一緒に写っているやつを送ってあげましょ？ 気に入った写真があれば、待ち受け画面とかにも出来るわよ？…ああ、待ち受け画面ってというのは、この開けたときに最初に見える画面のことよ。携帯を開ければ、皇紀の写真があらわれる！ どうかしら？」

「撮る！」

軽々と珠姫のやる気を引き出して、亜紀恵はほくそ笑む。
操作方法を軽く教える。
まずは実践あるのみだ。

珠姫を引き連れて、テレビに夢中の皇紀に近づいていく。

「珠姫ちゃん」

「ん」

「…うわっ！ な、なんだ！！ 珠姫っ」

目配せひとつ、珠姫が頷いて皇紀の膝に突進する。
珠姫の行動に驚いたのは皇紀だ。

抵抗する暇もなく膝を占拠される。

ギョウツと抱きついてくる珠姫に皇紀は目を白黒させていた。

「ナイスよ！珠姫ちゃん！！」

「っ！母さんの仕業かつ！！何してんのっ？！」

「携帯買ったんだから、せっかくだし、写真機能を珠姫ちゃんに教えてあげようと思って？」

「~~~~~！！」

「いいじゃない。珠姫ちゃんが一日でも早く携帯に馴染んでくれれば万々歳でしょ」

「…分かったよ」

文句を言おうとして機先を制されて黙り込み、しぶしぶ頷く皇紀に、亜紀恵は心の中で拳を握る。

「よし。じゃあ、そのまま動かないでね。珠姫ちゃん撮るからそのまま可愛い顔ちょうだいね」

「母さん、それじゃ何処かのエロカメラマン」

「口を閉じなさい、“皇ちゃん”？」

「…」

ガラリと変わった雰囲気と、むしろ変わらず微笑む亜紀恵に皇紀が黙り込んだ。

「ハイ、チーズ！」

ピロリン

可愛らしい音が部屋に落ちる。

「ちょっと笑みが足りないわね」

「…」

「もう一回撮るわ。 皇紀」

「…なんでしょうか、お母様？」

「ギューツと珠姫ちゃんを抱きしめてあげてちょうだい？」

「…」

ため息をひとつ。

しかし、皇紀に否やは許されていなかった。

「うん！可愛いわ！！」

ホクホクと満足そうに笑う亜紀恵と、これまた皇紀に抱きしめてもらって嬉しそうな珠姫は、台所に移動する。

皇紀は、ぐったりとソファに身体を預けてる。

テレビ画面で続いているサッカー中継を見る気力は無いようだ。

「じゃあ、珠姫ちゃんこの写真を澪ちゃんに送ってあげましょう！」
「ん」

「それが終わったら、待ち受け画面の設定も教えてあげるわ」
「ん！」

嬉々として、メールを打つべく携帯をたどしくも操作する珠姫を優しい瞳で見守る。

（これで、珠姫ちゃんが携帯を大事にしてくれるといいのだけど…）

宮ノ内家の家庭内平和を守る亜紀恵は日々いろいろと考えているのである。

この後、血も凍らせよといわんばかりの真の抗議の電話が宮ノ内家へかかって来るのだが、それはまた違う話。

ただ、一言付け加えるのならば、皇紀が「母さん、勘弁してよ……」と、ソファに深く深く沈んだという事実だけだった。

いばね話04（前書き）

何処までひっぱるのか…。

いばれ話04

「珠姫、おはよう」

「おはよう」

「なにか嬉しそうね？」

いつもの時間に学校に登校した篠川綾香^{しのかわあやか}は、出入り口のドアから教室の中を見回し、これまたいつものように窓際の席に座る筒井珠姫を見つけて、挨拶をしつつ、前の席に鞆を置き、椅子に座った。
まあ、当然だ。

そこが彼女の席であつたからだ。

挨拶をすれば返ってくる返事とは別に、今日の珠姫はいつもの無感情さを捨てて、少々フワフワと浮いたような雰囲気纏っているように感じた。

他の者にはいつもどおりに見えたことだろうが、友達宣言をしてからここ数週間、彼女を近くで見てきたのだ。

ちよつとした雰囲気の違いくらいは分かるようになったと綾香は自負している。

「携帯買った」

「わお」

珠姫がなんてことない風に携帯電話を購入したことを口にしたわけ

だが、綾香はそれに思わず驚いた。

「予想より早かったわね…。で、ナンバーは教えてくれるんでしょ？」

「ん」

ピラリと、一枚の紙片が目の前に置かれた。

それには、珠姫の番号であろうナンバーとアドレス。

綾香は口元を弓なりにあげる。

「ありがとう」

紙片をつまみあげて礼を言う。

「で、どんな携帯買ったの？」
「ん」

紙片を胸ポケットに収めて聞けば、これまた机に置かれた携帯。
チエリーピンクの装丁に、上蓋にキラリと輝くビーズの花が咲いていた。

「可愛い。買ってすぐにデコったの？」

「亜紀さんがしてくれた」

「亜紀さん？」

「皇ちゃんのお母さん」

「！」

突然出てきた知らない名前に誰かと聞けば、さらりと珠姫の愛しい人の母の名前が出てきて、さすがの綾香もすぐには返答できない。

「そ、そう…」

動揺を隠せず、少しどもりながらもかえせば、無言で頷く珠姫がいた。

（幼馴染とは聞いたけど、かなり親密なのね。親公認なのかしら？）

まだ出会って少しの、それも無口に近い珠姫の事情を、実は綾香はそれほど知らない。

根掘り葉掘り聞くのも、綾香の意に反していた。

これからでも話を聞くための時間はたっぷりあるのだからと綾香は急いでいない。

「携帯見てもいい？」

「…ん」

考えるそぶりを見せたが、頷いた珠姫に礼を言って、携帯を机から持ち上げた。

買ったばかりの傷ひとつ無い装丁に、自分もそろそろ新しい携帯に替えようかしらと思いつつ、パカリと開けた。

その途端、視界に入ってきたものに綾香はフリーズした。

開けた携帯の画面には、珠姫と皇紀のツーショット写真。

しかしそれだけで綾香が固まるはずは無い。

2人のツーショット写真は、ただ一緒にフレームの中に納まっているというだけじゃなく、珠姫が、皇紀の中に抱き込まれているというもので、それに伴い、珠姫が惜しみなく笑みをこぼしていたからであった。

「っ！…っつ！…っつ！…！！？」

携帯を握り締めて、声を出さずに身悶える綾香。

その姿は、いつもの彼女からはかけ離れた姿で、教室に来ていた生徒たちの視線を奪うには十分だった。

しかし、綾香の奇行は終わらなかった。

携帯を片手に、机に突っ伏し、バンバンと机を叩き始めたのだ。

「~~~~~っ!!!?!?」

その奇行は少しの間続いた。

「はあはあはあ……」

ぐったりと疲れた……しかし、それよりも満足げな顔をして乱れた息を整える綾香がいた。

深く吐いて、深く吸ってを繰り返して、やっと落ち着く。

「携帯」

「あ……ごめん」

手を出されて反射的に謝りながらその手のひらの上に携帯をのせる。ハッと気付けば、携帯は珠姫のポケットの中。

「ああ!……珠姫」

「ん？」

「今の待ちつけ画面のデータ……ちょうだい？」

「だめ」

「ええっ！！やだ！欲しいっ！」

「ぜったい、だめ」

「その画像があれば絶対、私、幸せになれるからっ！ねっ！！ちよ
うだい??」

「これは珠姫の」

この日、ずっとこの光景が繰り広げられるわけだが、その光景に、同じクラスの生徒だけでなく、ほぼ全ての生徒が、珠姫の携帯を購入したことにについて知り、その携帯の待ち受け画面に興味を持つことになる。

皇紀がそのことについて知るのももう少し後のことだった。

いばね話05

「皇~~~~!!」

「くどいつ」

「冷たい！」

「ああ。冷たくて結構だ」

ここ数日続いているこの攻防、今のところどちら也讓る気が無く、終わることなく続いている。

「~~~~~!!」

唸る高知から顔を逸らすと、そこには悪友たちの姿。

「なんだよ」

「お前等も飽きないねえ」

「高知に言えよ」

「まあまあ」

「皇が教えてくれれば終わる話だっつーのに！」

「五月蠅い。黙れ」

ツンドラ気候も真つ青な冷たい声がすべてを凍らす。さすがの高知も黙り込む。

「あ…ははは…」

「まったく。どいつもこいつも個人情報のお守秘義務つてもんを分かってないのか」

「…」

「そ、それよりもだ！俺、聞きたいんだけど」

「何？」

まだツンドラ気候からも抜け出せない鋭い目から視線を逸らしつつ、彼らはここ数日大きくなっていく噂の真相が知りたくて口を開く。

「あー…実はな、姫さんが携帯を購入したことをほぼ全校生徒が知っているんだが」

「そりゃあ、何処かの馬鹿が大騒ぎしてるからな」

『姫さん』というのは珠姫のことだ。

最近、2・3年生では珠姫はこう呼ばれるようになってきた。名前とその容姿的なものをもじっているようだ。

ちらりと皇紀が高知を見る。

気まずげな顔をするのに、少しだけ溜飲が下がる。

「いや、高知が原因とも言えないっぽいんだが」

「…はあ？」

「俺が聞いた話だと、お前たちが騒ぎ始めた日の朝には、1年の学年は皆、姫さんの携帯購入の件を知っていたらしい」

1年。

その言葉に、どこから情報が広がったのか、察知してしまった皇紀だった。

どつぷりと重たいため息を付く。

「…でだ」

「まだ何かあるのか…」

「おう。実は、その姫さんの携帯に垂涎のお宝待ち受けが」

ガタンッ！！

最後まで言わせることなく、椅子が乱暴に引かれた音が間に割って入る。

「」

「こ、皇？」

「…ま、待ち受け…画面？」

「ひっ！」

ゆらりと立ち上がった皇紀に、周りに集っていたやつらがこぞって一歩後ろに下がった。

そんなことはお構いなしに、皇紀はもう一度聞く。

「待ち受け画面がどうした？」

「ひ、姫さんの友人の篠川さんが叫んだって…言っただ…」

「…なんて？」

「それを見れば、『絶対、私、幸せになれる』からって…」

「…」

ゆっくりと席を離れる皇紀。
それに伴い割れる人の波。

「こ、皇？」

「み、宮ノ内っ?!」

辺りの人間の関心の視線など放って、皇紀は教室を飛び出したのだ。
った。

「珠姫」

「皇ちゃん！」

皇紀が珠姫の教室について名前を呼べば、振り向いた珠姫が嬉しげに笑って、席を立つ。

珠姫の席の前に座って、珠姫に向かって拝む仕草をしていた綾香はその姿勢で固まっている。

「篠川、用があるんだが。今、大丈夫だよな？」

「は…ははは…はい…」

乾いた笑いとともに振り向き、悄然と頷いた綾香と珠姫を連れて移動する。

気付けば、また人の波を割るよう移動する皇紀たちがいた。

「で？弁解はあるか？」

「…無いです」

「ほお？」

「…」

「俺は篠川をそれなりに評価していたんだが？」

「…すいません」

「ああ…で？」

「…目先の欲望に負けてしまっ」

未だ悄然とうなだれたまま、綾香は口を開く。

皇紀の顔は怖くて直視できない。

声だけでも氷点下なのだ。

今回の騒動の原因となった身としては、綾香には何も申し開きの言葉は無かった。

いや、言いたいことはあった。

「あ、あのま…」

「…？」

「…」

「…」

「………」

「はつきり言え」

痺れを切らした皇紀に、ヤケになったのか、綾香はキッと睨んで捲くし立て始めた。

「あの待ち受け画面は何なんですかつ！！あの待ち受け画面が悪いんですつ！あんな待ち受け画面、反則ですつ！！何ですか？あの写真はっ！！宮ノ内先輩が、あんな写真を待ち受け画面に許すから悪いんですつ！！！」

「…」

ゼエハア、息をこぼす綾香を見下ろす。
いつもの冷静沈着な姿は片鱗ひとつ残っていない。

「…珠姫。携帯」

「ん」

端的に言って、手を出せば、珠姫が手の上に自分の携帯をのせてきた。

パカッと開けば、その待ち受け画面は記憶にあって、記憶に無い画像が曝し出されていた。

皇紀にその写真がいつ撮られたのかについての記憶はあったが、その仕上がりについては見てなかったので、知らなかったということである。

ここで初めて見たと言っている。

「これが…」

皇紀のこの言葉は、今回の騒動（？）全てを理解したことへのものだった。

（これが澪さんに送られた画像なんだろうな…）

皇紀が、真から命のほとばしりというべき言葉を聞かされた原因と
いふべき画像。

皇紀には、母親の高笑いが聞こえてくるような気がした。

（あのひと…やってくれたよ…）

もう、何度目かの諦めの極致だった。

「珠姫」

「？」

「この待ち受けはやめなさい」

「や」

「珠姫」

「やあ！」

皇紀の言葉には大抵従う（？）はずの珠姫がイヤイヤと、首を振る。
何度目か分からないため息をつく。

（仕方が無い）

皇紀は覚悟を決めた。

「分かった。……じゃあ、もう俺の部屋への出入り禁止」

近づき、珠姫の耳元で喋る皇紀の声は、綾香には聞き取れなかった。耳に落ちた言葉に、珠姫が無表情を消して、ショックを受けたような顔をした。

綾香はその変化を目の当たりにして驚く。

いつもではありえない、目に見える変化だった。

「やだぁあ……」

涙まじりの声。

「その待ち受けがあれば大丈夫だろう？俺が居なくても」

そっけない言葉。

「ちがう！」

「……じゃあ、その待ち受けやめるか？」

「……………ん……」

とても悲しそうな声に、綾香はすぐにでも駆け寄り、抱きしめたいと思う。

しかし、いつの間にか第三者的な立ち位置の綾香には、介入は許されていなかった。

「……いいこだ」

「……」

グリグリと頭を撫でられて尚、悲しそうな珠姫に、皇紀が軽く息を吐いてもう一度、口を耳に寄せる。

「」

変化は劇的。

華のような笑顔。

そして、皇紀の胸元に押し付けられた頭。

「篠川」

「…は、はい！」

「すまないが、あの待ち受けのデータはやれん。すまないな」

「あ…は、い…」

皇紀の言葉に残念と思いつつも、先ほど見た珠姫の笑みで今回は満足した綾香だった。

珠姫に視線をやれば、錯覚かと思うほどに、珠姫はいつもの無表情に戻っていた。

「…元に戻ってる」

納得したつもりでも、納得できない心もまだあって、つい言葉が零れた。

皇紀がそれに笑ったのを見て、慌てて綾香はいつもの顔を取り繕った。

「…この度は、ご迷惑おかけしました」

「いいや。こちら迷惑かけた」

皇紀と分かれて珠姫と教室に戻りながら、綾香は思い出す。

（そう言えば、さっき、宮ノ内先輩なんて言って珠姫を納得させたんだろう？）

思い出したら気になって仕方なかったが、聞いても珠姫が何も言わないだろうと思ったので、聞くことはしない。

当分の間、皇紀の台詞を思い描いて悩むことになるのだが、この時の綾香はその事を知る由もない。

じばれ話05（後書き）

次で携帯のお話は終わります。

いびき話の6（前書）

携帯電話はここまです。

いばれ話06

「」

今日の真は絶好調だった。

仕事の道具を操るその手も素晴らしい。

「筒井さん、なんか機嫌いいよね？」

「そうだな」

「最近そわそわしてたり、落ち込んだり多かったから、いいことじゃないですか？」

「「確かに」」

同僚達がコソコソと話をしている。

しかし、真はそれに気付かない。

「筒井が落ち込むと、何故か機械の調子とかが一気に悪くなるからなあ……」

「本当に……」

数週間前の事を思い出して、彼らは一様にブルリと身体を震わした。

「……このまま機嫌がいいといいな」

「ですね…」
「だね」

彼らは知らない。

真が、愛娘からのメールに一喜一憂している事を。

そして、妻に送られてきたように、自分にも写メを送るように要求して、今日待望のメールが来ることを。

約束を取り付けられ、期待でいっぱいなのだ。

そりゃあ、機嫌もうなぎ上りだ。

「ふんふん」

真の笑顔が眩しい。
そんな時だ。

ピロリロリン

メールの着信音が聞こえてきたのは。
真の目の輝きが先ほどよりもっと眩しくなる。

仕事道具を放り出し、急いで携帯を開くその顔には喜びしかない。

現在、夕方を通り過ぎ、夜に向かう時間。

珠姫からのメールが来ておかしくない時間だった。

「珠姫からだ！」

『やくそく』という文字と、添付のマーク。

にまにまと笑いが止まらない。

周囲に自分がどう見えてるかなんて、真は全然気にしなかった。
添付マークを押す。

「っ！…！？　　つつっ！…！！…！！？」

喜びの表情のまま、フリーズした。

画面の中には、愛娘の大好きな人。
そう、それは構わない。

しかし、最大の問題があった。

そう、珠姫の大好きな皇紀単体しか写ってなかったからだ。
携帯にまだ慣れていない珠姫が一生懸命取ったのであろうちょっと
ななめった皇紀の姿。

考えれば、微笑ましい状況が浮かびそうであるが、真が求めている
のはそんなものではなかった。

「なんでだああああああああああああああああああああああ
あああああああ！？」

真の心の叫びがあがったのはそれからすぐのことだった。

そして、その後、周囲に置かれていた機械という機械が、変な機械音を残し電源を落とすことになる。

真の同僚達が、すきつ腹を抱えて復旧作業に追われることになるのだが、それはここで語ることはない。

いばれ話06（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。
すこしでも楽しんでもらえるよう頑張ります。

いばれ話07

オリエンテーション前に約束していたバケツパフェなるものを現在、
食べに来ていた。

キヤイキヤイと辺りは賑やかだ。

ザツと見回して、女しか居ないのを確認。

「…早まったか？」

つい呟きが零れ落ちる。

目当ての店が、本日割り引きデーだったらしく、篠原が珠姫を連れて誘いに来たのだ。

ああ、約束したな。

と、軽く了承して、学校を出た。

高知に途中会うことも無く、3人で目的地へと向かう。

やつならば、この機会を目ざとく見つけて途中参加するのではない
かと思っていいたのだが、そんなことはなかった。

だから現在、賑やかなるこの店内に男1人。

視線が四方八方から寄せられているような気がしたが、きっと気のせいに違いないっ！

…高知、なぜこんな時にこそ顔を出さないんだっ！役立たずめ！！

「…」

「やっぱこれかな？ 珠姫、これでイイ？」

「ん」

「よし。すいませーん」

無言を貫く俺を放置して、珠姫たちは今回の目的である大型パフェを選ぶ。

というか、種類がいっぱいあることに驚いた。

そして、バケツパフェとかいうものの見た目に、そのままガン見しちまった。

マジすごいんだぜ？

絶対見たらその情景に吞まれるって。

迫力半端ねえ…。

「こ、これを3人で食べるのか？」

「はい。頑張りましょうね」

「ん」

3人で囲んだテーブルの中心に置かれたブツに、嬉々として手を伸ばす2人。

啞然としたままそれを見送る。

「皇ちゃん」

珠姫がコーンに盛られたアイスクリームを俺に差し出してきた。
異常がわかるだろうか？

パフェを食べているはずなのに、コーンに入ったアイスを食べよう
としているんだ。

何故？

何故に、普通にパフェにアイスクリームの一式がぶっさされている
んだ？！

パフェなのか？

それとも普通のアイスなのか？

はっきりしてくれよっ！！

心の中で、休む間もなく突っ込みを入れながら、渡されたアイスク
リームを逆らわずに食べる。

その合間にも、大きくカットされて飾られたフルーツを手にとって、
俺の口に珠姫が持つてくる。

「あーん？」

ザワリ

「……」

パクリ

モグモグモグ…

周りからの視線が痛い。

何故ここまで注目する？

動物園に生まれたパンダの赤ちゃんのお目見えの日みたいだ。

この場合、そのパンダの赤ちゃんは俺だ。

視線を黙殺するべし！

今こそスルースキル全開だっ！！

「美味しいですか？」

につこりと艶やかに笑う篠原に殺意を覚えたりはしないぞ！

「ああ…そうだな」

口の中が空く間もなく寄せられるスプーンを視線で止める。

自分で食べよ。

てか、自分で食わさせてくれ。

そして、そんな残念そうな目で見ないで欲しい。

「…珠姫も食べよ」

俺に食べさせるのに必死で、自分がおろそかになっているのにも気付かない珠姫に呆れつつ、パフェにスプーンを持つ手をのばす。
ジッとその手を見る珠姫。

「…」

「…」

「…ほら」

いつも通りに根負けして、すくったアイスを珠姫の口に運んでやる。素直に口を開ける珠姫。

先ほどと反対に、親鳥のようにパフェの中身を運ぶ。

一生懸命に咀嚼する珠姫に、つい、楽しくなって、自分で食べる事を忘れた。

「宮ノ内先輩」

「…ん？」

呼ばれて我に返る。

視線を移せば、仄かに頬を染めた篠原の顔があった。

「それぐらいで…私が居たたまれなくなってきました…」

「？」

ワケが分からん。

考える合間にも珠姫の口へスプーンを押し込んだ。珠姫も何か言うわけでもなく、口を動かしている。

この後、何かの限界に達したらしい篠原の懇願に、俺と珠姫が各々にバケツパフェの完食に精を出すことになるのだが、それはもうすこし未来の話だった。

いばれ話07（後書き）

あと1、2つでいばれ話終了予定です。

こぼれ話08（前書き）

空手部のその後。

と、いつでもサラリとしか書いてない（汗

これでこぼれ話は終了です。

前にも書きましたが、次の話にいくまでエンドマークにしておく予定です。

しかし、秋には再開予定です。（すぐそのような気がしますが…
よければまたお付き合いいただけたらと思います！

いばれ話08

部活紹介のオリエンテーリングが終わって、2週間が経った。

「どうも空手部が変わってきたらしいぞ」

昼飯を食べ終わって寛いでいるところに落とされた言葉。

情報を持ってきたのは悪友と呼ぶべき1人だった。

そいつはよくこんな風に何処からとも無く情報を仕入れてくるやつだった。

「へえ？」

俺的にはもう終わった件だったのだが、その後の話は少々琴線に触れた。

続きを促す。

情報を持ってきてくれた友の話を要約すると、こういうことだった。

空手部に新しく来た指導者なる人 赤坂さんのことであるが、弛みきった部員たちを全て床に沈めて（！？）一喝し、空手部に新たな風を起こしたとのことだった。

空手部で幅を利かせていた3年の片畑などこてんぱにされたらしい。

いや、とても見たかった。

…まあ、それはさておき、数日のうちに内部の澱というべきモノを一切合切かきだし、綺麗にしちゃったらしい。

師匠に頼んで来てもらっただけの人材であつたようで、とても喜ばしい出来事だ。

心の片隅で気にしていた空手部の件が無事解決したと、懸案事項の項目から外したのであるが、これが新たな面倒ごとを運んでくるなとど、この時の俺は思っても見なかった。

「宮ノ内、頼む」

「勘弁してくださいよ…本条先輩」

空手部の話を聞いた数日後、俺のクラスに本条先輩が訪れたのだ。

あ、一緒に菱目川先輩も居る。

本当にどこに行くでも一緒なんだな。

だが、今はそれどころじゃない。

「一度だけでいいんだ。赤坂さんと試合をしてくれ」

本条先輩の真剣な瞳が素敵だ！とか俺は絶対言わない！！

てか、そんな視線を俺に送らないでくれっ！

周りで起こった女たちの悲鳴に近い声が耳に痛い。

これってどんな責め苦だよ？

そう、現在俺は本条先輩から、空手部に指導に来てくれているOBの赤坂さんと試合をするように迫られている。

何度言ったかわからないが、俺が習っているのは空手ではないのだ。畑違いの願いを言われても困る。

さつきから俺と本条先輩の押し問答がかれこれ数十分。

俺の昼休みに、平穩は無いのか？

そう嘆きたくなる。

「畑違いなことは分かっている。しかし」

「分かっているのなら、無理やり試合させようとしないでください。それに相手はあの赤坂さんですよ。俺にぼこぼこにやられると？」

「そんなことにはならないっ！赤坂さんはいい勝負になるだろうと言っていた」

「あの人は…」

絶対楽しんでる。

間違いない。

それも、本条先輩をけしかけてくるなんてどんな仕打ちだよ。けれども、俺の答えは決まっている。

「本条先輩に頼まれたら断りにくい」

「宮ノ内！」

喜色が本条先輩の顔に上がる。

てか、最近本条先輩の色んな顔を見まくりだな。
本条先輩のファンに睨まれないよな…。

「ですが、お断りさせていただきます」

あげて落とす。

こんなことはしたくなかったが、俺の答えは変わらないんだから仕方が無い。

だから、そんな愕然とした顔はやめて欲しい。

「やるな。宮ノ内」

「菱目川先輩：楽しそうですね」

「いんやあ？俺だって断られて困ってるぜ」

どこら辺が困っているというのやら。

文章として書き出して、提出してもらいたい。

そう思いつつ、「困っている」と、それなりに好印象をもった先輩方に言われたら、救いの手を伸ばすしかない。

「赤坂さんには直接、断っておきますよ」

断ることに変わりはないが、これなら先輩方にも被害はいかないだろう。

ホッとした顔をする2人　ではなく、とても残念そうな顔をした2人？

何故に？

先輩たちの為を思ってた言葉のはずが、どうやらこれといって

助けの言葉にはならなかったらしい。

「本条先輩？菱目川先輩？」

「あー…まあ、そうしてくれると、ありがたい話ではあるんだが、な」

「？」

「俺たちも、宮ノ内と赤坂さんの試合を見たいと思っていた…とても残念だ…」

「…」

…。

しょんぼりと肩を落とす本条先輩から視線を外して、俺は盛大なため息を零すのであった。

「趣味悪いですよ、赤坂さん」
「何がかな？」

放課後になり、生徒会での雑務を終えて俺は武道館に来ていた。そつなく挨拶をして、空手部の練習風景を眺めながら赤坂さんに対峙する。

赤坂さんは終始穏やかな笑顔だ。

それが何より恐ろしい。

「で、ここまで来たのはやっぱり俺と試合をするため　ではなく、断るためかい？」

「それ以外の何があるというんですか？」

「手厳しいね」

「笑いながら言われても、説得力ありませんよ。…先輩方に頼まれた俺が、仕方なしにここに来ることは予想済みでしょう」

「ははは…。まあ、君が彼らの頼みで俺の願いを聞いてくれるなら、此方としては万々歳だったんだけど。そうは上手くいかないね」
「…」

無然とした顔を隠すことなく赤坂さんの次の言葉を待つ。

「では改めて。宮ノ内、俺と戦ってくれないか？」

「お断りさせていただきます」

「一言か…」

「格闘マニアに付き合ってる暇は無いんですよ」

「…本当に君は手厳しいね」

取り付く島など作らない。

俺は戦いたいといった理由から古武術を習ったわけではないのだから。

「赤坂さんと俺はスタンスが違いすぎるんですよ。俺は必要に駆ら

れて武術を習い始めた。だから、その為にしかこの手を使わない」

「彼女のため…かい？」

「聞いたんですか？…そうとも言えますね。だけど、それだけでもない」

「それは」

「言う必要の無いことです」

「…そうか」

ちょっとシリアスな感じになってしまったが、これで終わりだ。

赤坂さんには赤坂さんの思いがあるように、俺には俺の思うことがある。

譲れることと譲れないことはどうしたって出てくる。

そして、今回のことは申し訳ないが、今の俺には、譲らなければならぬことには思えなかった。

ただそれだけだ。

「了解だ。では、またの機会を待とうかな」

からりと笑う赤坂さんは、やっぱり俺より長く生きている分が、硬くなりかけた雰囲気をやんわりと普通に戻してくれた。

「…そうですね。機会があれば」

まあ、あれだな。

俺は赤坂さんを気に入ってしまったらしい。

『機会なんてありません』ときっぱりと言ったところを、こつ返すぐらいには。

それが伝わったのだろう。

赤坂さんが軽く肩を叩いてきた。

「せっかくここまで来たんだし、練習見て行ってくれや」

「嫌ですよ。男どもが暑苦しく汗流すところ見て何が楽しいんですか」

俺と赤坂さんは少しの間、気のおけない友人のようなやりとりを交わしつつ、練習に勤しむ空手部員たちを見守るのであった。

いばれ話08（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます！

少しでも楽しんで頂けていたら幸いなのですが。

皇紀と珠姫のドタバタラブコメディ（いつそうなった！？）はまだ続きます！

少しでも早く再開できるように頑張りますので、再開していた暁には、読んで頂けたらと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1959q/>

皇帝と眠り姫の運命論

2011年8月26日08時45分発行